大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第89集

岩鼻岩陰遺跡

県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

２０１６

大分県教育庁埋蔵文化財センター

岩鼻岩陰遺跡

県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)

2016

大分県教育庁埋蔵文化財センター

岩鼻岩陰遺跡全景（東から）

立石遺構（SX004）と焼土14

序　　文

本書は、大分県教育委員会が、大分県土木建築部豊後高田土木事務所から依頼を受け実施した県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴う岩鼻岩陰遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する豊後高田市は、国東半島の北西部に位置し、半島中央の両子山から放射状に派生する谷が幾筋もみられる起伏に富んだ地形を呈しています。岩肌を露にして屹立する巨岩や奇岩が渓谷の緑と織りなす自然景観は絶景で、四季折々に私たちの目を楽しませてくれます。

また、国東半島には、六郷満山文化と呼ばれる仏教文化が華開いており、豊後高田市にも富貴寺や長安寺などの古刹に加え、国東塔などの石造物が各所にみられます。

本書で報告する岩鼻岩陰遺跡は、間口が約40mで大分県最大規模の岩陰遺跡であります。縄文時代の土器とともに、大量の石鏃や獣骨などが出土しており、岩陰遺跡の性格や縄文時代の生活を考えるうえで貴重な調査例となりました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大なご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成28年３月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所　長　　後　藤　一　重

例　　言

1　本書は、大分県土木建築部豊後高田土木事務所から依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した県道地蔵峠小田原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　本書で報告する岩鼻岩陰遺跡は、平成24年度に発掘調査を実施し、平成25～27年度に整理作業を行った。

3　発掘調査は、実測作業・写真撮影・発掘作業員の労務管理等の業務を発掘調査支援委託業務として株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託して実施した。

4　出土遺物の整理作業や報告書作成に伴う諸作業については、大分県教育庁埋蔵文化財センター職員が担当したほか、遺物の洗浄・注記・接合・実測・トレースについては平成25・26・27年度に株式会社九州文化財総合研究所に委託し実施した。

5　装身具（第146図1739～1757）については、大坪志子（熊本大学埋蔵文化財調査センター助教）の実測・トレースによる。

6　出土遺物の写真撮影は五十川育子（埋蔵文化財センター）による。

7　出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁埋蔵文化財センターにおいて保管している。

8　本書で使用する方位は、いずれも座標北である。

9　整理作業及び報告書作成段階において、綿貫俊一、五十川育子、吉田あかり（埋蔵文化財センター）からご助言・ご支援をいただいた。

10　本書の執筆は後藤一重が行った。また、西本豊弘（国立歴史民俗博物館名誉教授）、遠部慎（愛媛県久万高原町教育委員会）、大坪志子（熊本大学埋蔵文化財調査センター助教）の皆様からは玉稿をいただいた。

11　本書の編集は後藤一重が行った。

目　　次

第１章　はじめに ……1
第１節　調査に至る経緯 ……1
第２節　調査の経過 ……4
1　発掘調査の経過 ……4
2　整理作業の経過 ……4
第３節　調査組織の構成 ……4

第２章　遺跡の立地と周辺の縄文時代遺跡 ……6
第１節　遺跡の立地と位置 ……6
第２節　周辺の縄文時代遺跡 ……6
1　岩ノ下岩陰遺跡 ……6
2　横田遺跡 ……8
3　三六田遺跡 ……8
4　森貝塚 ……8
5　来縄貝塚 ……8
6　高山田遺跡 ……8
7　西村遺跡A地区 ……11
8　寺田卯月遺跡 ……11
9　蕗寺田遺跡 ……11
10　上野遺跡 ……12
11　古城得遺跡 ……12

第３章　調査の概要 ……13
第１節　岩陰の立地と規模 ……13
1　立地 ……13
2　規模 ……13
第２節　調査区の設定と調査方法 ……15
1　調査区の設定 ……15
2　調査方法 ……15
第３節　基本層序 ……16
1　北半（１区～８区） ……16
2　南半（９区～19区） ……16
第４節　縄文時代の遺構・遺物 ……18
1　包含層について ……18
2　遺構について ……18

3　1区……20
4　2区……23
5　3区……26
6　4区……32
7　5区……39
8　6区……46
9　試掘トレンチ2……53
10　7区……58
11　8区……64
12　9区……75
13　10区……82
14　11区……92
15　12区……99
16　13区……105
17　14区……116
18　試掘トレンチ1……127
19　15区……130
20　16区……144
21　17区……152
22　18区……158
23　19区……161
24　その他の遺物……163
第5節　弥生・古墳時代の遺構・遺物……164
第6節　中世の遺構・遺物……165

第4章　まとめ……166
1　岩鼻遺跡出土縄文土器について……166
2　岩鼻遺跡出土石器について……173
3　岩鼻岩陰遺跡利用の変遷……175
4　大分県の縄文時代岩陰・洞穴・洞窟遺跡……182

第5章　付章……190
1　岩鼻岩陰遺跡出土の動物遺体（西本豊弘）……190
2　岩鼻岩陰遺跡出土試料の14C年代測定（遠部慎）……194
3　岩鼻岩陰遺跡出土の石製装身具の化学分析（大坪志子）……197

遺物観察表……203

第１章　はじめに

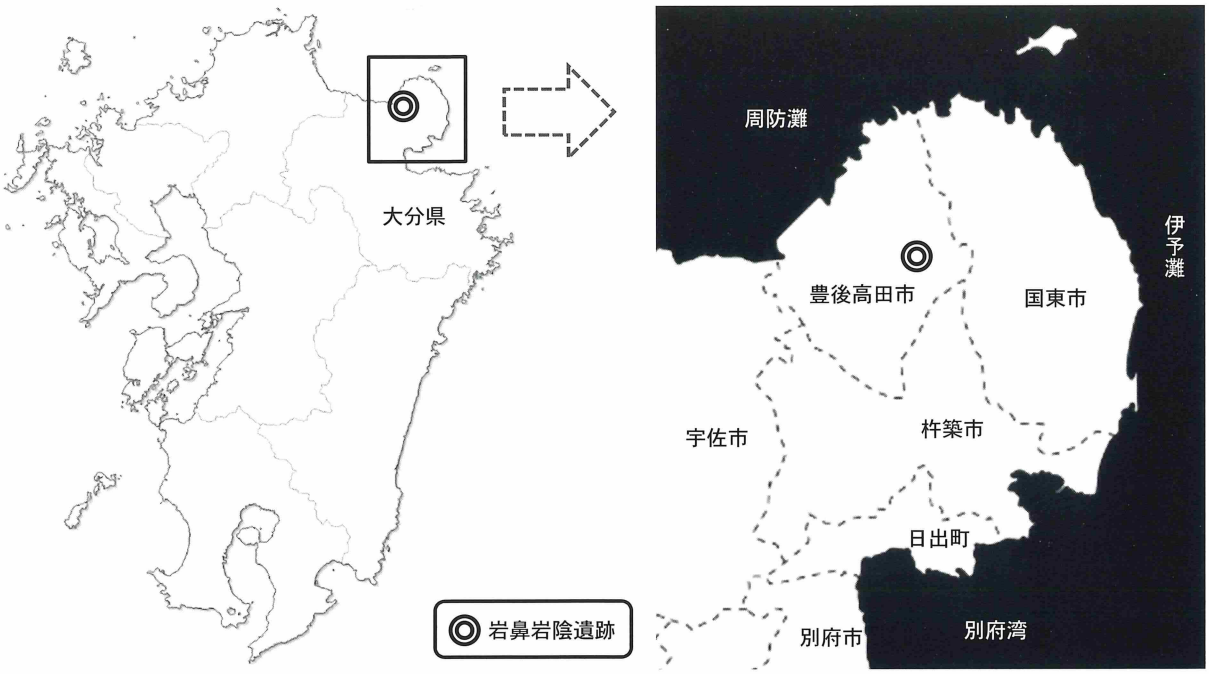
第１節　調査に至る経緯

県道地蔵峠小田原線は、国東半島北西部の山間部を走る主要道路である。起点となる地蔵峠は、国東市国見町赤根と豊後高田市真玉町黒土の間にある峠で、西国東郡と東国東郡の境界に位置する。終点の豊後高田市小田原へは、狭小な谷底平野や山地を縫うように走る。

改良以前の県道地蔵峠小田原線は、道路幅が狭くカーブも多いため、大型車両の離合が困難な場所も多かった。さらに、近年では沿線の過疎化が著しく進行し、高齢化した住民の生活の足としての自動車交通路の確保、また六郷満山の仏教寺院を中心とした観光振興のため、道路整備が緊急の課題となっている。

長岩屋川流域における県道地蔵峠小田原線の改良工事は、下流部から開始された。沿線には川中不動や修正鬼会で知られる天念寺などがあり、国東半島の歴史遺産や景観の保存に配慮しながらの工事となった。大分県教育庁埋蔵文化財センターでは、年度ごとの工事予定地について、県土木建築部と調整を図りながら、確認調査、試掘調査、立会調査を行ってきた。その結果、平成14年には天念寺遺跡内の桑原家墓地の本調査を、平成17年には岩ノ下岩陰遺跡の本調査を各々実施した。

岩鼻岩陰遺跡周辺の改良工事については、平成18年度に次年度工事予定地として県土木建築部から協議があった。県埋蔵文化財センターでは、協議箇所の分布調査を実施し、遺跡存在の可能性が高いので工事に先立ち試掘調査が必要の旨を回答した。試掘調査は、県土木建築部の依頼を受け、周辺部も含めて平成19年7月、10月に実施した。調査は遺跡の性格を考慮し、重機は使用せずに作業員による手掘りで行った。岩陰部分には、2ヶ所の調査区を設定した。崩落石などがあるため、削岩機などを使用し慎重に掘り下げを実施した。その結果、縄文時代前期、中期、後期、晩期、中世の遺物を確認することができた。これらに伴い多くの骨片も出土した。大部分は獣骨と思われたが、一部に人骨の可能性が考えられるものもあり注目された。また、岩陰前面の現県道敷を挟んだ位置にも調査区を設定した。ここは長岩屋川にほどなく至る場所で、岩盤上に中世の二次堆積層がみられたが、縄文時代の包含層は確認できなかった。縄文時代の良好な包含層は、岩陰部分から前面の県道敷にかけて残存することが判明した。

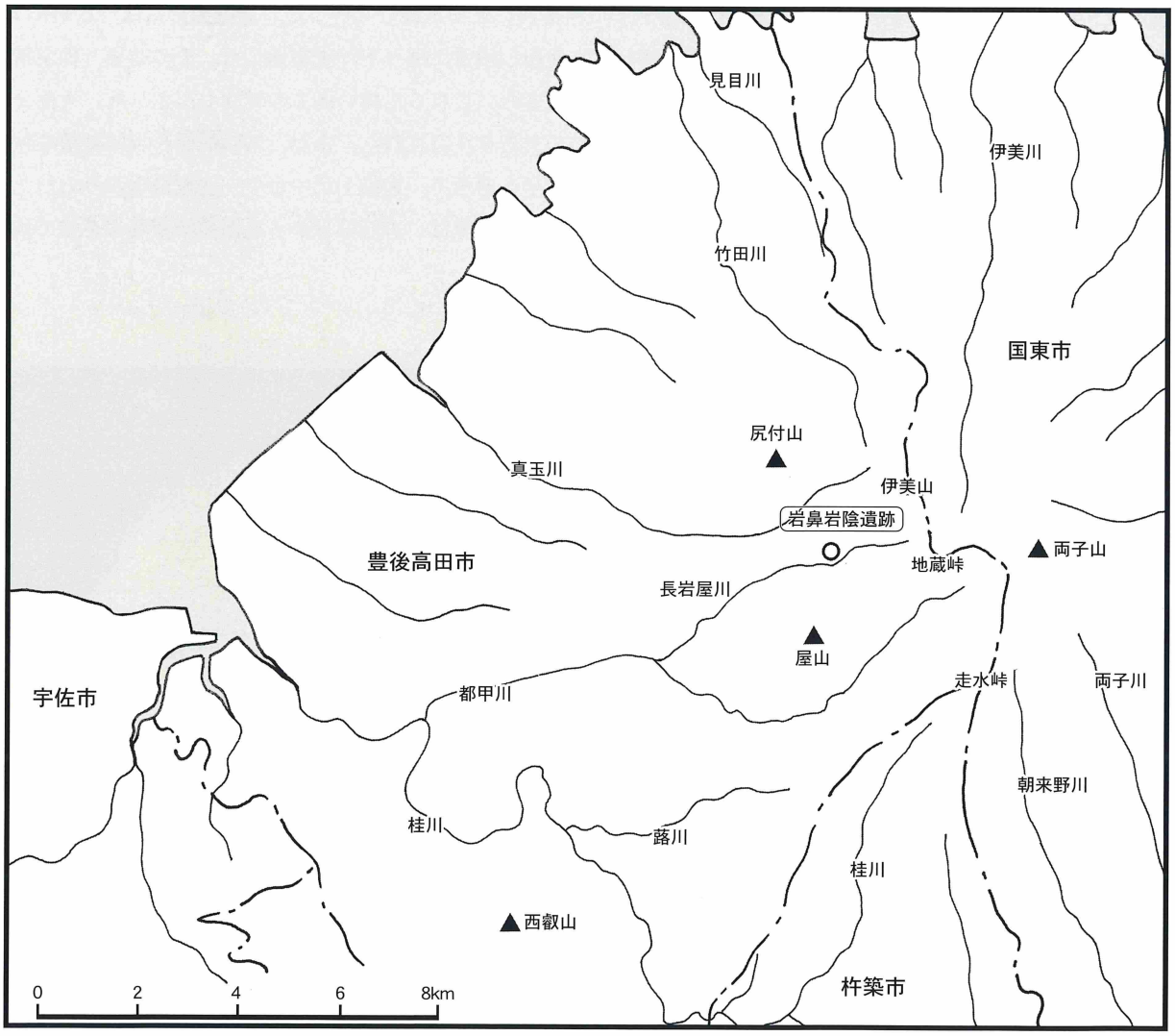


第1図　岩鼻岩陰遺跡位置図（1）

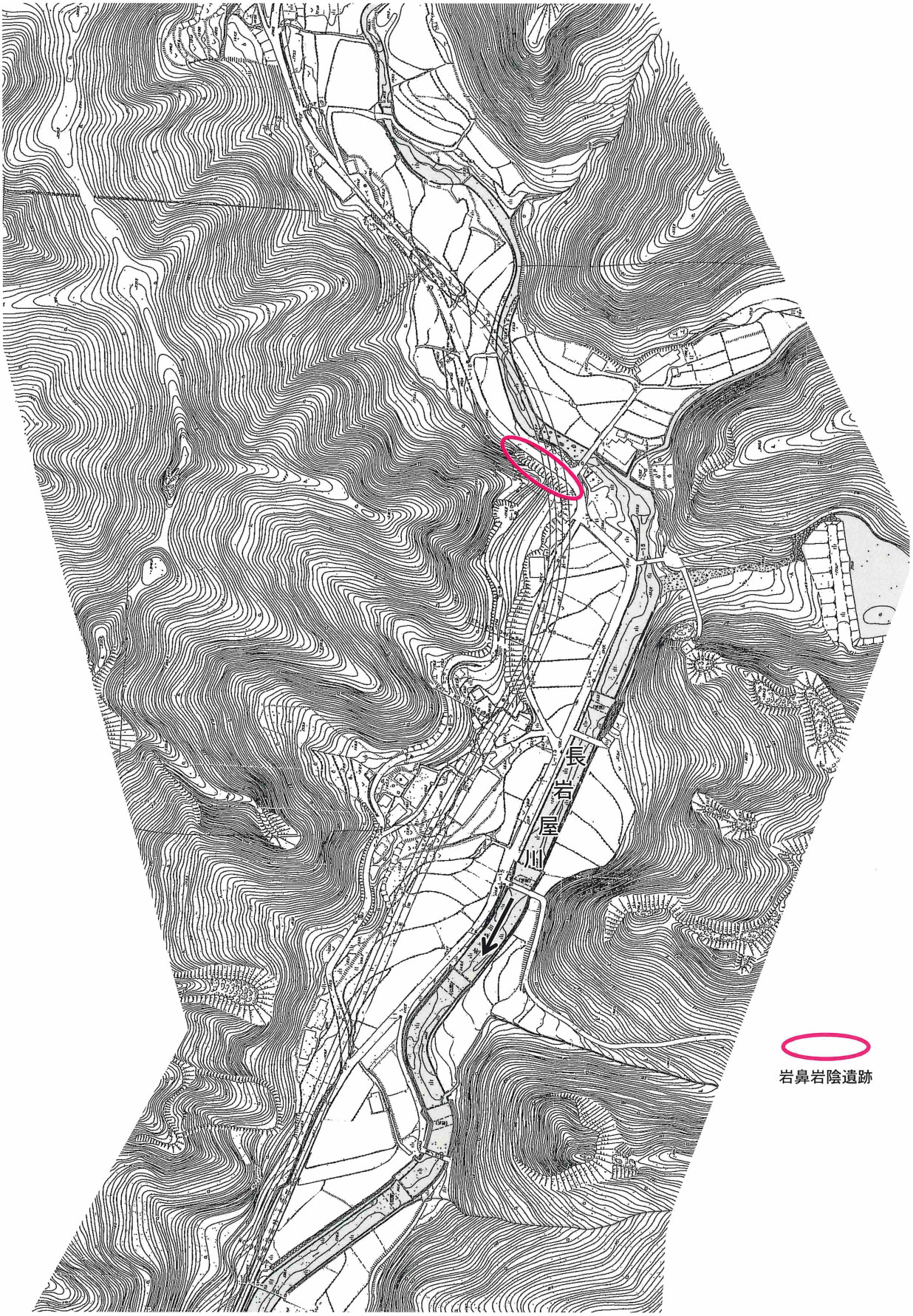
試掘調査の結果を受けて、改めて遺跡の評価について検討した。それによれば、①縄文時代前期～晩期にいたる良好な遺物包含層が残存する。②埋葬人骨が存在する可能性がある。③岩陰の間口が約40mで、大分県下最大の規模である。④岩陰周辺には開発がほとんど及んでおらず、縄文時代に近い自然環境が残る。以上の点から、大分県を代表する縄文時代の岩陰遺跡として保存を図るべきという結論にいたった。当初の工事計画に従えば、岩陰が形成された岩塊そのものも削平されるなど、周辺地形を含めて大規模な改変が行われることになる。そのため、県土木建築部と保存に向けた協議を行った。

協議の結果、県土木建築部から、①岩陰を保存するためには道路線形を大きく南側ないしは東側に変更しなければならない。そのためには、河川の付け替えや新たな家屋移転などを行わなければならず、これまでの経緯から地元の理解を得るのは難しい。②岩陰のある岩塊は、平成9年の防災点検で岩石崩落等の要対策箇所になっており、道路改良事業において危険の原因である岩塊を撤去したい。③岩陰を避けるためには大きな線形変更が必要となるが、下流側はすでに工事を進めており、この段階での変更は事実上不可能である。以上の回答を得た。何度か協議を重ねたが、工事計画変更による保存措置は困難と判断し、記録保存のための本調査を実施することとした。

本調査にあたり、調査区確保のため、岩陰前面の現県道を付け替える必要が生じた。すなわち、現県道敷は岩陰部分ではないが、包含層が道路下まで伸びているのが確認されていることから、道路敷までを本調査の範囲とした。そのため、県土木建築部は、現県道東側の長岩屋川に接する位置に仮設道を敷設し、調査区の確保を図った。本調査は、仮設道の工事が終了した後の、平成24年度に実施した。



第2図　岩鼻岩陰遺跡位置図（2）



第3図　岩鼻岩陰遺跡位置図 (3)

第２節　調査の経過

岩鼻岩陰遺跡は大分県豊後高田市大字長岩屋字地主に所在する。遺跡の名称は、本岩塊に対する地元住民の呼称名である「岩鼻（いわばな）」から命名した。

１　発掘調査の経過

本調査は、平成24年5月8日から9月20日の間実施した。当初は8月下旬終了予定であったが、遺物の出土量が多かったためと、連日調査区に水がたまり排水に時間をとられたため（雨天後は排水に半日ちかくを要した）、調査期間が約1ヶ月延びることとなった。以下、調査経過を記す。

5月8日（火）　岩陰遺跡の現況を記録するため、最初にラジコンヘリによる航空写真撮影を行った。岩陰部分に放置されていた廃棄物や周辺の草刈りを行った後に撮影を実施した。晴天であったが、黄砂のため視界が悪く、遠景は霞んでいた。

5月11日（金）～14日（月）　地形測量後、旧県道敷部分のアスファルトを剥ぐため、仮設道との境に切り込みをいれ、バックフォーでアスファルトを除去した。調査は土置き場の関係から、南半分と北半分に分けて行わざるを得ず、最初は南半分の20m×約6mを調査区とし、北半分を土置き場とした。旧県道敷部分は、道路整地層をバックフォーで取り除いたが、岩陰部分については表土層から人力による掘り下げを行った。

5月15日（火）～7月24日（火）　調査区に2×2mのグリッドを設定し、作業員による掘り下げを行う。出土する土器、石器、骨片等はすべて原位置に残し、位置と高さを記録した後に取り上げた。遺物番号は、出土グリッドに関係なく通し番号とした。また、排土についても、グリッドごとに深さ５cmごとに採集し、すべてを篩いにかけた。その結果、極めて小型のため見逃されていた玉類、石鏃、黒曜石チップ、骨片などを多数回収することができた。

7月25日（水）　バックフォーにより南半分埋め戻し。その後、北半分の県道整地層を取り除く。

7月26日（木）　補足の地形測量後、調査グリッド設定。

7月27日（金）～9月19日（水）　調査区の北半分について、人力で掘り下げ。この間、7月30日（月）には、豊後高田市立都甲中学校1年生10名、2年生7名の発掘体験を実施。8月24日（金）には豊後高田市内小学校5、6年生36名と引率の父兄等15名が遺跡の見学に来訪。9月5日（水）には、県豊後高田土木事務所の和田所長以下15名が、所内研修として遺跡見学のため来訪した。

9月20日（木）　北半分の埋め戻しを行い、調査終了。出土遺物を県埋蔵文化財センターに搬入。

２　整理作業の経過

整理作業は、平成25～27年度にかけて県埋蔵文化財センターで実施した。出土遺物が数万点に及んだため、整理作業には時間を要した。

また、この間に国立歴史民俗博物館名誉教授西本豊弘氏や熊本大学埋蔵文化財調査センター助教大坪志子氏の調査指導を受け、平成28年3月に報告書の刊行にいたった。

第３節　調査組織の構成

岩鼻岩陰遺跡の調査組織は以下のとおりである。

〇調査主体

大分県教育委員会

〇調査機関

大分県教育庁埋蔵文化財センター

発掘調査（平成24年度）

〇調査担当

山口　博文	大分県教育庁埋蔵文化財センター	所長
宮内　克己	同	次長

小林　昭彦	同	次長兼一般事業班　参事（総括）
後藤　一重（現場担当）	同	大型事業班　参事（総括）

○調査事務

春山　義光	同	管理予算班　課長補佐（総括）
山村　光広	同	管理予算班　主査
福田　文	同	管理予算班　主査

整理作業（平成25年度）

○調査指導

西本　豊弘	国立歴史民俗博物館	名誉教授

○整理担当

宮内　克己	大分県教育庁埋蔵文化財センター	所長
小林　昭彦	同	次長兼一般事業班　参事（総括）
後藤　一重（整理担当）	同	大型事業班　参事（総括）

○調査事務

春山　義光	同	管理予算班　課長補佐（総括）
椎原　由美	同	管理予算班　副主幹
山村　光広	同	管理予算班　主査

整理作業（平成26年度）

○調査指導

西本　豊弘	国立歴史民俗博物館	名誉教授
大坪　志子	熊本大学埋蔵文化財調査センター	助教

○整理担当

松村　洋一	大分県教育庁埋蔵文化財センター	所長
後藤　一重（整理担当）	同	次長兼県事業班　参事（総括）

○調査事務

藤田　幸三	同	管理予算班　主幹（総括）
椎原　由美	同	管理予算班　副主幹
山村　光広	同	管理予算班　主査

整理作業（平成27年度）

○調査指導

西本　豊弘	国立歴史民俗博物館	名誉教授
大坪　志子	熊本大学埋蔵文化財調査センター	助教

○整理担当

後藤　一重（整理・報告書担当）	大分県教育庁埋蔵文化財センター	所長

○調査事務

安藤　正廣	同	管理予算班　主幹（総括）
椎原　由美	同	管理予算班　副主幹
田上　剛	同	管理予算班　主査

このほか、発掘調査中に以下の皆様の現地への来訪があり、様々なご教示をいただいた（所属は平成24年当時）。近江俊秀（文化庁記念物課）、横澤滋（大分県文化課）、綿貫俊一（大分県立歴史博物館）、塩地潤一（大分市教委）、今田秀樹（日田市教委）、塩浜浩之（福岡県上毛町教委）、岩男真吾（豊後高田市教委）

第２章　遺跡の立地と周辺の縄文時代遺跡

第１節　遺跡の立地と位置

岩鼻岩陰遺跡が所在する国東半島は大分県東北部に位置し、南は別府湾に、東は伊予灘に、北から西にかけては周防灘に各々面している（第1図）。半島は円形を呈し、その径は約30kmである。中央には標高720mの両子山が位置し、その両子山を中心に細長い谷が放射状に幾筋も伸び、海岸にまで達している。海岸近くでは平野が形成されるが、総じて平野部が少なく起伏に富んだ地形を呈する。そのため、各谷を結ぶ道路が整備される以前は、谷相互の往来に大きな困難を伴う状況であった。

半島を構成する地質をみてみると、南部に基盤をなす花崗岩類が露出するが、半島の大部分はその上に鮮新世（約500～170万年前）の火山砕屑岩類と、第四紀（170万年以降）の両子火山噴出物が堆積する。火山砕屑岩類は、かつて耶馬溪層あるいは耶馬溪溶岩と呼ばれていたが、近年これらは複数の異なる時代に堆積した地層群であることが判明している。これらの火山堆積物を河川が開析し、現在見るような地形が形成された。各谷はいずれも狭小で細長く、各所に開析に伴う岩塊や奇岩がみられる。これらは、山の木々の新緑や紅葉と見事に調和し、四季折々の景色を楽しむことができる。

岩鼻岩陰遺跡は、国東半島北西部の半島基部付近に注ぐ桂川水系に位置している（第2図）。桂川は全長29.5kmで、両子山に源を発する。途中、石丸川、小崎川、蕗川、都甲川などの支流と合流しながら北西方向に流れ周防灘に流れ込む。遺跡は桂川に合流する都甲川水系のうち、長岩屋川の右岸に所在する。河口から遡ると、約3.8kmで桂川と都甲川の合流地点に達する。この都甲川をさらに約4.6km上流に進むと長岩屋川が北東から合流する。ここまでは谷幅も比較的広く、古代には条里水田が形成されるなど、中世都甲荘の中核をなす地域である。ところが、この合流点から谷は二つに分かれ、谷幅が急激に狭くなる。合流地点から長岩屋川を遡ること約4.0kmで、長岩屋川の浸食作用により形成された岩陰を利用した遺跡に到着する。現在の河口から約12.4kmで、大人の足であれば半日強の時間で海岸まで行くことのできる距離である。沖積が進行していない縄文時代では、河口が現在よりもさらに3.0kmほど上流にあったと考えられることから、遺跡から海岸までの時間はさらに短くなる。また、遺跡から長岩屋川と都甲川の合流地点までは2時間弱で出ることが可能である。

一方、遺跡から長岩屋川沿いに遡ると、ほどなく地蔵峠にいたる。地蔵峠の東側には、伊予灘側に開く谷が幾筋かみられる。このうち伊美川の谷を下ると、黒曜石の産地である姫島を臨む国東市国見町伊美にいたる。遺跡から伊美の海岸までは、直線距離にして約11.4kmである。地蔵峠を越える部分がやや険しいが、徒歩でも半日ほどで到達すると考えられる。このルートは、陸路における姫島から岩鼻岩陰遺跡までの最短コースであり、本遺跡を経由することにより桂川流域の遺跡群と姫島の黒曜石原産地が結ばれることになる。

岩鼻岩陰遺跡の所在する場所周辺は、平坦部が極めて狭小で、谷の形状はV字形に近く、険しい景観を呈する。現代人の感覚からみれば、山間の奥深い場所というイメージで見てしまいがちである。しかし、前述したように、遺跡は海岸や平野部に比較的短時間で移動することが可能な場所に立地しており、縄文人にとっては最適な居住環境であったと思われる。

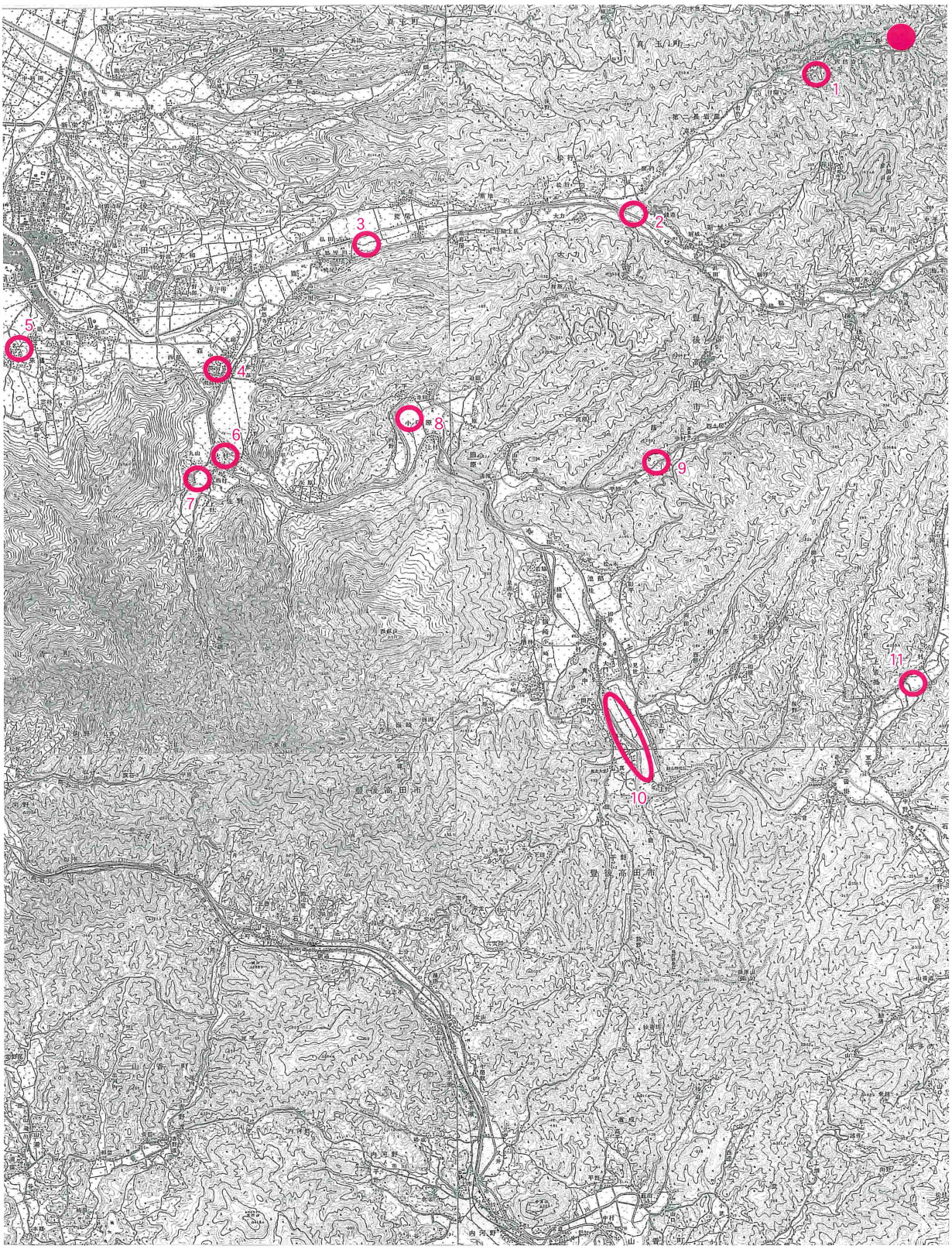
第２節　周辺の縄文時代遺跡

国東半島の北西部に位置する桂川水系は、桂川本流に合流する蕗川、都甲川などからなる。流域の大部分は狭小な谷平野が続き、ある程度の平坦面がみられるのは田染盆地や桂川と都甲川の合流点周辺のみである。

ここでは、岩鼻岩陰遺跡が所在する桂川水系の縄文時代遺跡のうち、主要なものについて紹介する（第4図）。

１　岩ノ下岩陰遺跡（第5図）

岩ノ下岩陰遺跡（綿貫俊一他編　2008）は、岩鼻岩陰遺跡の下流約1.3kmの長岩屋川左岸に位置する。岩陰の規模は間口約30m、奥行き約3mで、北に面して開口する。岩陰の現在の標高は126mで、岩陰の約50m前面を西流する長岩屋川の河床との比高差は約7mである。岩鼻岩陰遺跡に比べると河床との比高差が大きいこ



● 岩鼻岩陰遺跡

1	岩ノ下岩陰遺跡	2	横田遺跡	3	三六田遺跡
4	森貝塚	5	来縄貝塚	6	高山田遺跡
7	西村遺跡A地区	8	寺田卯月遺跡	9	蕗寺田遺跡
10	上野遺跡	11	古城得遺跡		

第4図　岩鼻岩陰遺跡と周辺の縄文時代遺跡

とから、岩陰そのものの形成時期は岩ノ下岩陰遺跡の方が古いと思われる。

縄文時代の遺物包含層の厚さは約1mで、縄文時代早期の無文土器・押型文土器、前期の轟4～5式土器・曽畑式土器・羽島下層式土器、後期の石町式土器、辛川式などが出土している。層位的には1層～7層まで分層されているが、出土状況は必ずしも良好ではなく、これらの土器が層位に従い整然と出土する状態は確認できない。出土石器は石鏃等の小型石器が主体である。剥片も大きめのものは少なく、水洗抽出による数千点のチップや小型剥片が主体を占める。

2　横田遺跡（第5図）

横田遺跡（後藤一重編　1991）は、岩鼻岩陰遺跡の下流約4kmの長岩屋川と都甲川の合流地点に位置する。合流地点を西側に臨む段丘上に在り、同位置には弥生時代前期末～後期の集落も見られる。縄文～弥生時代の集落の立地条件としては良好な場所であったと思われる。

調査は圃場整備事業に伴う試掘調査が行われたのみで、数カ所の調査区から土器が出土している。周辺の広範囲に調査区を設定したにもかかわらず、土器の出土は限定的であった。土器は波状口縁を呈し、口縁部はやや内湾する。口縁帯に縄文、疑似縄文、沈線による文様が施される。波頂部には沈線による渦巻文がみられる。時期的には、縄文時代後期の石町式古相に比定されるもので、小規模な集落が存在したものと考えられる。

3　三六田遺跡（第5図）

三六田遺跡（河野典之他編　2002a）は、横田遺跡の所在する長岩屋川と都甲川の合流地点から都甲川を約3.5km下った位置にある。この付近は谷の幅が約400mもあり、現状では比較的平坦な地形を呈する。しかし、弥生時代以前は微起伏が多くみられる状況であったことが発掘調査で確認されている。試掘調査及び本調査において、周辺の広範囲に調査区を設定したが、検出した竪穴建物跡１基以外には、遺構・遺物は確認されていない。小規模な集落であったことが分かる。

竪穴建物跡は東半が調査区外に及ぶが、円形ないしは楕円形を呈するものと思われる。その規模は南北2.8m、深さ0.3mである。中央には焼土を含む土坑があり、炉跡と思われる。主柱穴については明確でない。

竪穴内からは、多量の礫石と伴に遺物が出土した。床面に伴うものではなく、竪穴埋没過程に一括して廃棄された状況と思われる。土器のうち深鉢は波状口縁を呈し、口縁部は内湾する。口縁帯は縄文、疑似縄文、沈線による文様がみられ、頸部は無文である。波頂部には沈線による渦巻文が施される。これらの土器は、縄文時代後期の石町式古相に位置づけられる。

4　森貝塚（第5図）

都甲谷を流れる都甲川は、三六田遺跡から約1.2km下った場所で西方から流れてきた桂川と合流する。合流点から桂川を約1.2km遡った左岸に森貝塚（樋口清之　1931）が位置する。貝塚は丘陵裾部の斜面に位置し、前面の畑地等に貝殻が散布する。この場所から現在の海岸線までは約5.5kmあるが、縄文時代には海が大きく内陸まで入っていたと考えられる。樋口清之は昭和5年に森貝塚の調査を実施し、縄文時代の地形復元を試み、内陸深くまで進入していた海を旧森湾と呼んだ。貝塚から出土する貝類は、内湾砂泥性貝類が約90％を占める。

出土土器は、縄文時代後期初頭から前半の中津式、福田KⅡ式、西和田式土器、小池原下層式土器、鐘崎式土器などである。

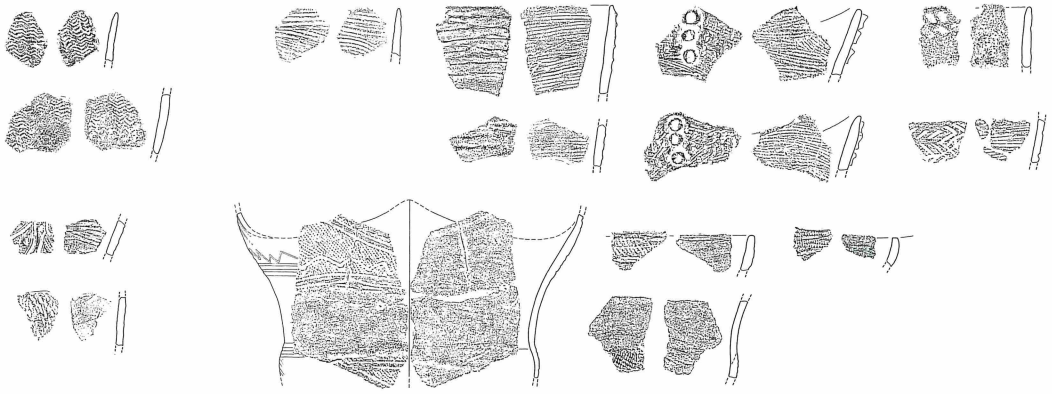
5　来縄貝塚

森貝塚の西方約2.5kmの位置に所在する。北に旧森湾を臨む場所に立地するが、詳細は不明である。出土土器については、森貝塚とほぼ同様な時期のものであったようである。

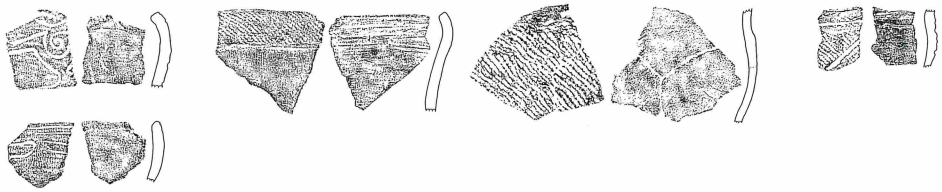
6　高山田遺跡（第6図）

高山田遺跡（河野典之他編　2002b）は、森貝塚から桂川を約0.8km上流に遡った左岸の段丘上に位置する。3基の竪穴遺構が確認されており、長径4～5mの円形ないしは楕円形を呈する。いずれも炉跡は検出されておらず、主柱穴も定型化した配置をとるものではない。圃場整備事業の関係から、周辺にも試掘調査区などを設定しているが、縄文時代の遺構は確認されていない。小規模な集落であったと思われる。

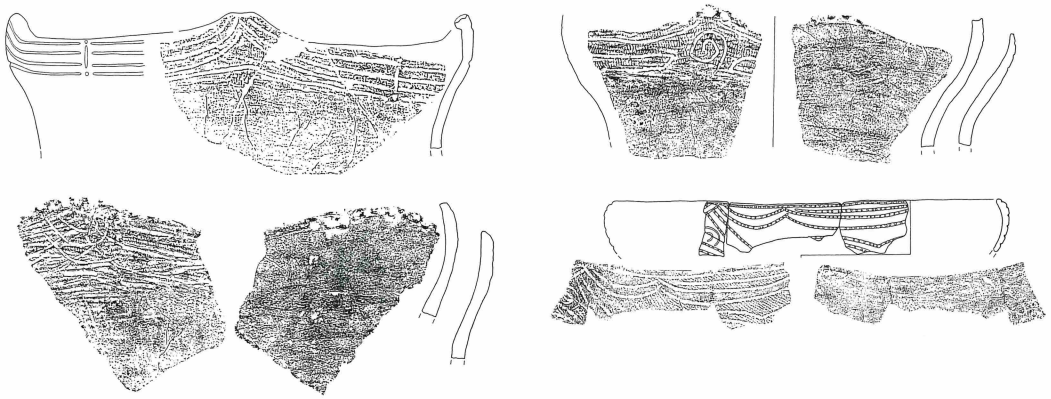
1　岩ノ下岩陰遺跡



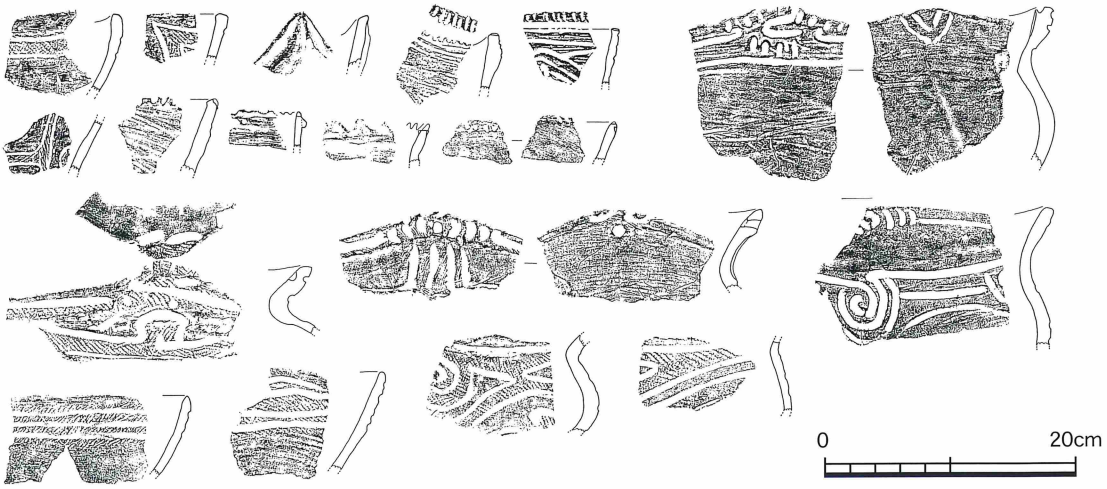
2　横田遺跡



3　三六田遺跡



4　森貝塚



第5図　周辺の縄文時代遺跡1（S=1/6）

6　高山田遺跡

1号

2号

3号

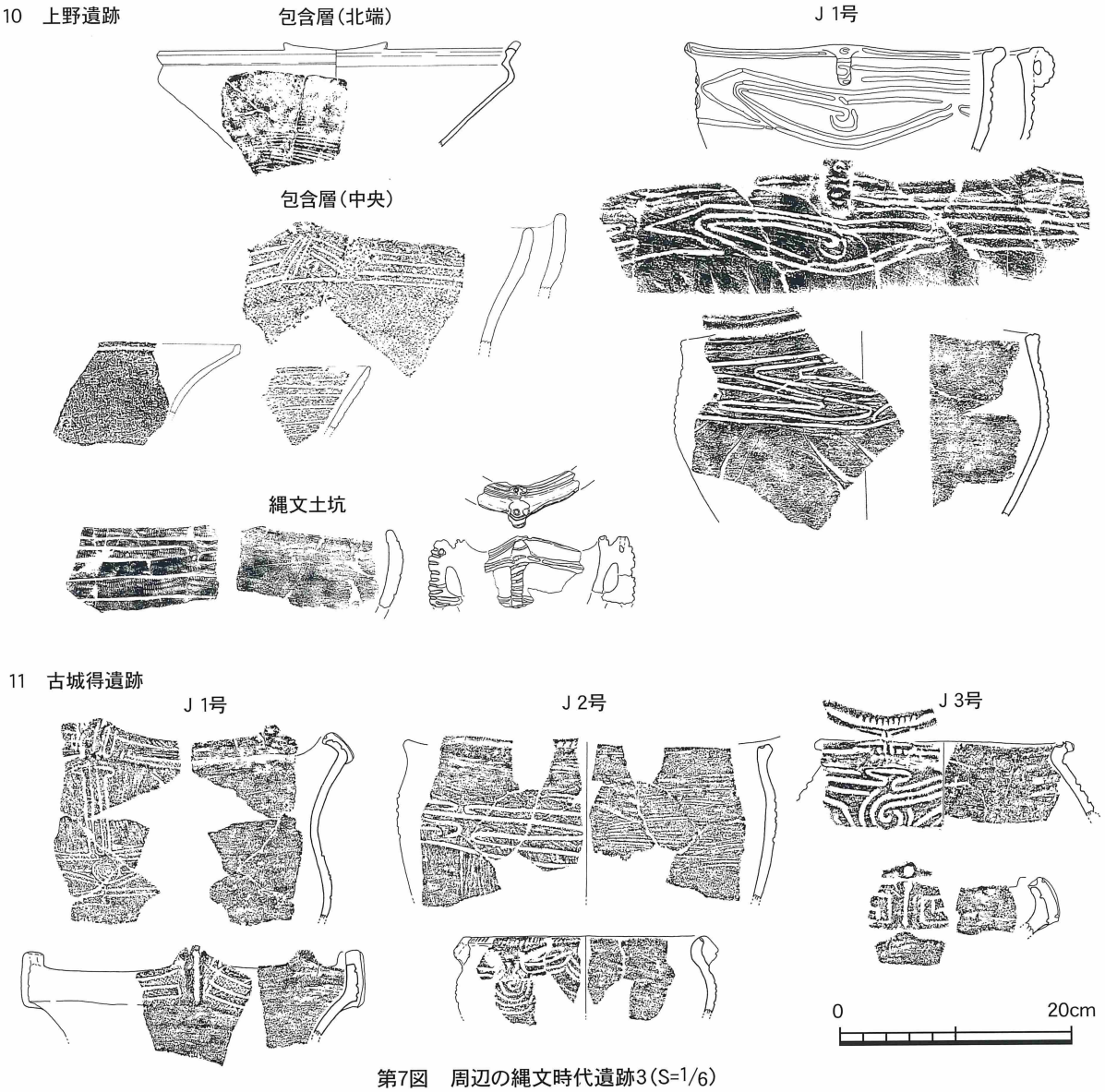
7　西村遺跡A地区

8　寺田卯月遺跡

9　蕗寺田遺跡

0　20cm

第6図　周辺の縄文時代遺跡2（S=1/6）



第7図　周辺の縄文時代遺跡3（S=1/6）

各竪穴の出土土器をみると、1号と3号からは鐘崎式が主体に出土している。また、2号では鐘崎式と石町式がみられる。

7　西村遺跡A地区（第6図）

西村遺跡A地区（河野典之他編　2002b）は、高山田遺跡の南約0.4kmに位置する。円形基調の土坑が2基検出されている。規模は径3.5～4mで、明確な炉跡や柱穴は確認されていない。調査面積は約10,000㎡で、中世の遺構が主体をなし、縄文時代の遺構はこの2基のみである。小規模な集落であったことが分かる。

時期は、1号が鐘崎式～石町式、2号が鐘崎式である。

8　寺田卯月遺跡（第6図）

寺田卯月遺跡（河野典之他編　1995）は、桂川左岸の段丘上に位置するもので、標高46mを測る。包含層は概ね25×40mの広がりをもち、土坑が1基確認されている。包含層出土土器は、縄文時代後期初頭の阿高系土器、コウゴー松式、中津式、福田KⅡ式、宿毛式などである。小池原上層式や鐘崎式などは含まれず、縄文時代後期初頭～前葉を中心とする時期におさまる。

9　蕗寺田遺跡（第6図）

蕗寺田遺跡（河野典之他編　1998）は、桂川支流の蕗川左岸に位置する。狭小な谷底平野の平坦地に立地す

るもので、径4.4～4.8mの円形基調の竪穴遺構が1基のみ確認されている。地形的に大規模な集落の立地は見込めず、圃場整備事業の事前調査として周辺の広範囲に試掘調査区を設けているが、この竪穴以外の縄文時代遺構は確認されていない。

竪穴からは、縄文時代後期の石町式新相の土器とともに石斧や石錘などが出土している。

10　上野遺跡（第7図）

桂川が狭小な谷を抜け田染盆地に入ると、平野が広がる。盆地は大きく二つの平野から構成されており、各々に条里水田がみられる。上野遺跡（栗田勝弘他編　1990、河野典之他編　2000）は南側の平野に所在しており、盆地内の西側山裾近くを南から北に流れる桂川の東側に形成された自然堤防上に立地する。縄文時代の遺構・遺物は、自然堤防の北端、中央、南端の3ヶ所で確認されている。

北端では縄文時代晩期黒川式併行期の土器が出土する包含層が確認されているが、包含層は小範囲で遺物も散発的な出土である。

中央では長さ約100mの範囲において、包含層や竪穴建物跡が確認されている。土器は縄文時代後期の鐘崎式、石町式、及び晩期前半のものがみられる。主体は鐘崎式、石町式である。土器のほかには、玦状耳飾、石鏃、石錘などが出土している。また、鐘崎Ⅲ式の時期の竪穴建物跡1基（J1号）が確認されている。竪穴の平面形は円形で、中央に石組炉がみられる。

南端では、長径3.9m、短径3.3mのやや不定形気味の遺構（縄文土坑）が1基確認されている。出土土器は、縄文時代後期の石町式である。

11　古城得遺跡（第7図）

古城得遺跡（小柳和宏編　1996）は、上野遺跡が所在した田染盆地から上流に約2.5km遡った位置に所在する。桂川右岸の河岸段丘上に立地し、縄文時代後期の竪穴遺構が５基確認されている。J1号は不整円形を呈し、中央やや西よりに地床炉がみられる。柱穴は多数見られるがいずれも浅く、主柱穴は明確でない。J2号は一辺3.4mの方形を呈するものであるが、炉跡や柱穴などは検出されていない。J3号は2基が重複している。円形竪穴が不整形竪穴に切られている。円形竪穴は径約4mで、炉跡や柱穴はみられない。また、不整形竪穴についても炉跡や柱穴は確認されず、床面に一段の掘り込みがある。J4号竪穴は径5mの円形を呈する。床面には火熱を受け硬化した部分があり、地床炉と考えられる。柱穴が壁に沿って円形にめぐっており、主柱穴と考えられる。

各竪穴の時期について、J1号が鐘崎式などが混じるが石町式新相の段階と考えられる。注目される遺物として、重さ2.3kgの姫島産黒曜石大型石核が出土している。J2号は鐘崎式が主体である。J3号のうち、円形竪穴からは遺物がほとんど出土しておらず、不整形竪穴からは鐘崎式が主体を占めるが、石町式が混じる。

註

栗田勝弘他編　1990　『上野遺跡』豊後高田市文化財調査報告書第1集　豊後高田市教育委員会

河野典之他編　1995　『寺田卯月遺跡』豊後高田市文化財調査報告書第4集　豊後高田市教育委員会

河野典之他編　1998　『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報ＸＶ』豊後高田市教育委員会

河野典之他編　2000　『真中地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市文化財調査報告書第6集　豊後高田市教育委員会

河野典之他編　2002a　『荒尾地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市文化財調査報告書第9集　豊後高田市教育委員会

河野典之他編　2002b　『佐野地区遺跡発掘調査報告書』豊後高田市文化財調査報告書第10集　豊後高田市教育委員会

後藤一重編　1991　『豊後高田地区遺跡群発掘調査概報Ⅶ』豊後高田市教育委員会

小柳和宏編　1996　『古城得遺跡・小川原遺跡』大田村文化財調査報告書第4集　大田村教育委員会

樋口清之　1931　『大分県西国東郡河内村森貝塚の研究』『史前学雑誌』3巻1号

綿貫俊一他編　2008　『岩ノ下岩陰遺跡発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第32集

大分県教育庁埋蔵文化財センター

第３章　調査の概要

第１節　岩陰の立地と規模

１　立地

岩陰は、南流する長岩屋川が南西方向に流れを転じる場所に位置する（第3図）。遺跡の周辺には、鮮新世の約500万年以降の火山活動により国東半島を覆いつくした火山堆積物が侵食され、大小の山塊となり点在する。

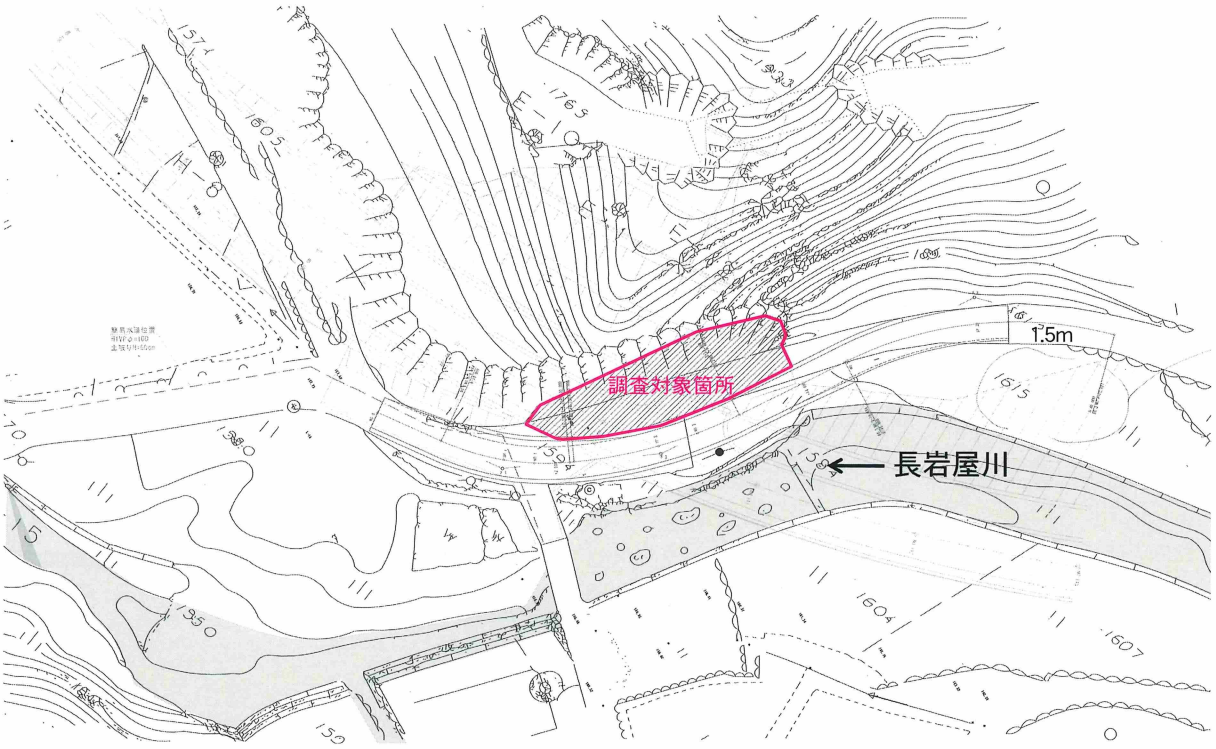
岩鼻岩陰遺跡として生活が営まれた岩陰は、長岩屋川右岸にある高さ約15m、幅約40mの岩塊が、川に侵食され形作られたものである。岩陰の奥壁から、現在の川までの距離は10～14mで、川の流れに隣接するように位置する。また、この付近は、谷の幅が狭く平坦地は少ないが、長岩屋川を挟んだ対岸や岩陰の南側には、竪穴建物数棟からなる小集落が立地可能な平坦面がみられる。このような平坦地ではなく、川が増水した場合には危険に晒される可能性がある岩陰を選択したのは、岩陰が天然の雨避けとして好都合であったためであろう。

２　規模

岩陰は東面して開口する。そのため、午前中は岩陰の奥まで陽があたるが、午後は全面的に日陰となる。そのため、夏場でも午後は比較的すごしやすい。また、冬場は北あるいは西からの季節風が遮られ、生活するうえには比較的好条件であったと思われる。

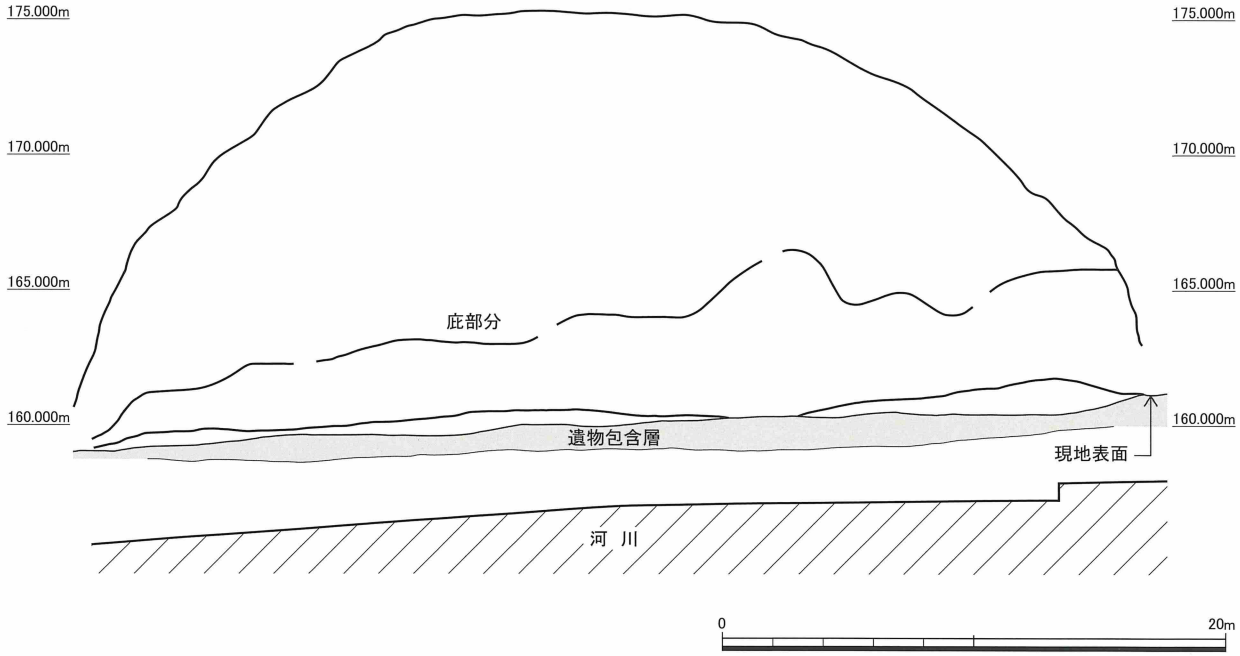
岩陰の規模は、幅約40m、高さ約3～6mである（第9図）。しかし、雨落ちのラインが奥壁から1～3.2mであることから、実際に岩陰として利用できる面積は約80㎡で、岩陰の幅に比し比較的小規模である。また、天井が奥壁に向かい斜めに下がるので、立ったまま歩ける部分は意外と少ない。

岩陰の奥壁と現河床との比高差は3～4mである。現河床の岩盤が岩陰の奥壁に向かい斜めに続くものと思われる。かつては川が岩体近くを流れ、徐々に侵食し岩陰を形成したものである。後段で詳述するが、少なくとも縄文時代後期前半段階までは、岩陰部分の南半分は奥壁近くまで河道となっていた。その後、河道が現在の河道方向へ移動し、縄文時代後半になり、ようやく岩陰全体が生活空間として利用されるようになる。

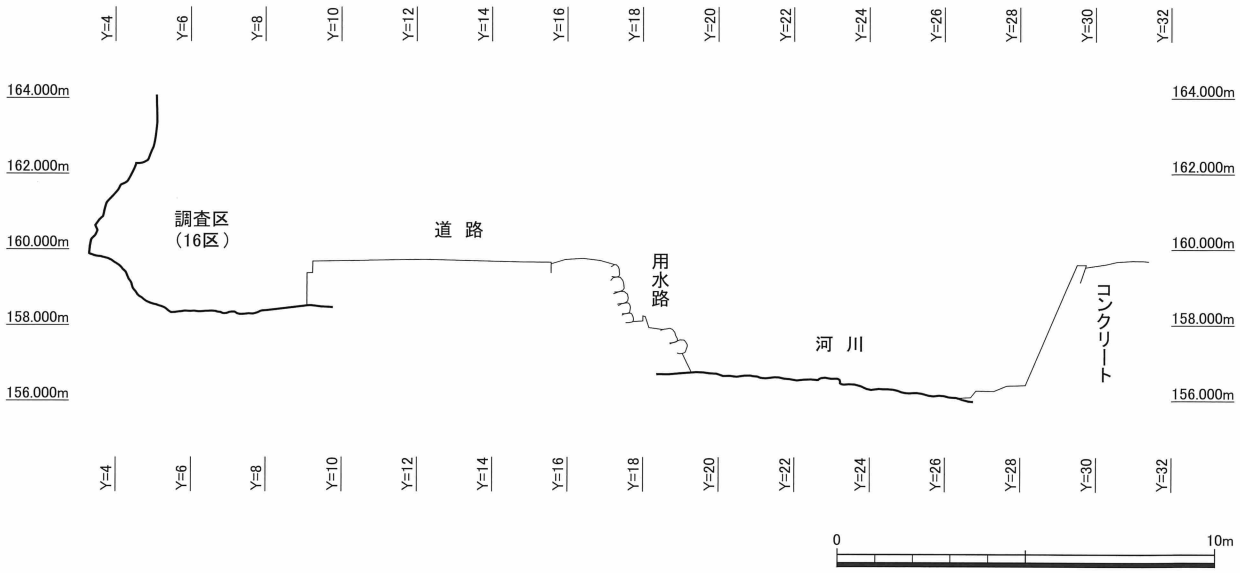


第8図　岩鼻岩陰遺跡と周辺の地形

正面観（東から）



東西断面（16区）



第9図　岩鼻岩陰遺跡の形状

第２節　調査区の設定と調査方法

１　調査区の設定

調査は、岩陰内及びその前面の旧県道敷きにかけて2×2mのグリッドを設定して行った（第10図）。グリッドは岩陰の地形に沿って設定したため、南北軸は真北から約13°東に振っている。

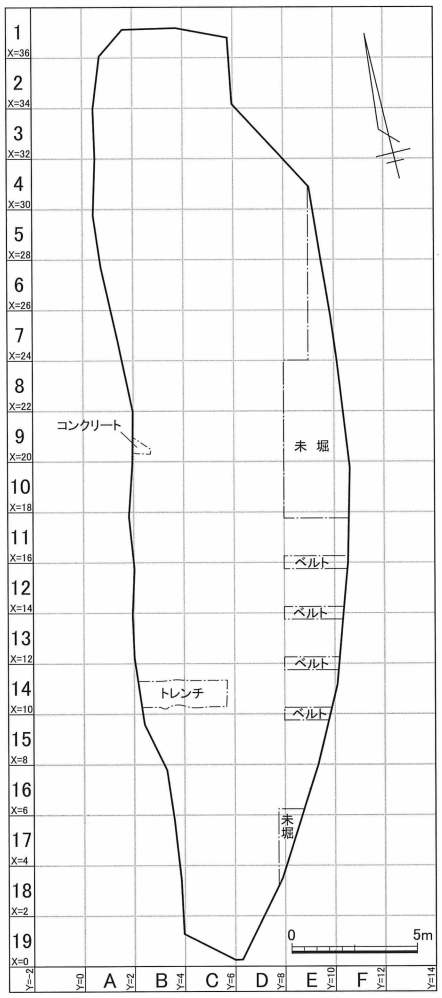
グリッドは、北から南に1、2、3、・・・19、西から東にA、B、C・・・Fとし、2×2mのグリッドを1A区、1B区などと呼んでいる。また、単に1区と表記している場合は、1A区から1F区までを総称した範囲を指している。

２　調査方法

旧県道敷のアスファルトと路盤である整地層については、バックフォーを使用して除去した。そのほかは、表土層や撹乱層にも縄文時代遺物が多数含まれることと、表土層が薄く表土層下の包含層を痛める可能性があることから、バックフォーを使わず人力による掘り下げを行った。表土層及び撹乱層の出土遺物は、グリッドごとに、表土層一括あるいは撹乱層一括として取り上げた。

包含層は、原則として土器、石器、獣骨等をすべて現位置に残し、平面的な位置と高さのデータをとった後、1点ずつにグリッド名と番号を記入し取り上げた。遺物の取り上げ番号は1から順につけ、番号の前に土器はP、石器等はS、獣骨等はHを付した。最終的に取り上げ番号は23363に及んだ。ただし、遺物の包含が薄い部分や旧河道内と判断した一部の箇所については、5cmの掘り下げ単位ごとに一括して取り上げた。

また、包含層はグリッドごとに原則5cm単位で掘り下げを行い、出土遺物は現位置に残すように最大限努めたが、獣骨等の微細な遺物も多いことが予想されたため、包含層の土を全量篩にかけることとした。篩作業は、各区の掘り下げ単位ごとに行い、水洗と併行をしながら丁寧に進めた。作業を進めると、石鏃・小剥片・骨片のほかに、数mmの大きさしかない装身具や姫島産黒曜石砕片などを多量に採取することができた。その量は当初の予想をはるかに超えるものであった。微細な黒曜石砕片などを砂粒や礫と区別して取り上げる作業は、時間と根気を要するものとなり、老眼鏡をかけた作業員がピンセットで1点ずつ丹念に採取した。結果として、番号を付して取り上げた遺物の量をはるかに超える遺物を採取することとなり、石鏃は発掘及び篩作業によるものあわせて700本を超えた。



第10図　岩鼻岩陰遺跡調査区配置図（S=1/300）

第３節　基本層序

岩陰内には、近年まで倉庫等の建物が存在したようである。そのため、部分的には削平が著しい箇所もみられた。また、岩陰の前面に県道地蔵峠小田原線が通るが、この建設に際し岩陰内の土を一部利用したようで、路盤下の整地層において縄文土器の出土が確認された。しかし、全体的には保存状態が良好で、6区から19区の間では、一部を除き10cm前後の表土層下には良好な縄文時代晩期包含層が残存する。特に、10区以南では晩期包含層の残存状況が良好で、遺物の量も多かった。1区から6区の間は、北に行くほど包含層の削平が著しく、調査区の北端の1区では、約0.3mの撹乱層直下に縄文時代中期包含層がみられ、縄文晩期・後期の包含層は残存していない。以下、基本層序の詳細を述べるが、岩陰の北半（1区～8区）と南半（9区～19区）では包含層の状況が大きく異なるので、各々について述べる（第11図）。

1　北半（1区～８区）

奥壁から2～6mの間は、岩盤が平坦あるいは川に向かい緩やかに傾斜する。ここでは、本来、岩盤の上に縄文時代前期、中期、後期、晩期の包含層が形成されていた。しかし、削平・撹乱が著しく、前期から晩期の包含層がすべて残存するのは6区周辺のみである。

また、平坦な岩盤の東側（川側）は、岩盤が一段下がる。ここは旧河道との境で、縄文時代後期前半までは確実に旧長岩屋川の河道域であった。河道が埋没した後、8区、9区では旧河道上に縄文時代後期の石町式の包含層が形成されるが、7区以北では撹乱が著しく旧河道上には包含層が残存しない。

Ⅰ層：表土層、撹乱層ほか

Ⅱ層：縄文時代前期～晩期の包含層

Ⅱ1層　縄文時代晩期包含層

Ⅱ2層　縄文時代後期包含層

Ⅱ3層　縄文時代中期包含層

Ⅱ4層　縄文時代前期包含層

Ⅲ層：自然堆積層

Ⅳ層：旧河道内堆積層

2　南半（9区～19区）

9区以南では、岩盤が奥壁から斜めに急激に下がる。これは、北半でみられた旧河道が奥壁まで及んでいたためである。そのため、南半には縄文時代後期前半以前の包含層は存在しない。旧河道が埋没した後、上層に縄文後期石町式以降の包含層が形成される。特に12区～17区には縄文晩期前半の遺物が集中する（晩期集中部①）。また、弥生時代早期に位置づけられる土器群も出土する。これらは晩期の遺物と混在するような状況であるが、14区、15区では晩期の層と区別して弥生時代早期の層が部分的に残存するのを確認できた。

Ⅰ層：表土層、撹乱層ほか

Ⅱ層：縄文時代後期～弥生時代早期の包含層

Ⅱ0層　弥生時代早期包含層

Ⅱ1層　縄文時代晩期包含層

Ⅱ2層　縄文時代後期包含層

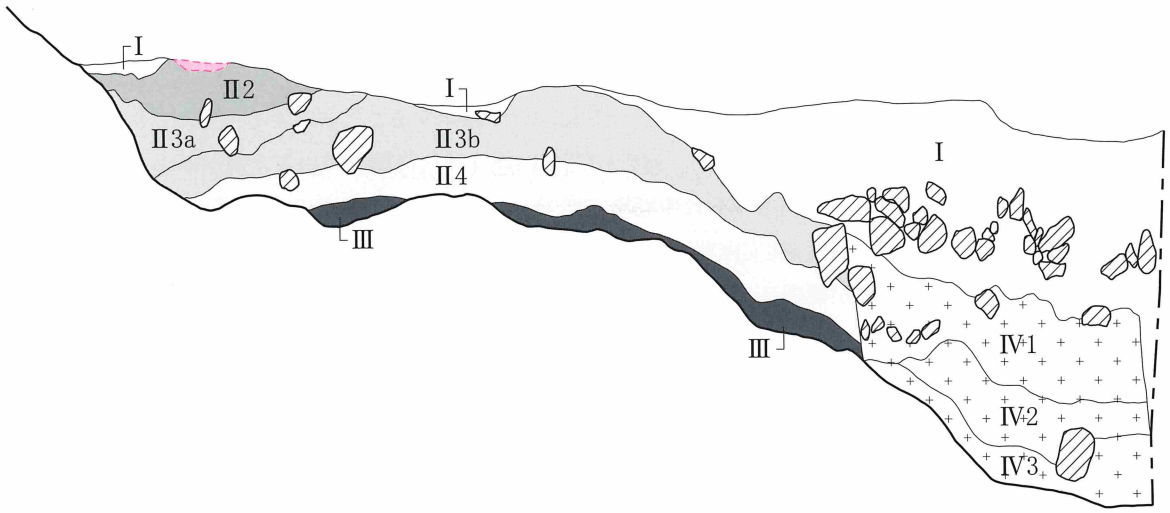
Ⅲ層：自然堆積層

Ⅳ層：旧河道内堆積層

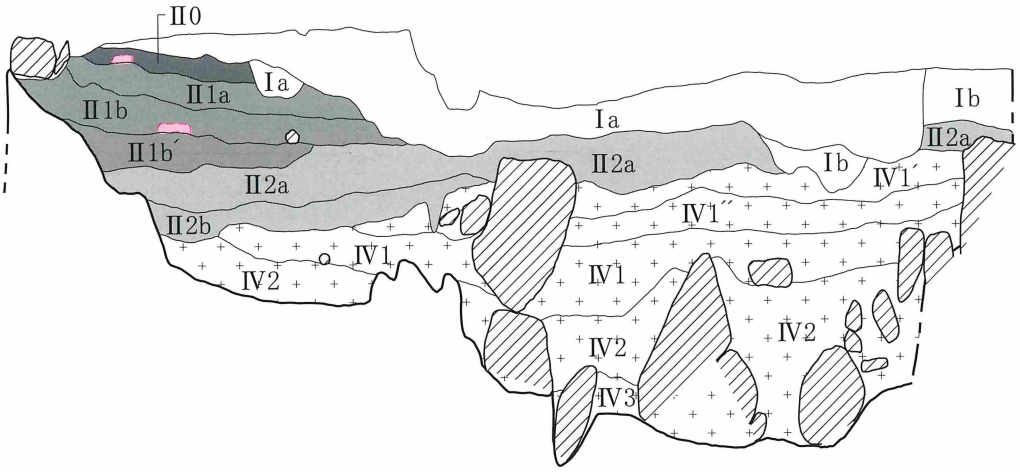
以上のほかに、極めて少量の弥生時代及び古墳時代遺物が出土する。しかし、層位的には分離できず、表土層及びⅡ0層、Ⅱ1層中に混在するかたちでみられる。

また、中世の土坑1基を検出したが、表土層直下のⅡ層上面で遺構ラインを確認することができ、Ⅱ層の縄文時代・弥生時代早期包含層を切り込む。中世の遺物はⅡ層の包含層中はもとより、Ⅰ層の表土層及び撹乱層からも出土していない。

北半



南半



凡例

Ⅰ層	Ⅱ4層
Ⅱ0層	Ⅲ層
Ⅱ1層	Ⅳ層
Ⅱ2層	焼土
Ⅱ3層	

第11図　岩鼻岩陰遺跡基本層序

第４節　縄文時代の遺構・遺物

1　包含層について

縄文時代の包含層であるⅡ層は、奥壁に近いA、B、Cグリッドで良好な包含層が残存しており、多くの土器・石器・獣骨等が出土した。これに対し、D、Eグリッドでは包含層が残存する部分は少なく、旧河道堆積層や撹乱層などしかみられない部分も多い。包含層が残存する部分についても、奥壁に近い部分の包含層に比べると、遺物量は圧倒的に少ない状況である。

縄文時代包含層であるⅡ層は、Ⅱ0層、Ⅱ1層、Ⅱ2層、Ⅱ3層、Ⅱ4層に分けられる。

・Ⅱ4層（縄文時代前期包含層）　Ⅱ4層が明瞭に確認できるのは、1区～7区までの調査区である。中期以降の包含層に比べると遺物量は極めて少なく、遺物の出土もほぼ5区、6区に限られる。

・Ⅱ3層（縄文時代中期包含層）　Ⅱ3層は、1区～8区にかけて確認することができる。包含される遺物は北にいくほど多く、6区以南では遺物量が少ない。1区～4区では縄文時代後期以降の包含層が削平されており、表土層直下がⅡ3層となっている。2区を中心に中期集中部①を、3区を中心に中期集中部②を各々確認した。

・Ⅱ2層（縄文時代後期包含層）　縄文後期石町式や西平式などが出土する層は、4区以南で認められる。このうち、ある程度面的な広がりが確認されるのは8区以南である。なかでも、8区～10区にかけては焼土や立石遺構などと伴に遺物が集中的に出土した。また、11区以南では、包含層自体は奥壁部分から残存しているものの、遺物量はやや少ない状況である。8区～10区を中心とする後期集中部①、9区を中心とする後期集中部②、10区を中心とする後期集中部③、15区中心とする後期集中部④を各々確認した。

縄文時代後期の遺物のうち、後期前半のものは後期後半以降の包含層中などから少量出土するが、この時期の遺物のみを包含する良好な包含層は確認できない。10区以南については、石町式以降の土器を包含するⅡ2層の下部に旧河道堆積層が、奥壁までみられる。このことから、縄文時代後期前半までは、10区以南については奥壁まで河道になっていたことが分かる。9区以北では奥壁と河道の間が生活空間として利用可能で、ここに縄文時代前期、中期の包含層が形成されている。本来、縄文時代後期前半の包含層も存在したと思われるが、削平が著しく良好な状態では残存しない。

・Ⅱ1層（縄文時代晩期包含層）　本来は1区～19区にかけて存在したと考えられるが、削平のため1区～4区では残存しない。面的広がりをもち良好に残存するのは10区以南で、12区～17区では晩期集中部①を確認した。

・Ⅱ0層（弥生時代早期包含層）　弥生時代早期の遺物がⅡ1層の縄文時代晩期遺物に混じるかたちで出土する。遺物の出土は全体に及ぶが、Ⅱ1層と区分することができない調査区が多い。しかし、14区、15区の一部において、Ⅱ1層の上部にⅡ0層を確認した。

2　遺構について

調査区内において、炉跡（地床炉）、立石遺構などの遺構に加え台石などを確認した（第12図）。

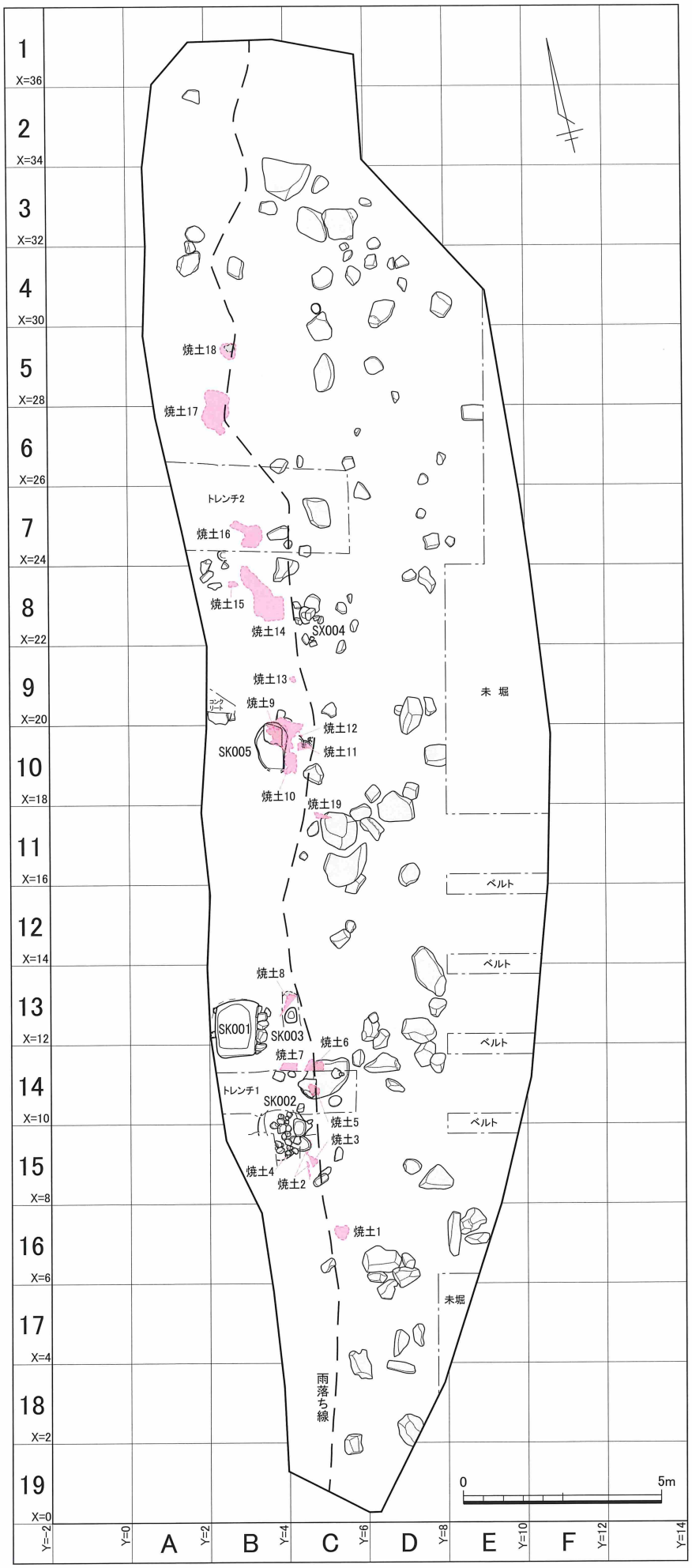
炉跡と考えられる焼土は、約20箇所で確認することができた。焼土の厚さはいずれも数cmであるが、面的には最大長は0.2～1.5mと様々な規模のものがある。出土層位はⅡ0層、Ⅱ1層、Ⅱ2層であることから、縄文時代後期後半～弥生時代早期にかけて形成されたものである。また、集中する箇所がいくつかみられる。

13区～16区にかけて、約10箇所の焼土がみられる。Ⅱ1層、Ⅱ2層中に層を異にして確認することができることから、縄文時代後期～晩期において、同様な位置で繰り返し炉が形成されたことが分かる。周辺には台石も集中することから、炉と台石がセットとなっていたものであろう。

10区周辺でもいくつかの焼土が、Ⅱ1層中から、層を異にして台石とともに確認されている。

8区では最大長1.5mの焼土14などが検出されている。焼土14の東側0.3mには立石遺構（SX004）があり、いずれもⅡ2層中の出土であることから、炉跡である焼土と立石遺構が共存するものと考えられる。焼土14の北側には焼土16があるが、これはⅡ1層からの出土で、縄文時代晩期に位置付けられる。

5区～6区周辺にも2箇所の焼土がある。これらは層を異にして出土しており、焼土18が縄文時代晩期に、焼土17が縄文時代後期～晩期に各々形成されたものと思われる。



第12図　岩鼻岩陰遺跡遺構配置図

3　1区

岩陰遺跡の北端近くである。これより北側は、ほどなく岩体が途切れて岩陰状を呈しなくなる。1区の北側は調査対象地区外のため包含層の北の端を確認することができなかった。しかし、岩陰がなくなることから、一定程度の遺物が包含される層は、1区の端から数m程度と推定される。

(1)　土層と遺物出土状況（第13図）

岩陰奥壁の標高が161.2mで、岩盤は長岩屋川に向かい緩やかに下る。1区の東端での標高は約160.0mである。奥壁は垂直に約1m立ち上がった後に斜方向に伸び、その後垂直方向に転じる。雨落ちのラインは概ね奥壁から1.5～2.0mである。岩盤の傾斜が全体として比較的緩やかであることから、生活するにあたり大きな支障はなかったと思われる。

層位は、Ⅰ層の表土層が約0.4mと他の調査区に比べると厚い。近年まで建物等があったようで、それにより大きく層が乱されている。Ⅰ層下には、縄文時代包含層であるⅡ3層、Ⅱ4層が堆積する。Ⅱ3層が中期、Ⅱ4層が前期の遺物を包含する。本来は、縄文時代後期、晩期の遺物包含層が存在したと考えられるが、撹乱が著しく後期以降の包含層は残存していない。Ⅱ3層は層厚約0.4mで、緩やかに傾斜する岩盤上に、奥壁より約1.5mの地点から堆積する。Ⅱ3層は3層に分層でき、中層のb層に遺物が多く含まれ、a層、c層は遺物の量が少なかった。Ⅱ3層は文化層として細分できる出土状況ではなく、中期の包含層として一括して捉えておく。Ⅱ4層は緩やかに傾斜する岩盤上に直接堆積する。層厚は0.1～0.2mで、奥壁から約2.5mの地点から堆積がはじまる。Ⅱ3層には白色粒子が多く含まれていたが、本層では白色粒子が微量含まれるのみである。

次に遺物の出土状況について述べる。Ⅱ3層中からは概ね全体から遺物が出土した。しかし詳細にみると、奥壁側と長岩屋川側が薄く、調査区中央に集中する傾向が読み取れる。このような傾向は、南側に隣接する2区でもみられるため、有意なまとまりとして捉えることができる。遺物が集中する部分は雨落ち線の外側のため雨風を避けるためには何らかの構造物が必要であったと思われる。遺物は土器、石器、骨片などであるが、いずれも細片である。遺物量は他の調査区に比べると少ない傾向にある。これは、1区が岩陰の端に位置するためであろう。また、骨片も少量で、後段で紹介する晩期包含層からの出土量に比べると圧倒的な差がある。これは、1区のみならず中期包含層全体に言えることである。遺構は特に認められず、焼土なども確認することができない。

Ⅱ4層からは、極めて少量の土器細片が出土したのみである。Ⅱ3層に比べると、その量の差は歴然としている。やはり焼土等の遺構は確認することができなかった。

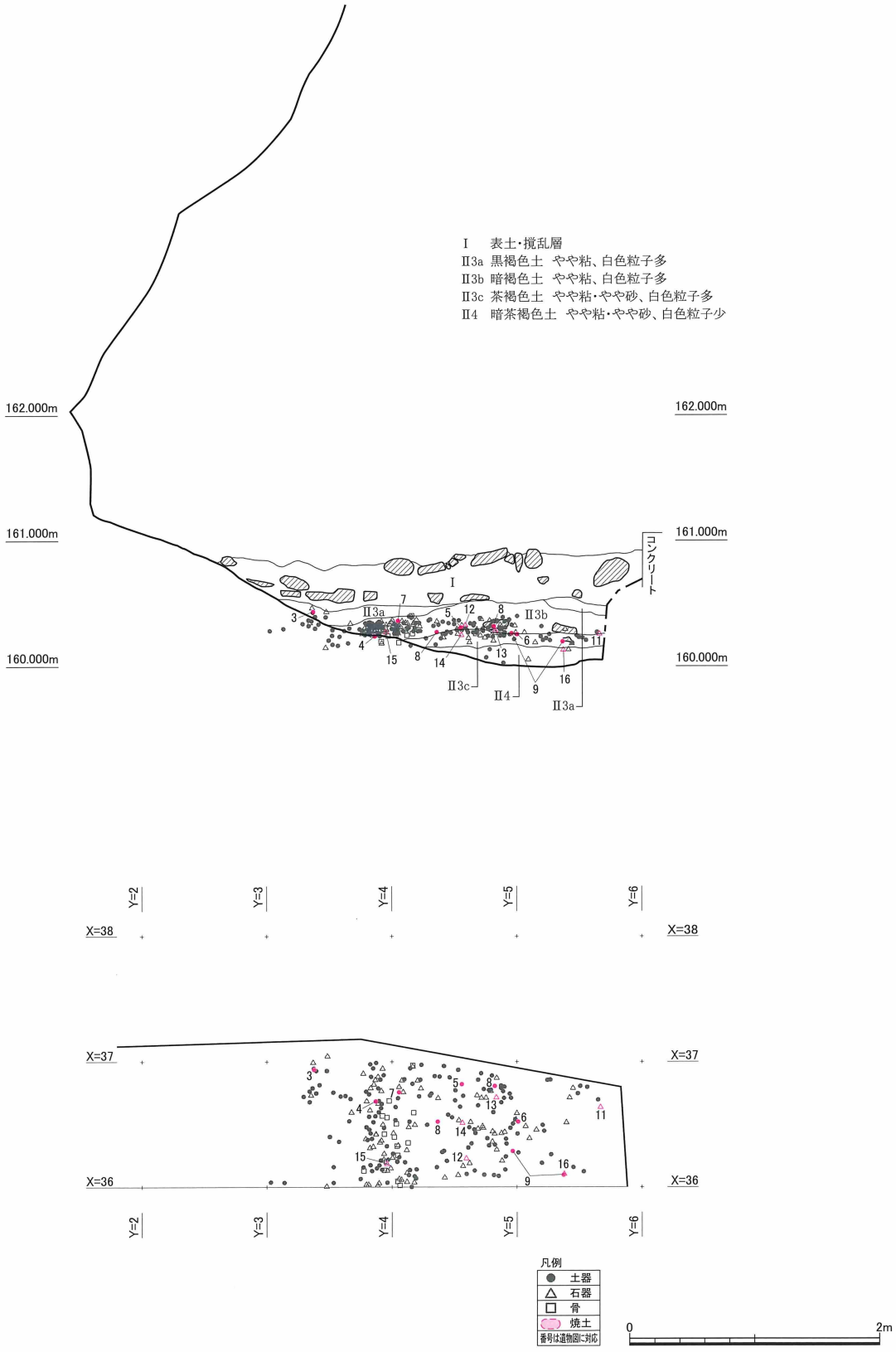
(2)　遺物

Ⅰ層（第14図1、2、第15図10、17）

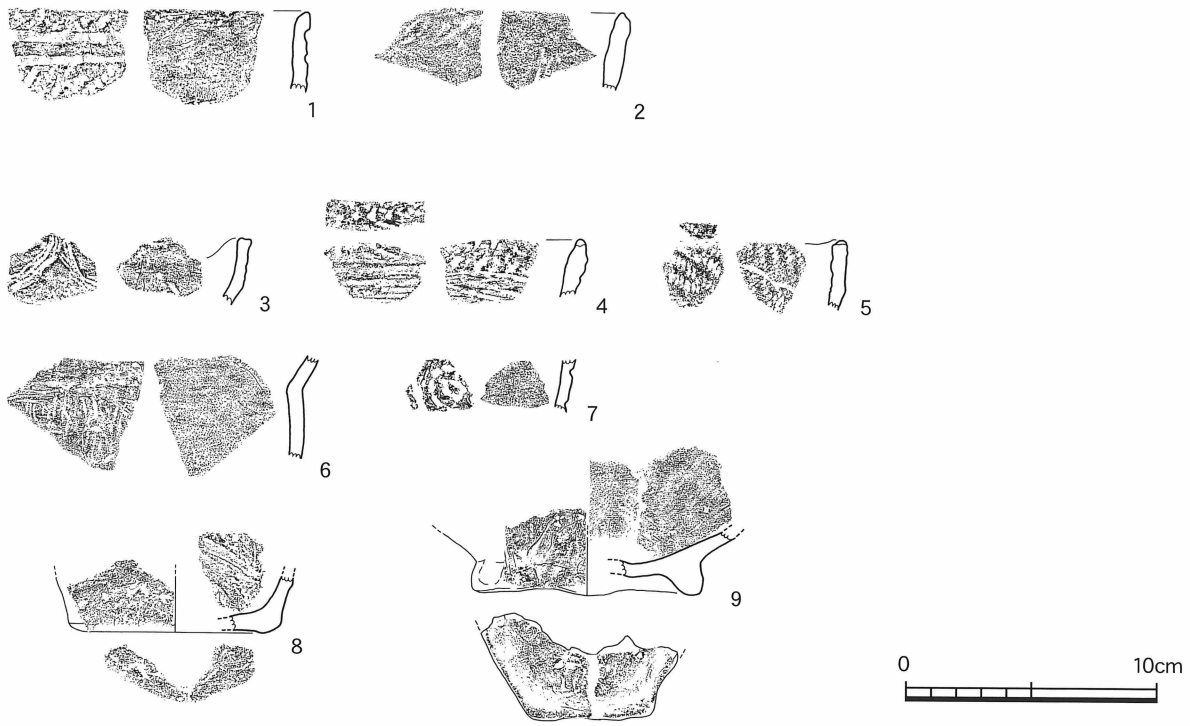
Ⅰ層は近年の撹乱が著しくコンクリート片などが多く混じるもので、縄文時代の遺物は比較的少なかった。土器のうち、1は中期土器で外面に粗い縄文と沈線がみられる。2は無文である。10は姫島産黒曜石製石鏃の基部で浅い抉りがはいる。縄文時代晩期のものであろう。17はサヌカイト製石匙である。

Ⅱ3層（第14図3～9、第15図11～16）

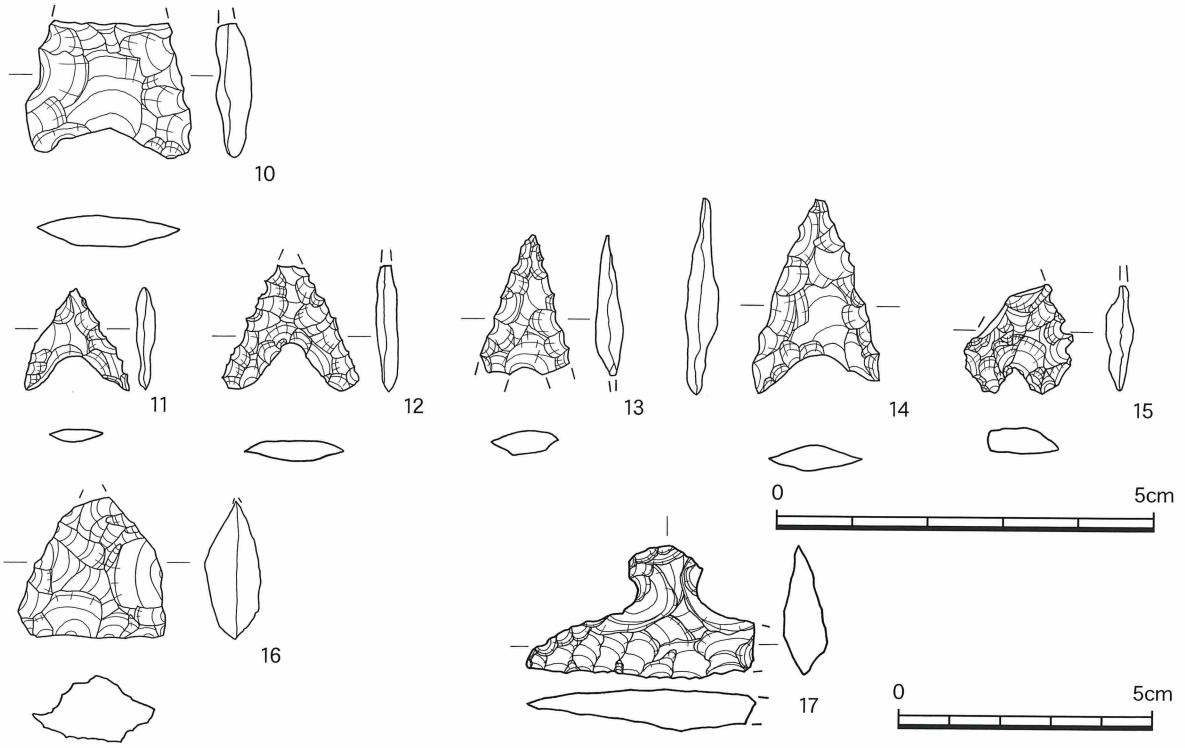
土器はいずれも縄文時代中期に位置づけられるものと思われる。3は口縁波頂部で、緩やかにくの字状に折れ直立する。外面に両側から波頂部に向かい撚糸文が施される。頂部は平坦で、軽いオサエがみられる。4、5も口縁部資料である。4は外面が条痕のみで、内面は条痕調整の後に口縁下に縄文が帯状に施される。口縁部はやや尖り気味で、口縁端部上面にはヘラ状工具によるやや深めの刻みがみられる。5は緩やかにくの字状に折れて立ち上がる。内外面に縄文が施される。6は頚部の資料である。わずかに膨らみ気味の体部から外方に折れ口縁部にいたるものと思われる。内外面とも無文である。7は胴部の資料である。外面には連続刺突文による渦巻き文がある。8、9は底部資料である。8は復元底径7.2cmを測る。平底で体部が直立気味に立ち上がる。内外面ともナデ調整である。9は復元底径8.4cmで高台状を呈する。平面形が五角形をなすもので、中期船元式の古段階にしばしばみられる形態である。



第13図　岩鼻岩陰遺跡1区平面図・土層図（S=1/50）



第14図　岩鼻岩陰遺跡1区出土縄文土器(S=1/3)



第15図　岩鼻岩陰遺跡1区出土石器(S=1/1，2/3)

石器はいずれも石鏃で、11～15が製品、16が未製品と思われる。11がサヌカイト製、15が珪質岩製で、他は全て姫島産黒曜石製である。11は三角形状を呈し、深い抉りをもつ。12～15は二等辺三角形状で、15を除き深い抉りがみられる。脚の先端は12が丸く、14が尖り気味に仕上げられている。15はやや雑な作りで、小さめの抉りをもつ。16は先端部を欠くもので、石鏃の未成品と考えられる。

4　2区

(1)　土層と遺物出土状況（第16図）

岩盤は標高約160mでほぼ平坦な状況を呈する。奥壁より1.6mの地点から急激に斜めに立ち上がり、岩陰の最奥部にいたる。最奥部の標高は約161.8mで、1区に比べるとかなり高い。奥壁から再び斜方向に立ち上がり、その後垂直方向にのびる。雨落ちラインは奥壁から1.5～2.0mである。奥壁近くの岩盤が斜方向に上がる部分は、傾斜がきついことから生活に適さない。よって、実質的に生活空間として利用できるのは、岩盤が平坦な部分である。しかし、この部分の大半は雨落ちラインの外側にあたり、雨風を避けるには何らかの施設が必要となってくる。

Ⅰ層（表土層）はコンクリート片を含むなど1区と同様に撹乱が著しかった。そのため、1区～5区周辺までの表土については一括して除去した。よって、奥壁近くは土層図に図示されていない。Ⅰ層の厚さは1区と同様に0.4～0.5mであった。Ⅰ層を除去すると、縄文時代中期の包含層であるⅡ3層が現れる。本来、後期～晩期の包含層であるⅡ1層、Ⅱ2層が存在したと思われるが、撹乱のため全く残存しない。この状況は先の1区と同様である。Ⅱ3層は2層に分層できる。隣接する1区では3層に分層できたが、2区では1区でみられたa層がなく、b層とc層のみが確認できた。1区と同様に遺物はb層に集中し、Ⅱ3層をいくつかの文化層として分層して捉えることはできなかった。Ⅱ3層下にはⅡ4層がある。平均約0.1mの層厚で、岩盤上に直接堆積する。Ⅱ4層中の遺物は、1区同様に極めて少量であった。また、岩盤平坦面の奥壁に近い部分に落石がみられる。ひとつは長さ0.85mを測る大きなもので、いずれも岩盤に接していることから、岩陰面が形成された初期段階での落石であることが分かる。これらの落石を覆うようにⅡ3層とⅡ4層が堆積している。

遺物の出土状況は、Ⅱ3層では岩盤平坦面の中央付近に集中する。このような集中は、1区でも同様な位置において確認することができた。南側の3区ではこの延長部の包含層自体が残存していないため不明であるが、さらに南側の4区ではこの延長部に遺物の集中はみられない。2区の状況を詳細にみてみると、この集中部は2区の南側の端で散漫になることから、1区から2区にかけて形成されていると考えられる。その規模は南北4m余、東西1mである（中期集中部①）。1区同様に2区内でもこの集中部に伴う焼土はみられなかったが、2区では台石（第19図36）が出土しており、その状況から有意なまとまりであると判断できる。集中部とは別に、奥壁に近い南端の部分でも遺物がみられる。これは3区にある集中部の続きと考えられ、先の中期集中部①とは区別されるものである。

Ⅱ4層からは散発的な遺物の出土で、Ⅱ3層に比べると遺物量は極めて少量である。

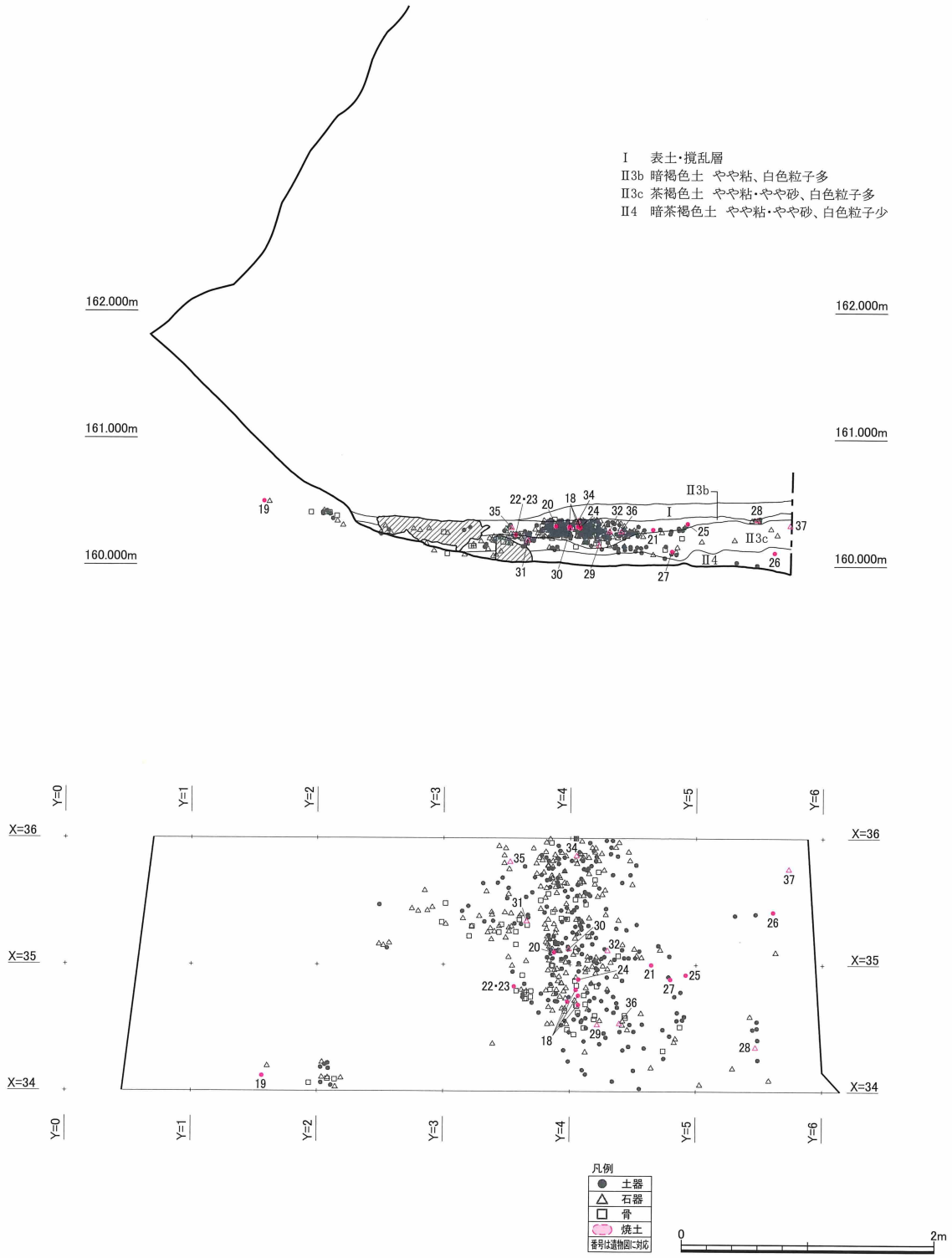
(2)　遺物

Ⅱ3層（第17図18～25、第18図28～36、第19図37）

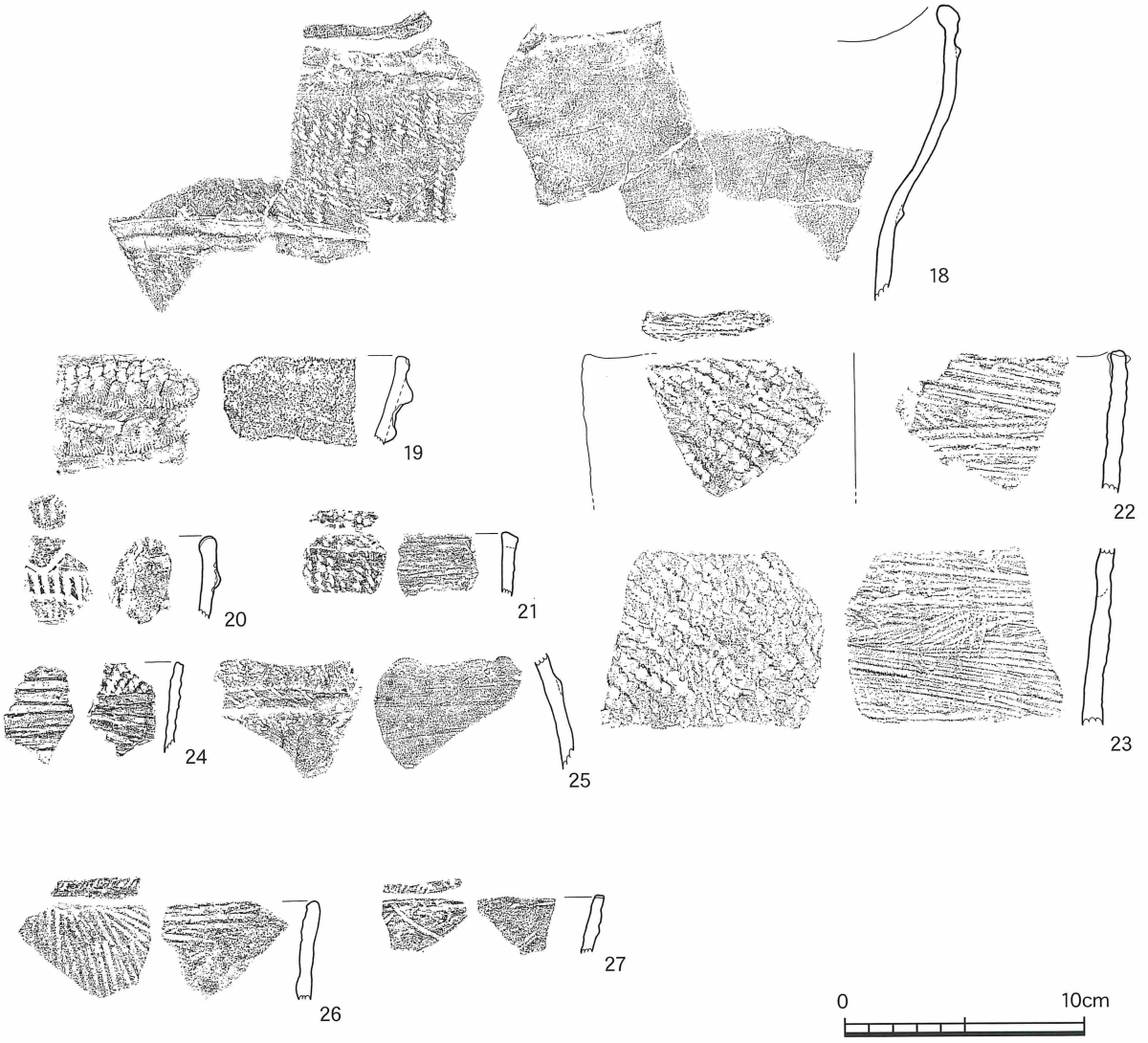
Ⅱ3層出土の土器は、いずれも縄文時代中期に比定できるものである。このうち19以外は中期集中部①に伴うものである。18は頚部が体部から外方に開き、直立気味の口縁部にいたる。外面には粗い縄文が施文され、頚部と口縁下に断面三角形の低い突帯が付く。口縁端部は丸く肥厚し、波状口縁をなす。19は外面口縁下に断面三角形の突帯が2条付され、突帯周辺に二枚貝の押圧文がみられる。20は多量の金雲母を含む。外面口縁下に低い突帯が付き、半截竹管状の工具で刻む。突帯の上部には沈線文が、また下部には縄文が施される。口縁端部は緩やかに内湾し、端部上面に浅い刻みがみられる。21は直立する口縁部で、外面と口縁端部上面に縄文がみられる。22は円筒状の器形を呈するもので、外面には粗い縄文がみられ、内面は条痕調整である。また、口縁端部上面には撚糸文が施される。23は22と同一個体の可能性がある胴部資料である。24は口縁内面に帯状に縄文が施文される。25は低い突帯と縄文がみられる。28～36は石鏃である。29がサヌカイト製である以外は全て姫島産黒曜石製である。37は台石と思われ、片面の中央に敲打痕が残る。

Ⅱ4層（第17図26、27）

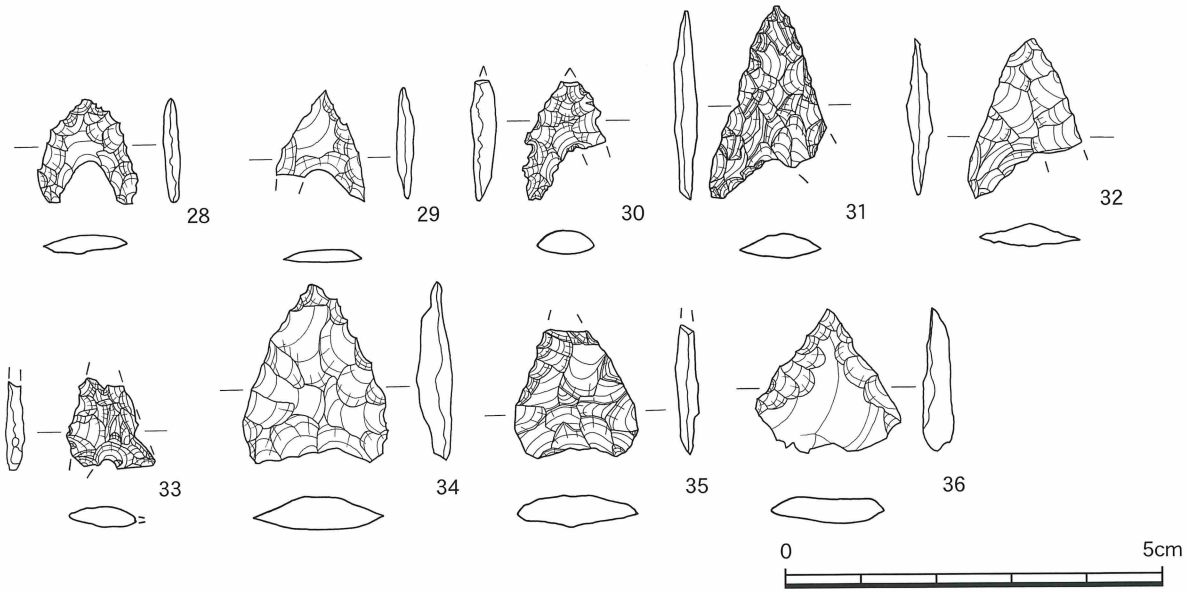
26、27とも口縁部である。26は内外面に条痕がみられ、端部は丸く仕上げられる。27は外面に浅い沈線文がみられ、口縁端部上面に浅い刻みが施される。両者とも縄文時代前期に位置づけられよう。



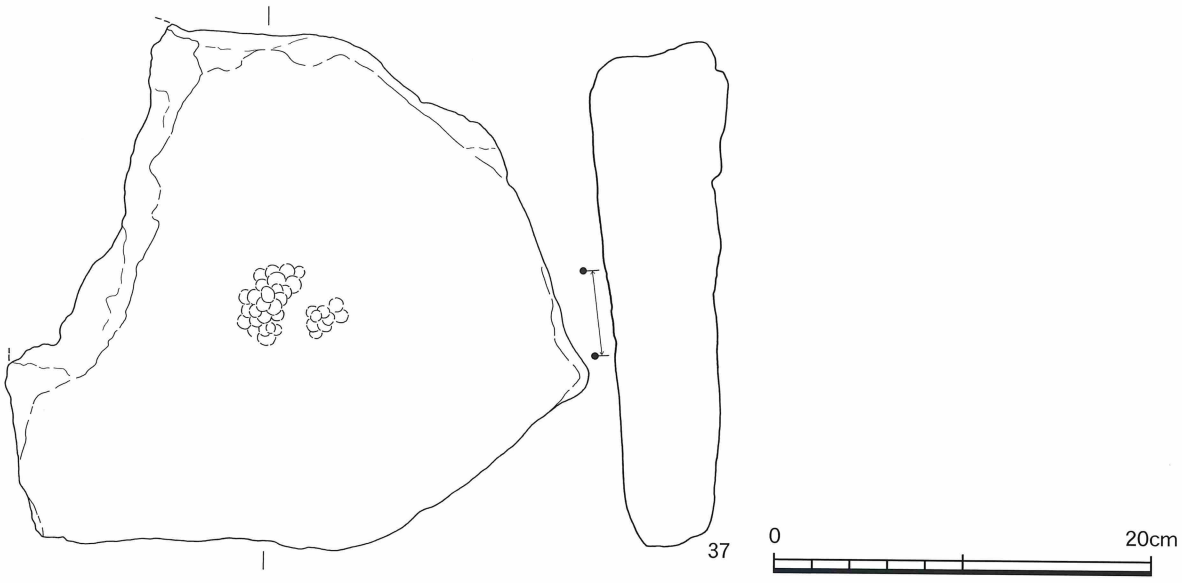
第16図　岩鼻岩陰遺跡2区平面図・土層図（S=1/50）



第17図　岩鼻岩陰遺跡2区出土縄文土器（S=1/3）



第18図　岩鼻岩陰遺跡2区出土石器1（S=1/1）



第19図　岩鼻岩陰遺跡2区出土石器2(S=1/4)

5　3区

(1)　土層と遺物出土状況（第20図）

岩盤の標高は160.1～160.3mで起伏があり、川に向かい緩やかに傾斜する。奥壁から約1.4mの地点から急激に斜めに立ち上がり、岩陰の最奥部にいたる。最奥部の標高は約161.5mで、2区に比べるとやや低い。奥壁から再び斜方向に立ち上がり、その後垂直方向にのびる。雨落ちラインは奥壁から2.0m前後である。奥壁近くの岩盤は斜方向に立ち上がるため、人が立ったまま動きにくい状況である。よって、実質的に生活空間として利用できるのは、岩盤が平坦な部分のみである。

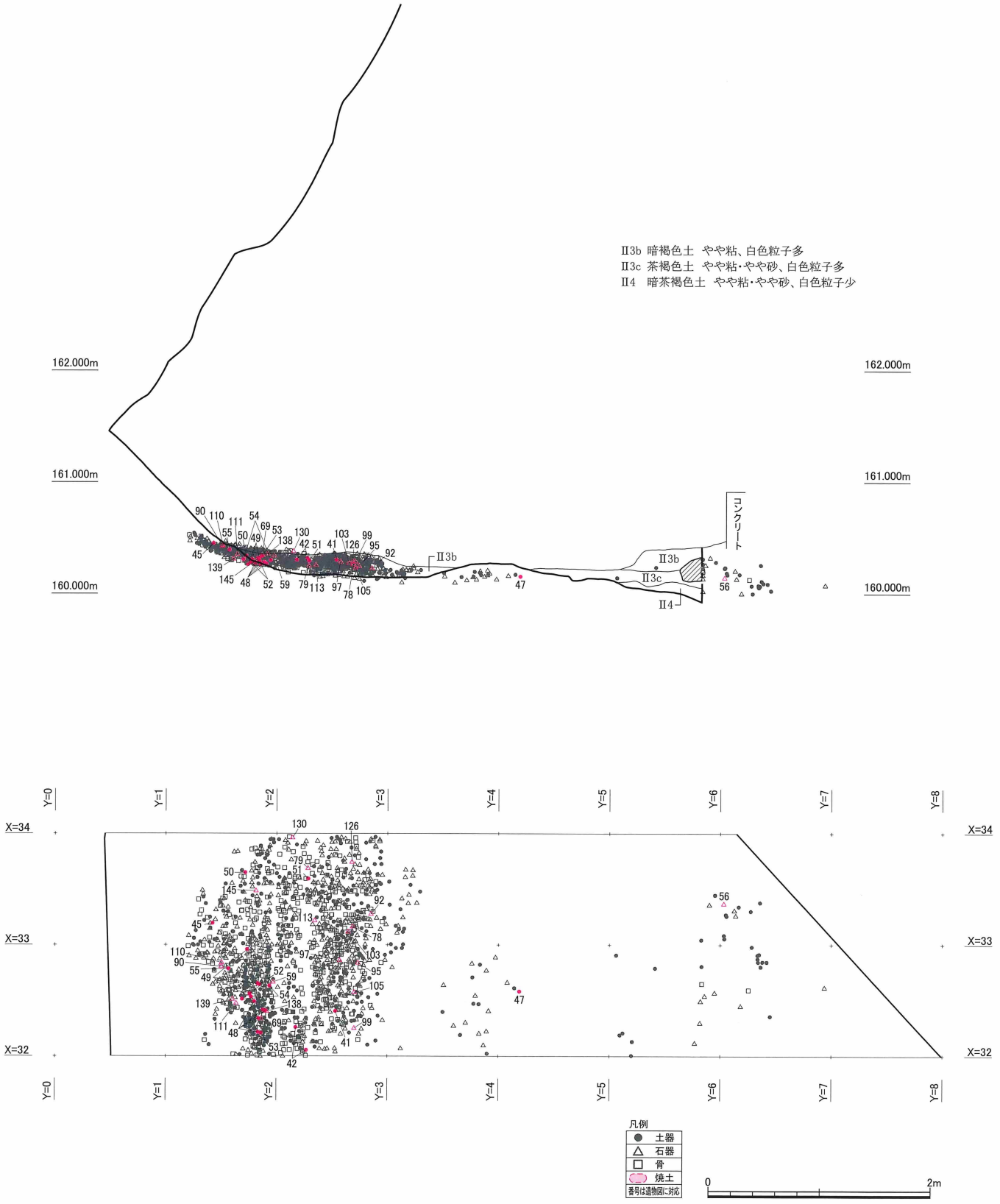
Ⅰ層（表土層）は、1区、2区と同じようにコンクリート片などを含む撹乱層である。周辺の調査区と併せ一括して除去したため、Ⅰ層は図示できていない。Ⅰ層を取り除くと、縄文時代中期の包含層であるⅡ3層となるが、一部では岩盤が露になった箇所もある。縄文時代後晩期の包含層は1区、2区と同様に残存しない。Ⅱ3層は2層に分層でき、上層がb層、下層がc層である。遺物はほとんどがⅡ3b層に包含される。これは先の1区、2区と同様である。縄文時代前期の包含層にあたるⅡ4層は調査区の東端部でわずかに確認されたのみで、隣接する2区や4区とはやや異なった状況である。本調査区内では、Ⅱ4層からの遺物出土は確認することができなかった。 遺物の平面的な分布をみてみると、Ⅱ3層中において、平坦部中程の岩盤が隆起した部分と奥壁の間に遺物が密集することが分かる。この位置での遺物密集は、先の2区ではみられず、南側に隣接する4区ではその傾向がうかがえる。しかし、密集度は3区が突出しており、この遺物の集中は3区を中心にしたものであることが分かる。その範囲は、凡そ南北3m、東西1.5mである（中期集中部②）。この中期集中部②は大半が雨落ちラインの内側に入る。2区を中心に確認された中期集中部①が雨落ちラインの外側に位置するのとは対照的である。奥壁近くで台石と思われる大型の石を検出したが、焼土は確認することができなかった。

(2)　遺物

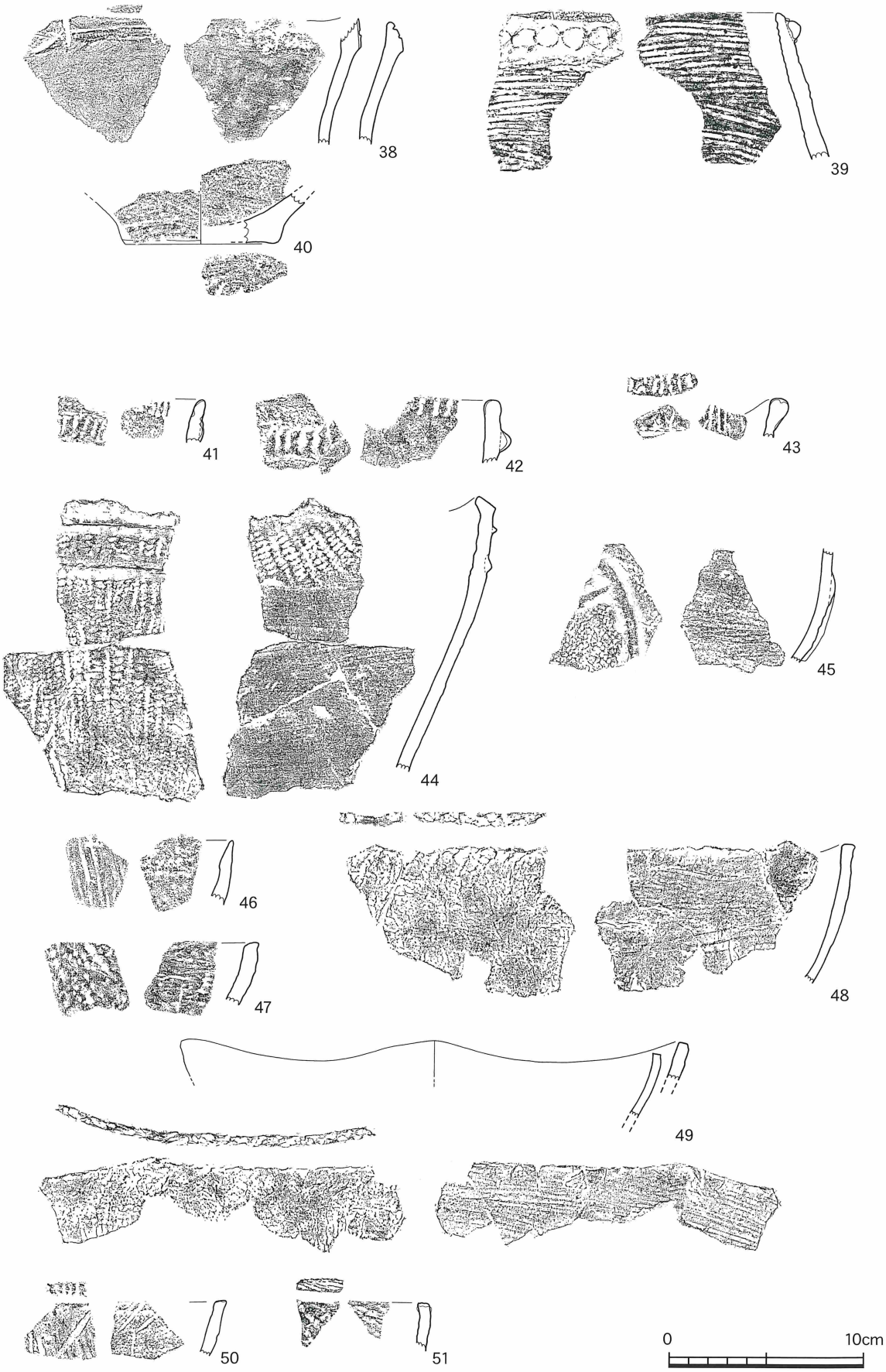
Ⅰ層（第21図38～40）

38は縄文時代後期石町式の深鉢口縁部で、疑似縄文と沈線がみられる。39は弥生時代早期の刻目突帯文土器である。40は底部で、縄文時代後晩期のものか。

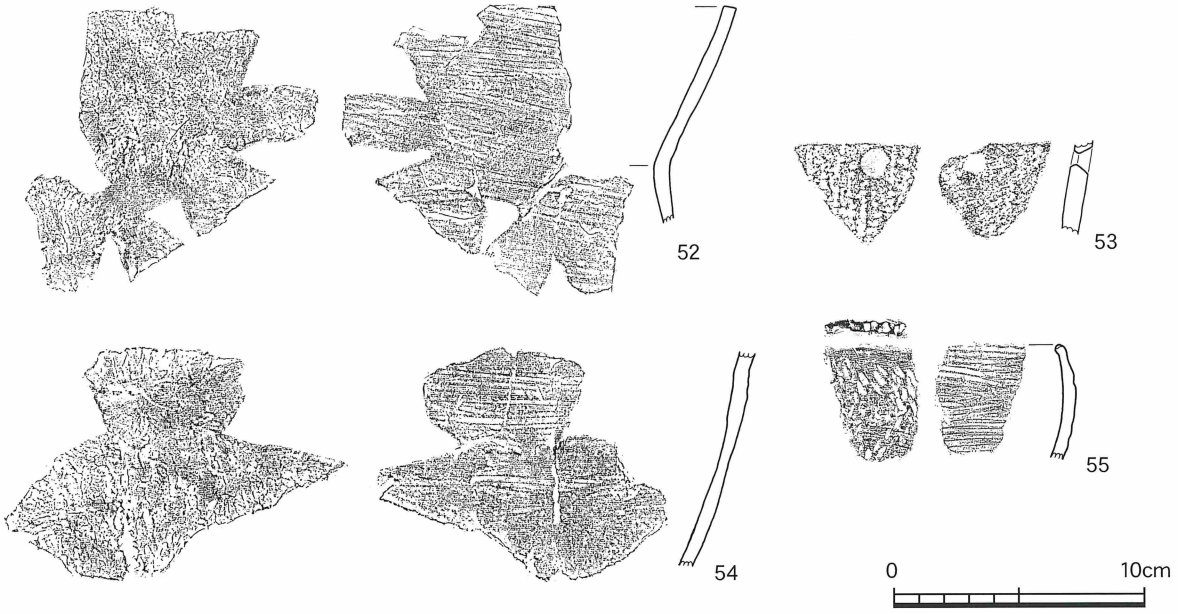
Ⅱ3層（第21図41～43、45～51、第22図52～55、第23図56～83、第24図84～121、第25図122～143、第26図144、第27図145）



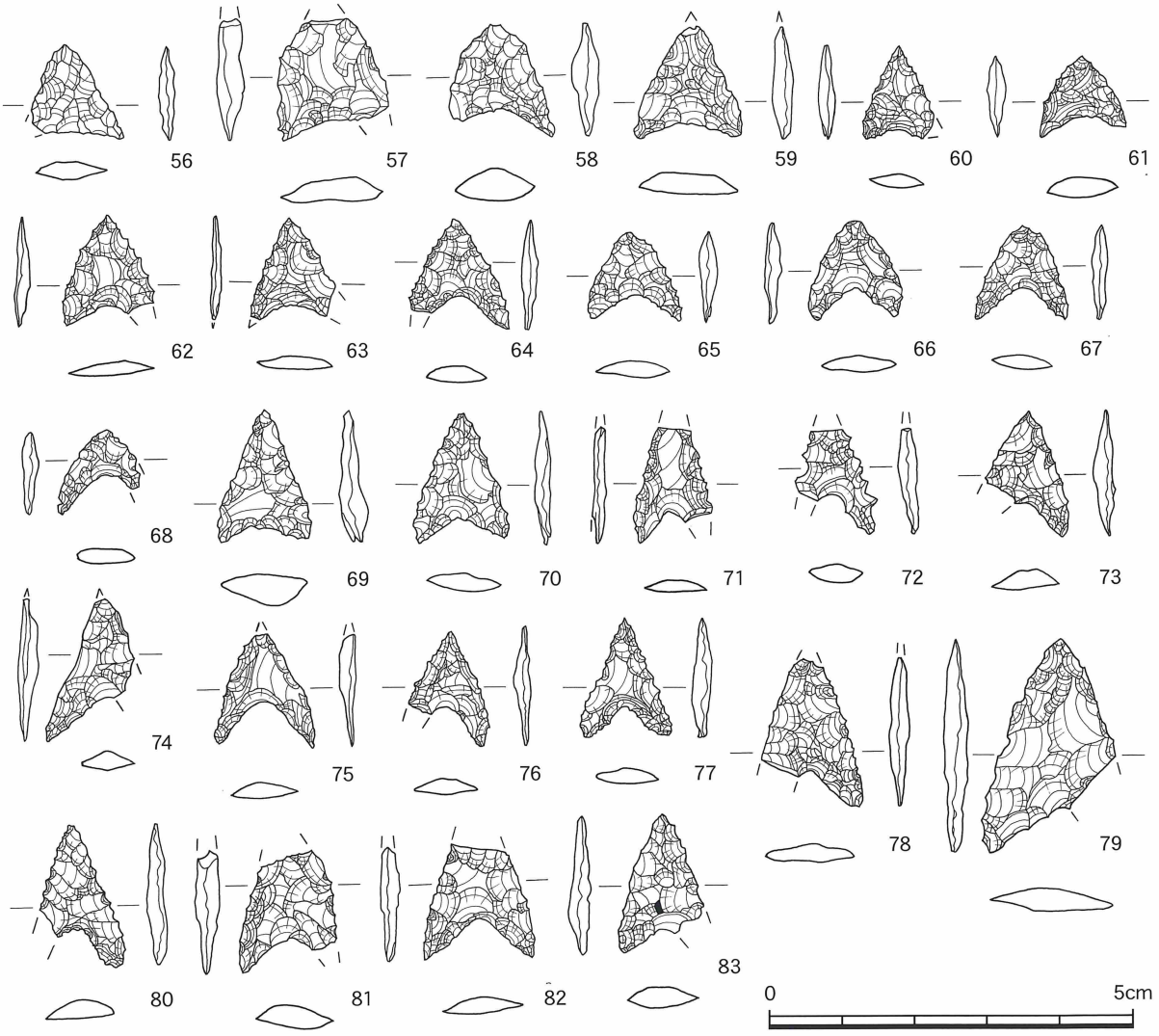
第20図　岩鼻岩陰遺跡3区平面図・土層図(S=1/50)



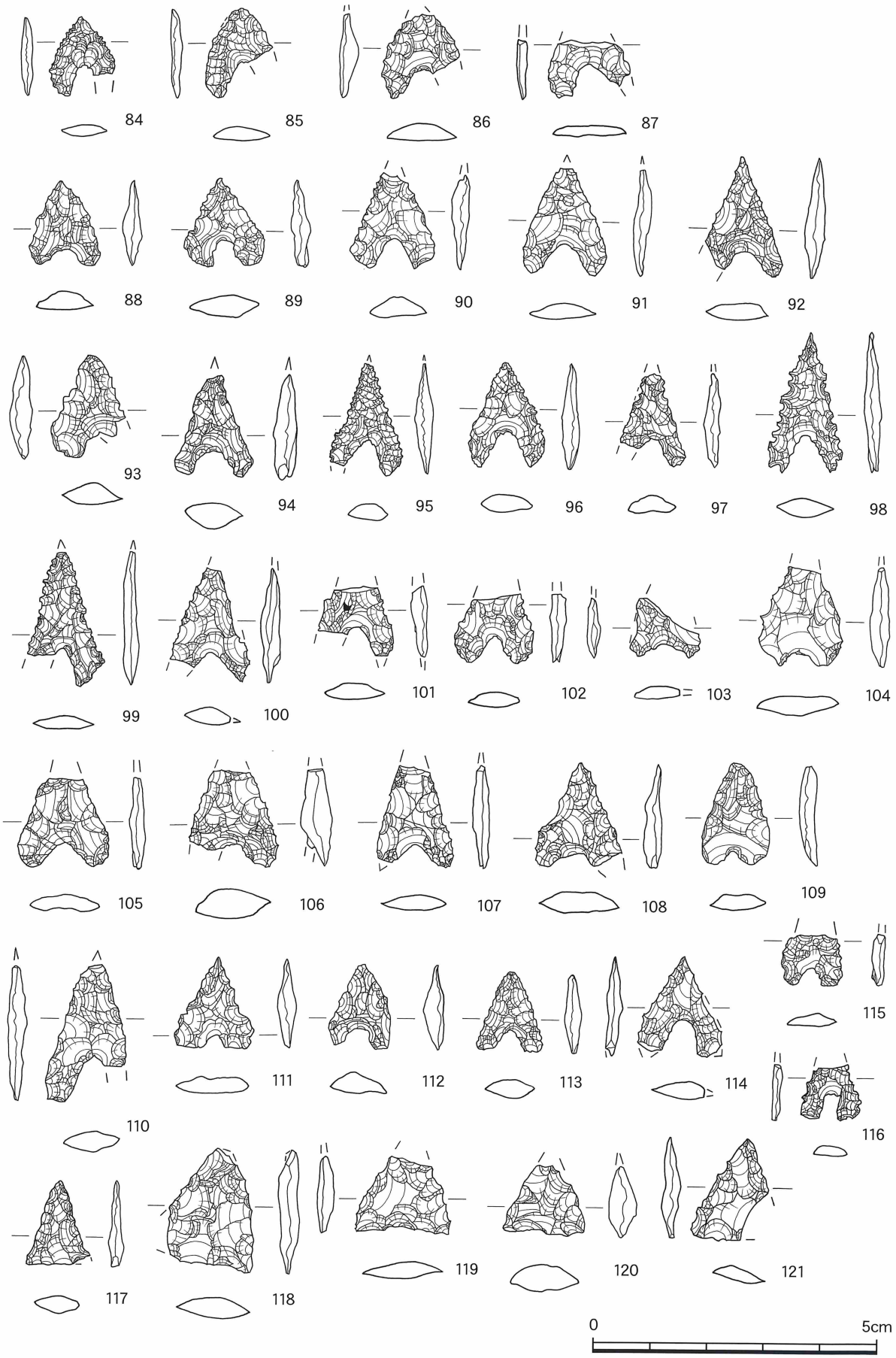
第21図　岩鼻岩陰遺跡3区出土縄文土器1（S=1/3）



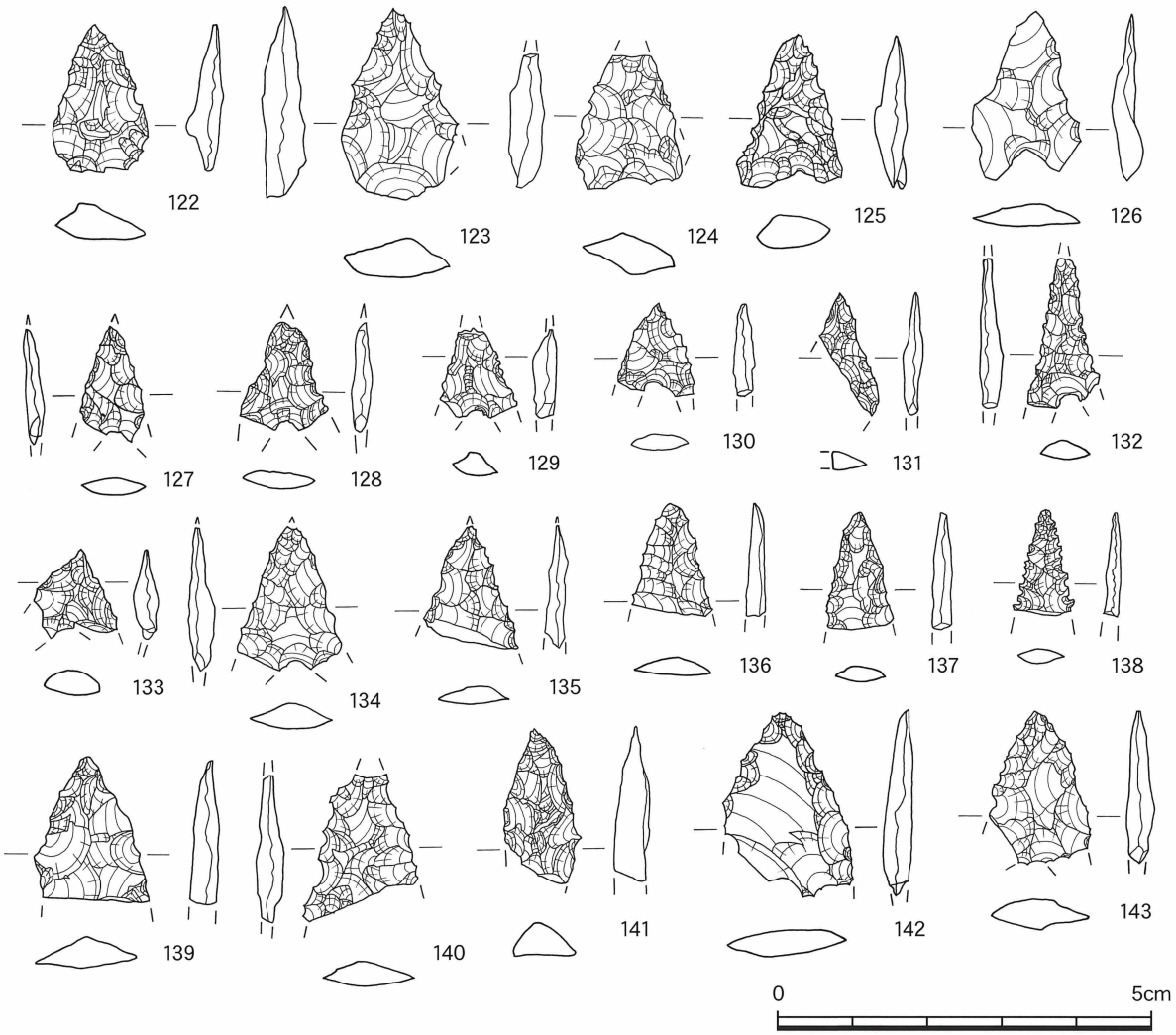
第22図　岩鼻岩陰遺跡3区出土縄文土器2(S=1/3)



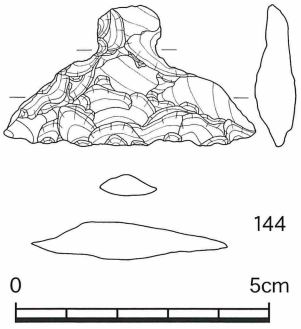
第23図　岩鼻岩陰遺跡3区出土石器1(S=1/1)



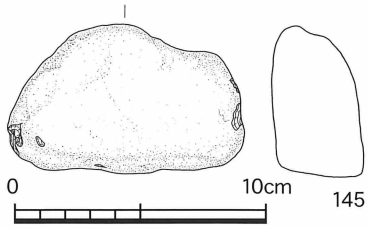
第24図　岩鼻岩陰遺跡3区出土石器2（S=1/1）



第25図　岩鼻岩陰遺跡3区出土石器3(S=1/1)



第26図　岩鼻岩陰遺跡3区出土石器4(S=2/3)



第27図　岩鼻岩陰遺跡3区出土石器5(S=1/3)

土器はいずれも中期に比定できるものである。41、42、45は突帯を付すものである。41、42は口縁下に突帯を付けた後に密な刻みをいれる。同様な刻みは口縁端部上面から内面にかけてみられる。45は縄文地に突帯を貼り付ける。43は口縁部が丸く肥厚し、端部が刻まれる。46、50は内外面に沈線などがみられる。46は口縁端部が尖り気味で、内面が肥厚する。内面肥厚部に縄文が施文されている可能性があるが判然としない。50は口縁端部上面に刻みがはいる。47～49、51～55は粗い縄文のみが施文される一群である。器形的には52に見るように、頸部から外方に折れ口縁部にいたる。口縁部はやや内湾するもの（47～49、51、55）と直線的なもの（52）がある。また、49は波状口縁を呈する。縄文は、基本的に外面のみ

に施文され、48、49、51、55は口縁端部上面にも縄文や撚糸が施される。以上の中期集中部②の土器内容は、2区を中心とする中期集中部①とは大きな差異はない。

石器については石鏃が88本（56～143）出土している。掘削土の篩作業により検出されたものも多いが、大半は中期集中部②に伴うものと思われる。石材は61、62、63、75、81がサヌカイト、90、104、123、135が姫島産ガラス質安山岩、65、76、77が泥岩、97、98、101が西北九州産黒曜石、106がチャート、126が珪質岩で、他は全て姫島産黒曜石である。形態的にはⅠ類（正三角形状）とⅡ類（二等辺三角形状）があり、Ⅱ類が圧倒的に多い。Ⅰ類(56～68）は基部の抉りのa浅いもの(56～63）とb深いもの(64～68）がみられる。Ⅱ類（69～134）はa抉りの浅いもの（69、124、126)、b抉りの深いもの（70～116、126～134)、c基部が水平なもの（117～122)、d基部が尖り気味のもの（123）がある。Ⅱb類が圧倒的に多く、脚の形状にバリエーションがみられる。また、側縁が鋸歯状を呈するもの（72、98、99、138）も少数ではあるが認められる。144はサヌカイト製の石匙、145は姫島産黒曜石の原石である。円礫で、両端の一部に軽い打ち欠きがみられる。

6　4区

(1)　土層と遺物出土状況（第28図）

岩盤は、多少の凹凸がみられるが、平坦面が東西に4mほど形成される。標高は160～160.3mである。東側は川に向かい斜めに下り、奥壁側については奥壁から約1.8mの地点から、急激に斜めに上がる。最奥部の標高は161.2mで、奥壁から上方に向かい斜めに立ち上がる。雨落ち線は、奥壁から2m余である。

層位は、Ⅰ層（表土層）を除去すると、基本的には縄文時代中期の包含層であるⅡ3層となる。一部、奥壁に近い部分はⅠ層が深くなっている。また、川に近い部分では道路建設などで大きく土が動かされており、包含層が削平されている。Ⅱ3層は3層に分層できる。最上層のa層は奥壁に近い部分で残存しているのみであるが、b層とc層は全域にみられる。多くの遺物が、奥壁に近い部分のa層とb層から出土した。縄文時代前期に相当するⅡ4層は、岩盤上に直接堆積するが、奥壁に近い部分では確認することができない。Ⅲ層は自然堆積層。Ⅳ層は河川堆積層で、下層ほど砂を多く含む。

遺物の平面的な分布をみてみると、奥壁に近い部分に遺物が集中する。これらは、北側の3区に近い部分と中央から南側の5区に続く部分に分かれる。前者は3区を中心にみられた中期集中部②の一部と思われ、後者とは区別される可能性が高い。また、調査区の中央付近の空白部を挟み、旧河道に近い部分に緩やかな遺物のまとまりがみられる。また、最奥部で台石の可能性をもつ大型の石が確認されたが、焼土は検出されていない。

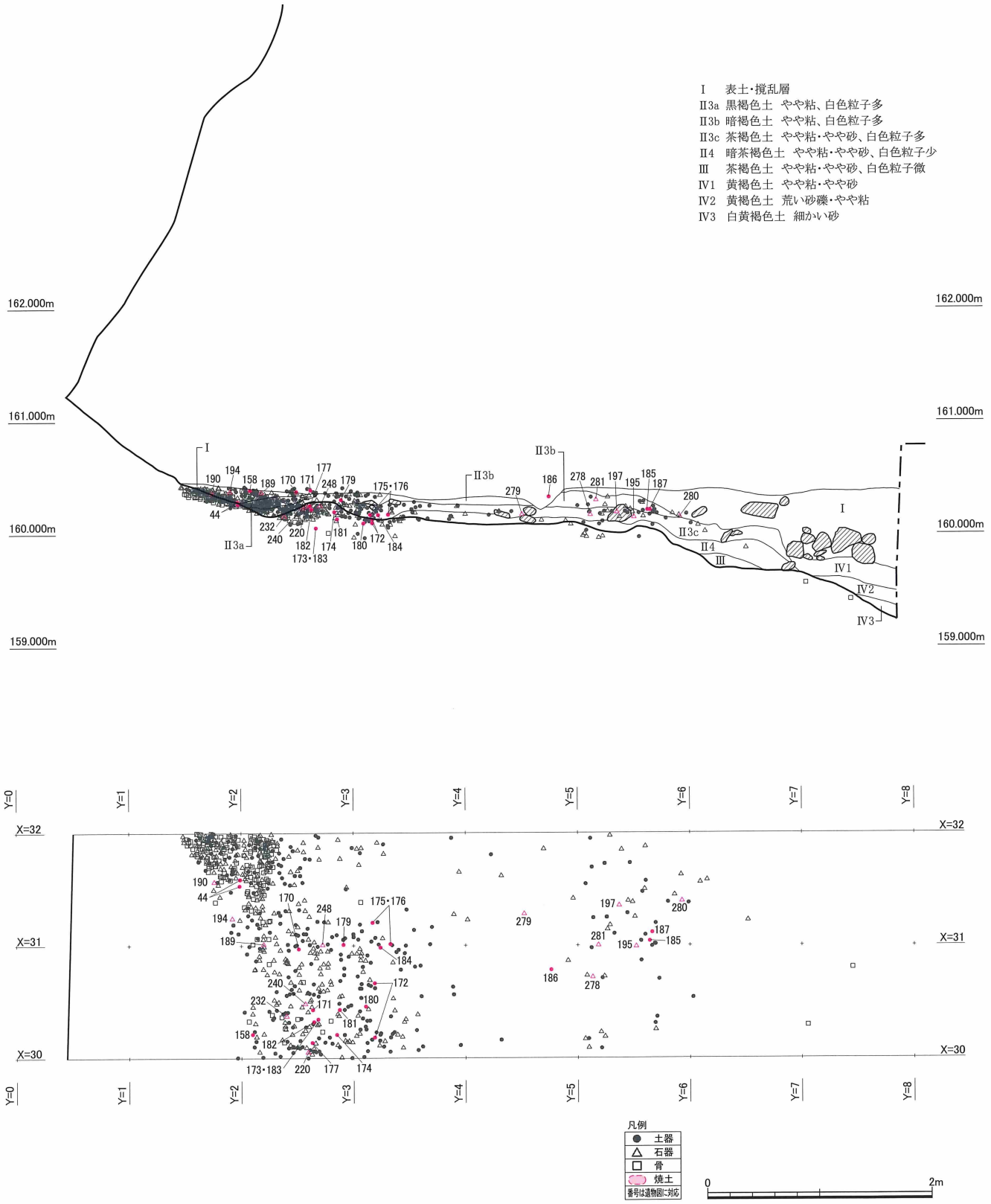
(2)　遺物

Ⅰ層（第29図146～169、第31図188～192、第35図277）

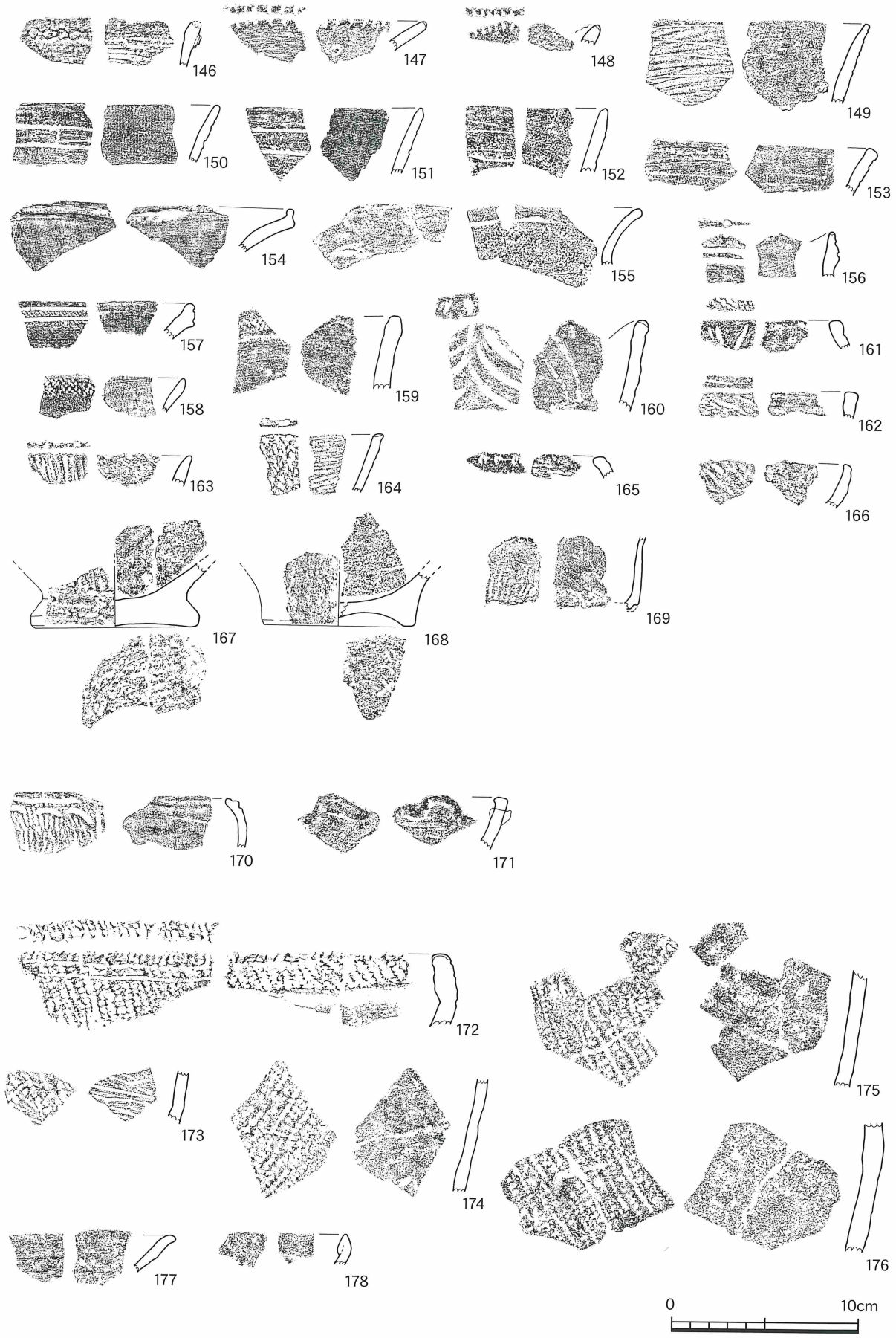
146は弥生時代早期の刻目突帯文甕。147、148は口縁端部上面に刻み目をもつ。149～153は深鉢で、外面に細沈線が間隔をあけて施される。縄文時代晩期の坂口式に後続する段階である。154、155は晩期の浅鉢である。156、157は後期西平式の深鉢、158、159は後期石町式の深鉢である。160は深鉢口縁部で、波状口縁を呈する。161～163、165、166は外面に沈線や条痕が施され、口縁端部上面に縄文（161）や列点（163）がみられるものもある。164は外面に縄文がみられる。これらは縄文時代中期に比定されよう。167～169は平底の底部である。188～192はいずれも姫島産黒曜石製の石鏃で、二等辺三角形状を呈する。192を除き抉りは深い。277は磨石で端部には敲打痕もみられる。

Ⅱ3層（第21図44、第29図170～178、第30図179～187、第31図193、194、第32図195～236、第33図237～267、269、第34図270～276、第35図278～280、第36図281）

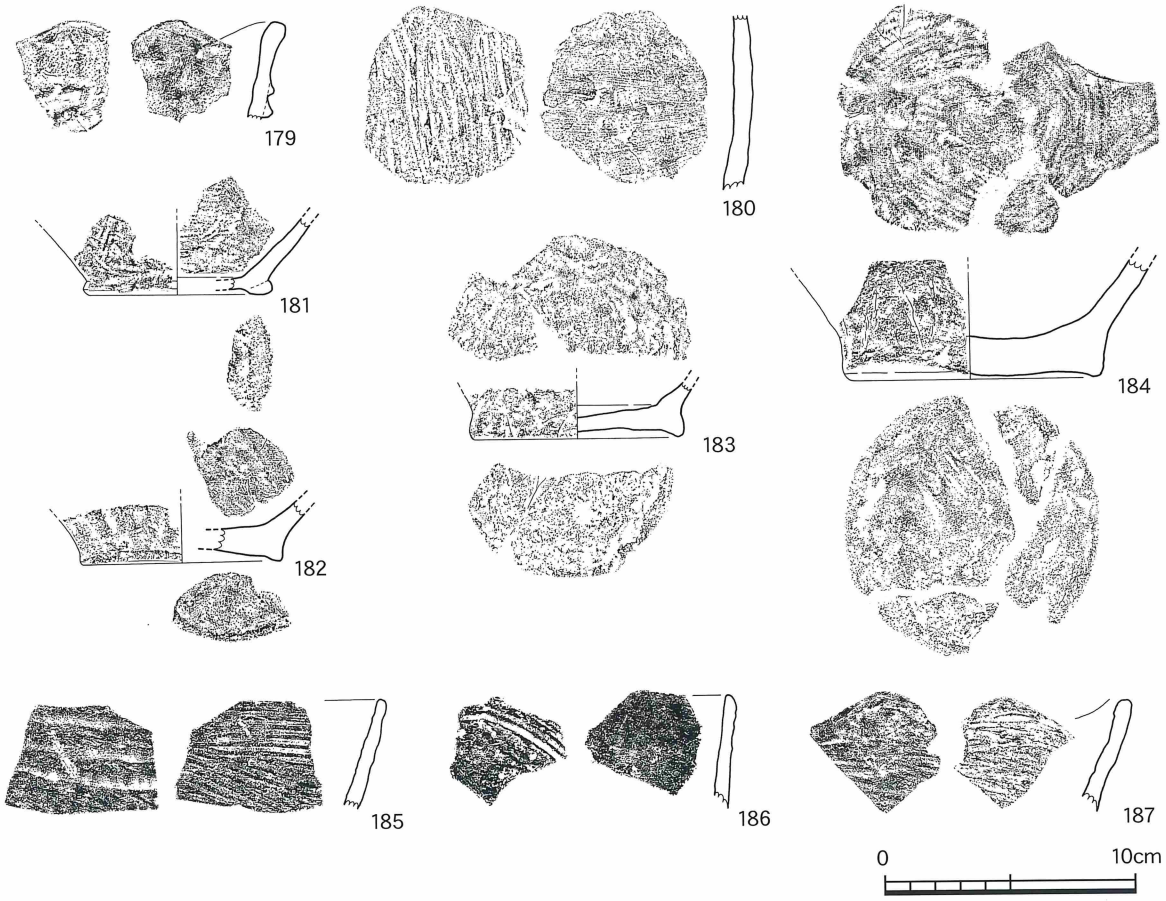
170は内湾する口縁部で、外面に撚糸文のち横位の沈線文。171は口縁部を大きく刻む。44、172～176は内外面に縄文が施される。44は口縁端部が内方に折れ、外面に縄文と突帯、内面に縄文がある。172は口縁部で外面に横走沈線、内面肥厚部に縄文、口縁端部に連続刺突。177は内外面無文。178は内面が肥厚する。179は波状口縁を呈し、外面に粘土紐を貼り付ける。180は外面に条痕。181～184は平底の底部で、縁部に粘土を貼り、



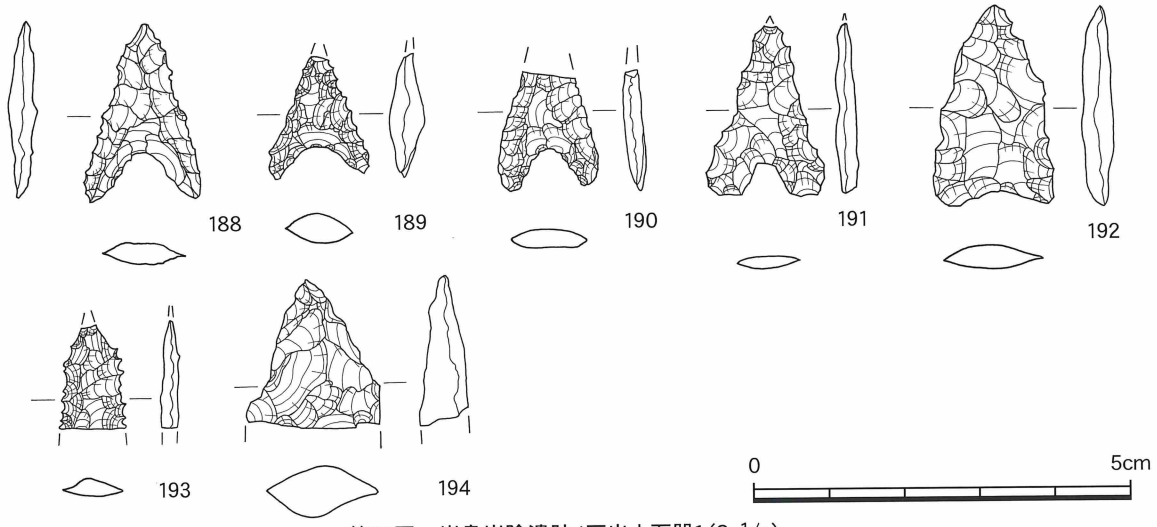
第28図　岩鼻岩陰遺跡4区平面図・土層図（S=1/50）



第29図　岩鼻岩陰遺跡4区出土縄文土器1(S=1/3)

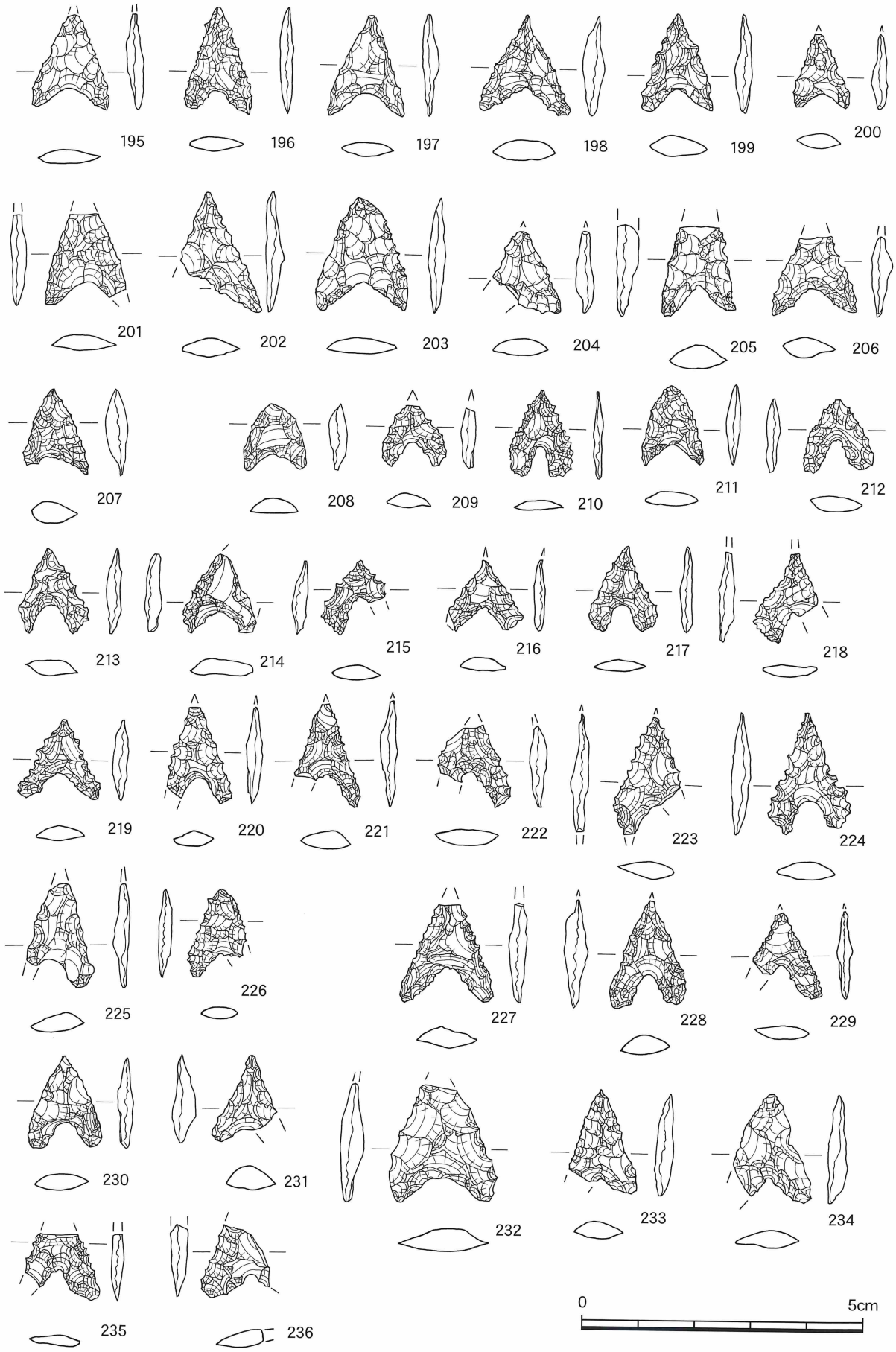


第30図　岩鼻岩陰遺跡4区出土縄文土器2(S=1/3)

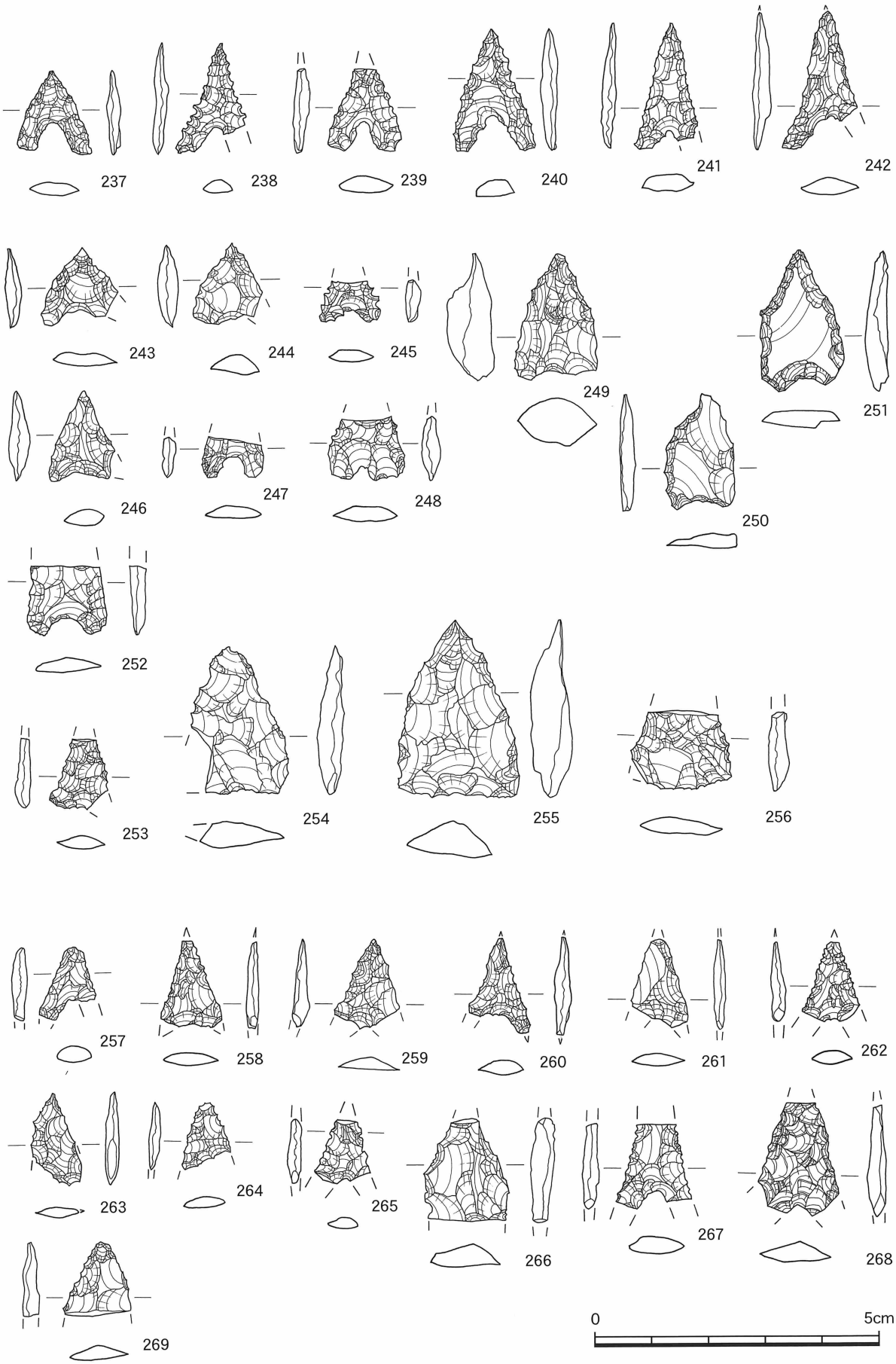


第31図　岩鼻岩陰遺跡4区出土石器1(S=1/1)

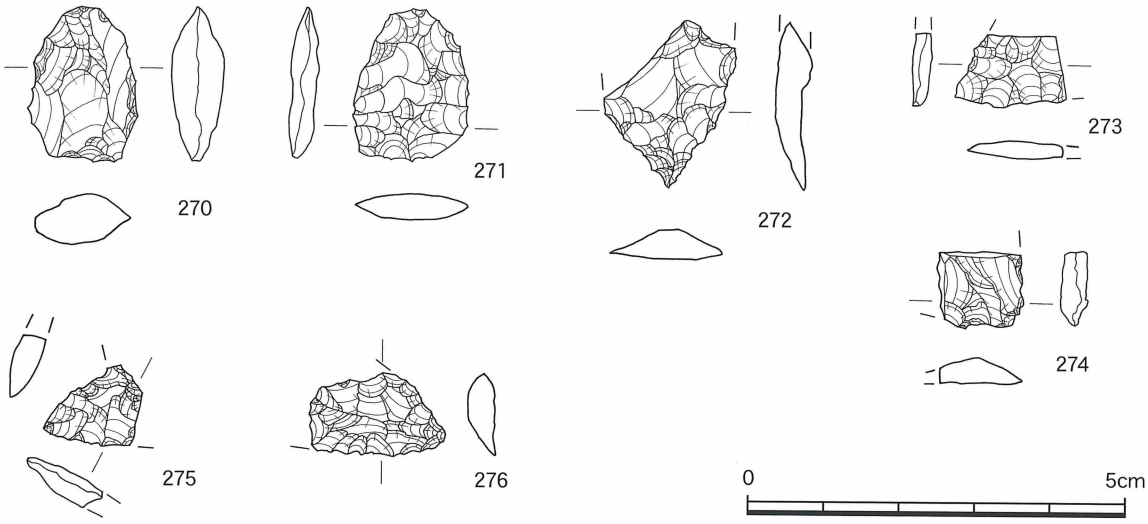
円盤高台状をなす。以上は中期集中部②に属し、このうち171、177を除き縄文時代中期の船元式。171は阿高系のものである。170、171は最上層から出土しており、他に比べ層位的に後出する傾向にある。185～187は内外面ナデや条痕がみられるもので、旧河道に近い部分から出土しており中期集中部②と区別できる。



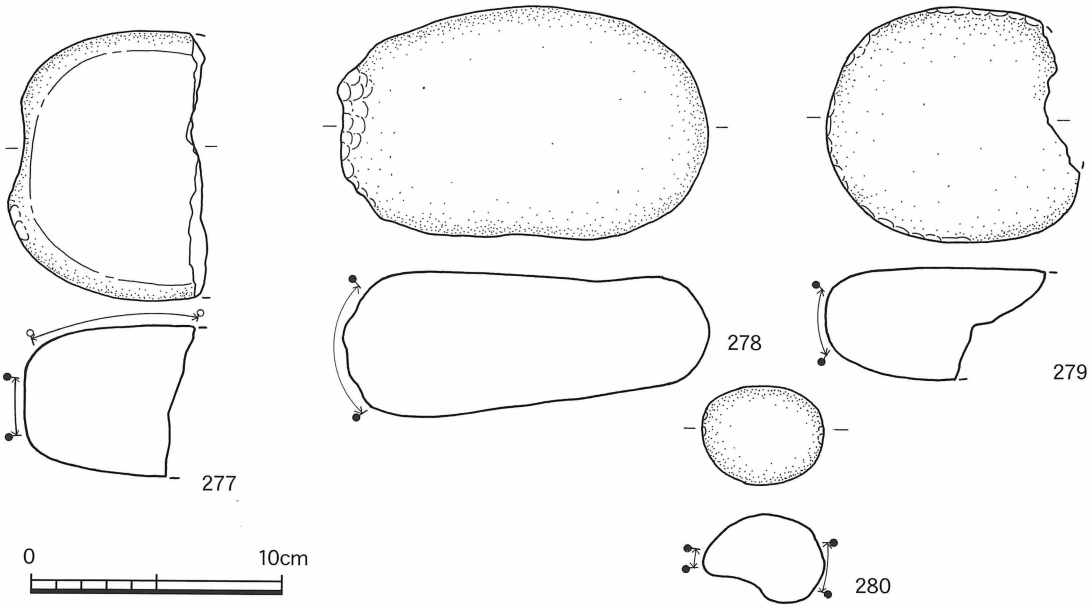
第32図　岩鼻岩陰遺跡4区出土石器2（S=1/1）



第33図　岩鼻岩陰遺跡4区出土石器3（S=1/1）

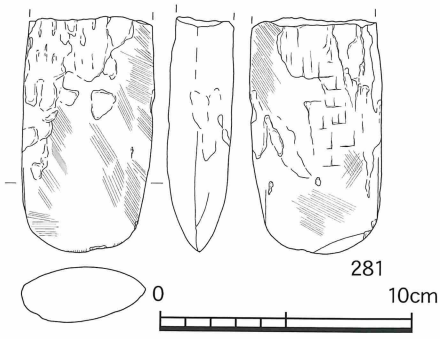


第34図　岩鼻岩陰遺跡4区出土石器4（S=1/1）



第35図　岩鼻岩陰遺跡4区出土石器5（S=1/3）

石器のうち、石鏃は76本出土している（193～267、269）。石材は、237が千枚岩質頁岩、231が姫島産ガラス質安山岩、216、221、227、229、262が泥岩、199が粘板岩、255が珪質岩、222が西北九州産黒曜石、197、206、250がサヌカイト、261がホルンフェルスで、他は全て姫島産黒曜石である。形態的にはⅠ類（正三角形状）、Ⅱ類（二等辺三角形状）、Ⅲ類（五角形状）があり、Ⅱ類が圧倒的に多い。Ⅰ類（208、209、212～216, 243、244）はa基部の抉りの浅いもの（208、243、244）とb深いもの（209、212～216）がみられる。Ⅱ類（195～207、210、211、217～242、245～267、269）は、a抉りの



第36図　岩鼻岩陰遺跡4区出土石器6（S=1/3）

浅いもの（207、246、249～253）とc基部が水平なもの（254～256）が少なく、b抉りの深いものが多数を占める。Ⅱbの中でも抉りや脚の形態にはバリエーションがみられる。また、側縁が鋸歯状を呈するもの（210、219、223、224、227、235、238、245）も認められる。Ⅲ類（193、194）は2本のみである。この形態は晩期に特徴的にみられるもので、上層からの混入である可能性もある。以上の石鏃は掘削土の篩作業により検出されたものも多い。しかし、包含層を5cm単位で掘り下げ、それを篩にかけたので層位的にはⅡ3層で間違いない。

270～276はスクレイパーなどで、いずれも姫島産黒曜石製である。このうち、270は楔形石器である。また、275と276は石匙の可能性を有する。278～280は川原石を利用した敲石である。各々の縁辺部に敲打痕が残る。281は千枚岩質頁岩製の磨製石斧で、基部を欠損する。

7　5区

(1)　土層と遺物出土状況（第37図）

岩盤は、平坦面が東西に約4m形成されるが、大きく起伏している。標高は160m内外である。東側は川に向かい斜めに下り、奥壁から約7.5mの地点から水平になる。水平な面の標高は159mである。奥壁側については奥壁から約1.8mの地点から、急激に斜めに上がる。最奥部の標高は161mで、奥壁から上方に向かい斜めに立ち上がる。雨落ち線は奥壁から2.5～3.0m余で、奥壁に近い遺物密集部が概ね雨落ち線の内側に入る。

層位をみると、奥壁に近い部分などに部分的に、また調査区の川に近い部分には厚く各々Ⅰ層（表土層）が残る。Ⅱ2層は奥壁に近い部分でレンズ状に堆積する。上半部の土にしまりがないなど細分の可能性もあるが、明確に細分することはできなかった。この層の最上層には焼土18がある。遺物は縄文時代中期～弥生時代早期までのものがある。本来的には、上半が晩期から弥生早期、下半が後期後半に形成されたものと考えられ、最上層の焼土18は晩期～弥生早期の所産である。Ⅱ3層は2層に分層できる。最上層のa層は奥壁に近い部分で残存しているのみであるが、b層は全域にみられる。4区までみられたⅡ3c層は明確でなくなる。多くの遺物が奥壁に近い部分から出土したが、3・4区に比べると量的には減少する。b層は中期に相当し、台石もみられる。a層は部分的な残存であることとⅡ2層と連続的に堆積することから遺物では時期を確定できない。縄文時代前期に相当するⅡ4層は、岩盤上に広く堆積する。Ⅲ層は自然堆積層。Ⅳ層は河川堆積層で、下層ほど砂を多く含む。

遺物の平面的な分布をみてみると、Ⅱ4層を除く各層とも奥壁に近い部分に遺物が集中する。特にⅡ2層からは多くの遺物が集中的に出土している。Ⅱ4層は全域から散発的に遺物が出土する。完形近くまで復元できた土器が2点出土したが、場所もやや離れ高低差が認められることから時期差が想定される。Ⅱ4層出土遺物は各区とも極めて少量であるが、これらがさらに時期的に細分されると、個別利用時の遺物量は極めて少なかったことが分かる。

(2)　遺物

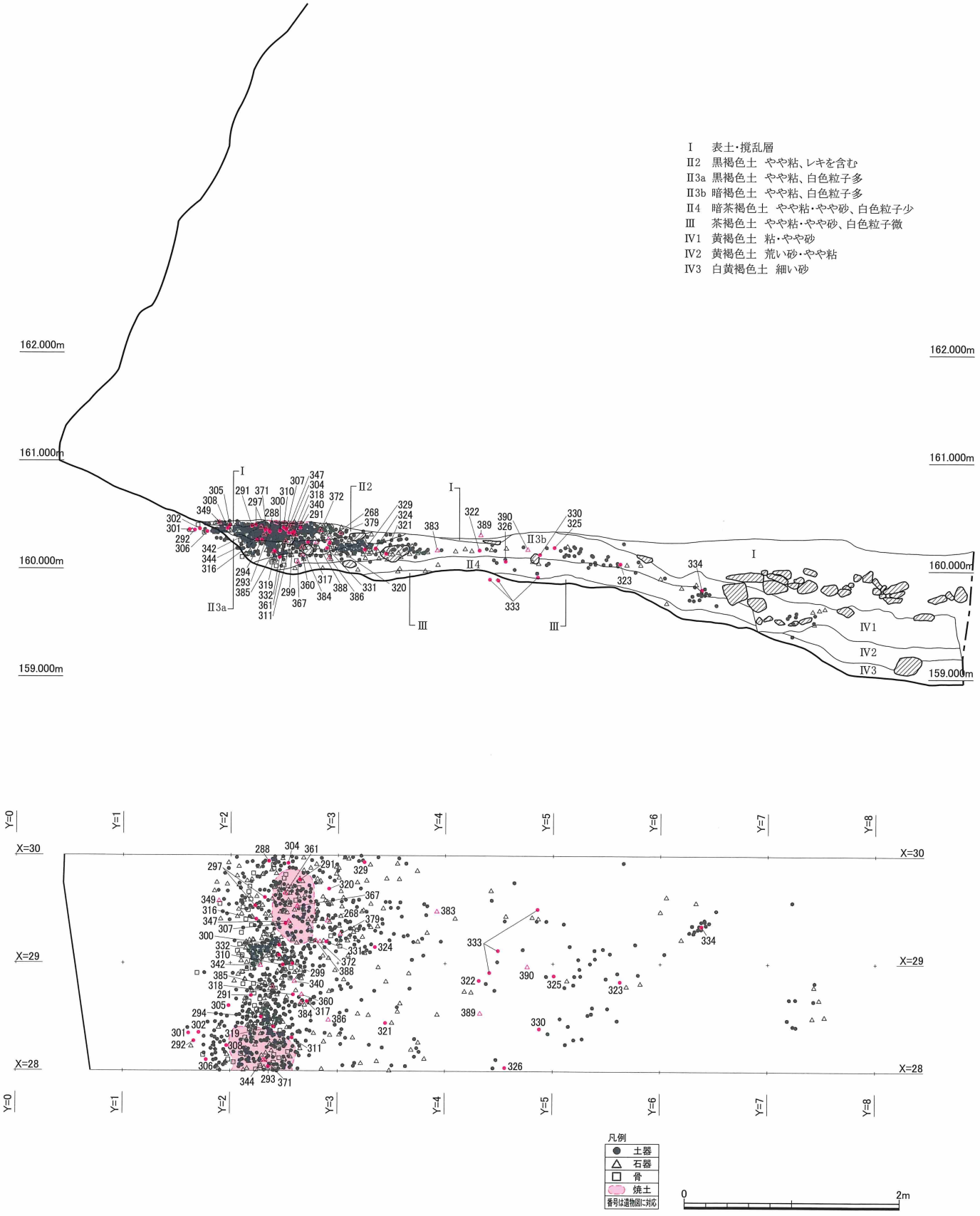
Ⅰ層（第38図282～290、第40図335～337）

282は口縁端部外面に刻みが施されるもので、弥生時代早期か。283～285は晩期の深鉢で、283は外面に沈線がみられる。286は晩期の浅鉢で、口縁部の立ち上がりは低くやや外傾する。坂口式あるいはそれに後続する時期。287は外面に疑似縄文が施される深鉢で、石町式古相段階か。288は中期。289、290は底部で縄文時代後晩期のものと思われる。

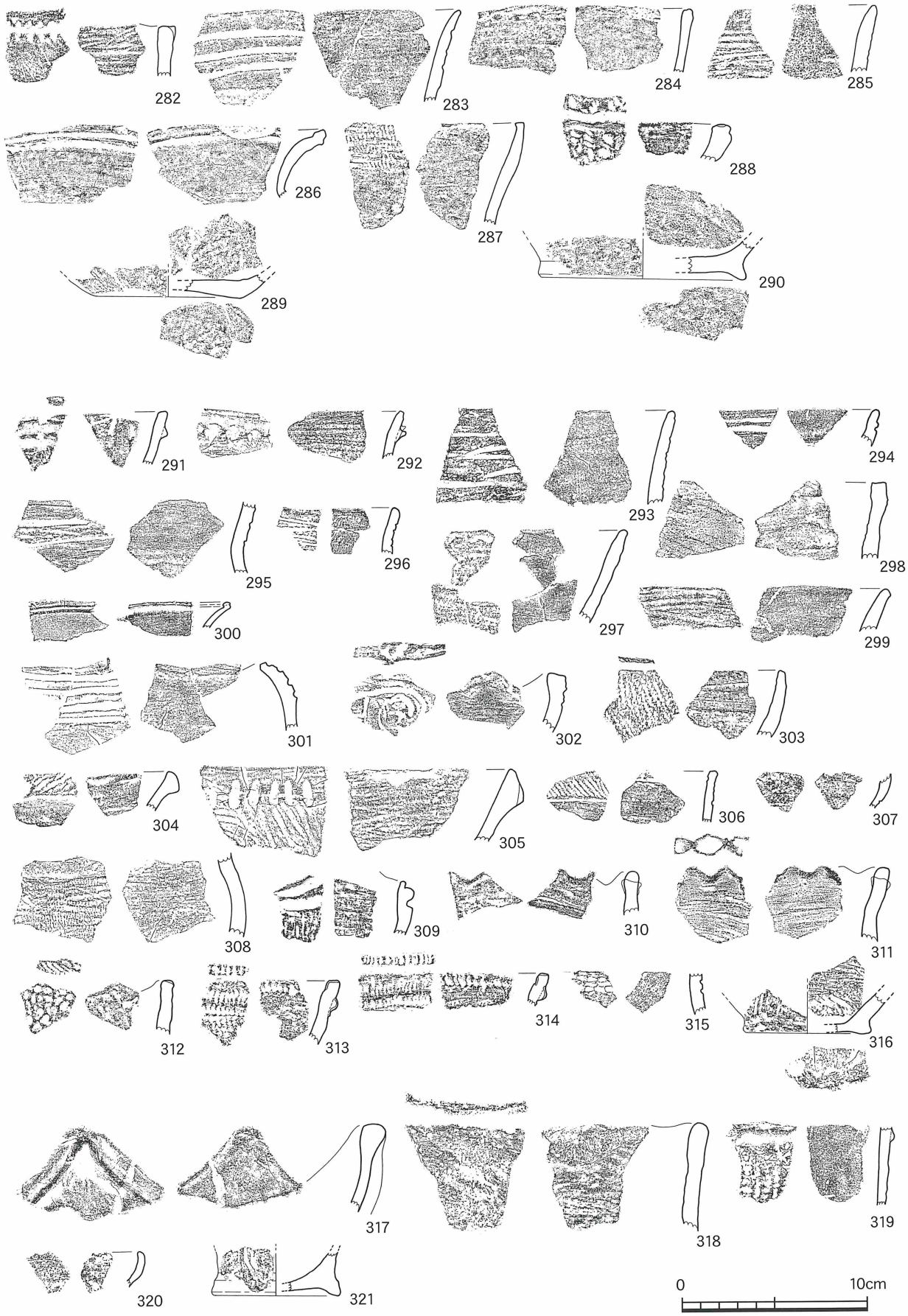
石鏃は337のみサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。

Ⅱ2層（第38図291～316）

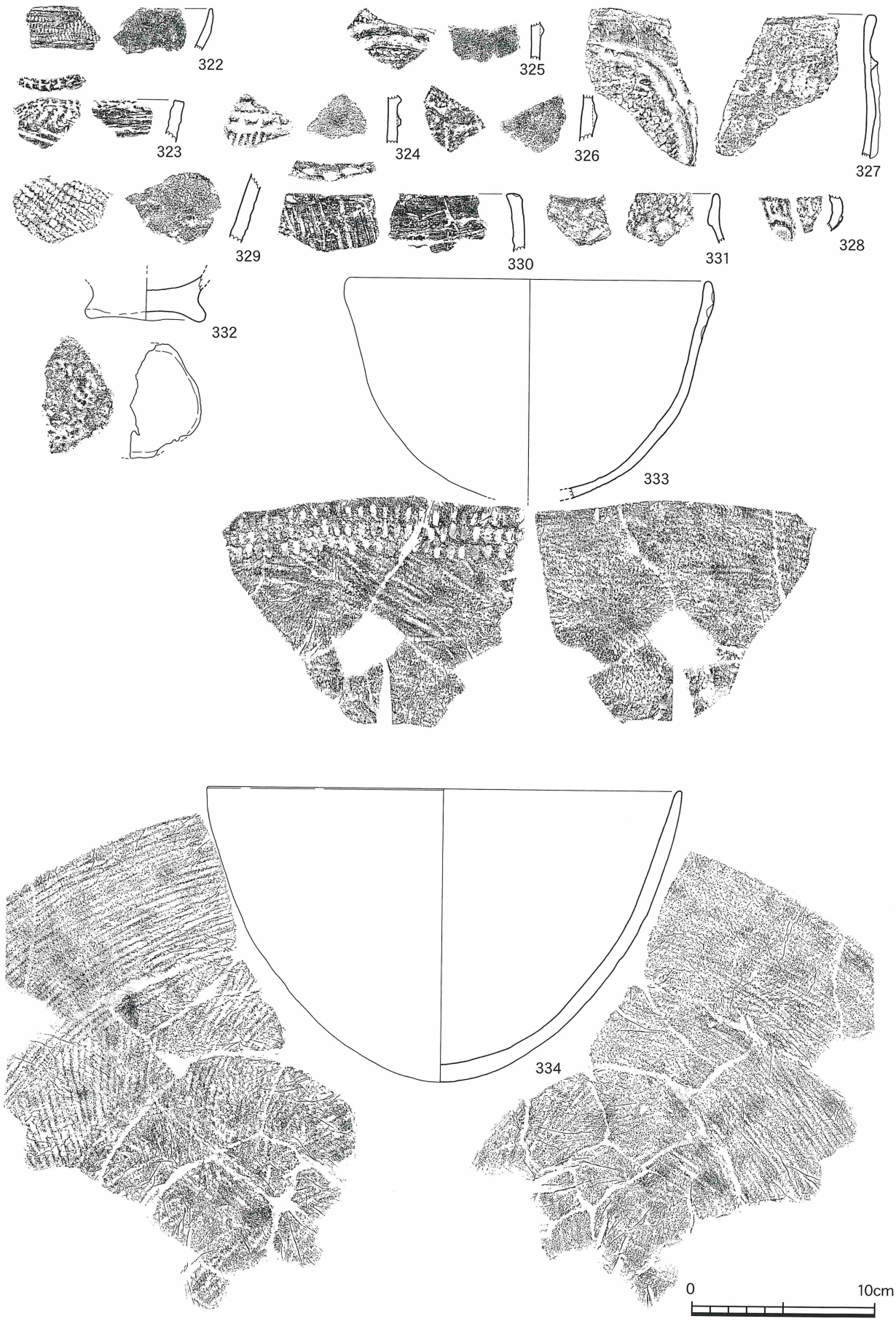
291、292は弥生早期の刻目突帯文。293～295は晩期の沈線文を施す深鉢で、坂口式に後続するもの。297～299は条痕、ナデ調整が施される深鉢で、後晩期か。300は浅鉢で、口縁部の立ち上がりが低いことから、坂口式に後続する。301～303は石町式古相の深鉢で、301、302は波状口縁を呈する。304は口縁部肥厚し、外面に縄文がみられる。305は口縁部を断面三角形に肥厚させ外面に刻みを施すもので、北久根山式。306は外面に縄文と沈線がみられる。307は内湾する口縁部付近、308は疑似縄文が施される深鉢で、ともに石町式と思われる。



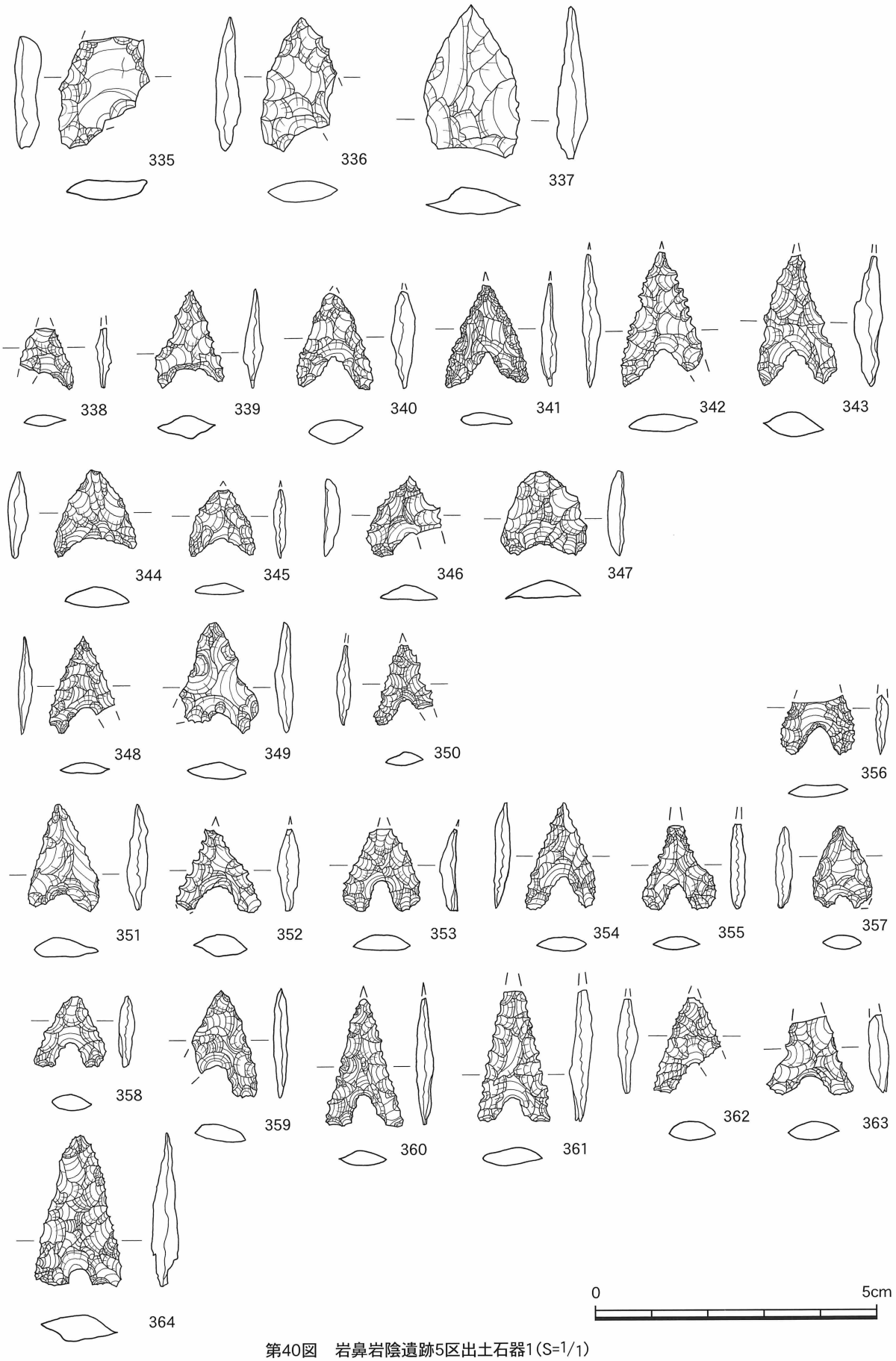
第37図　岩鼻岩陰遺跡5区平面図・土層図（S=1/50）



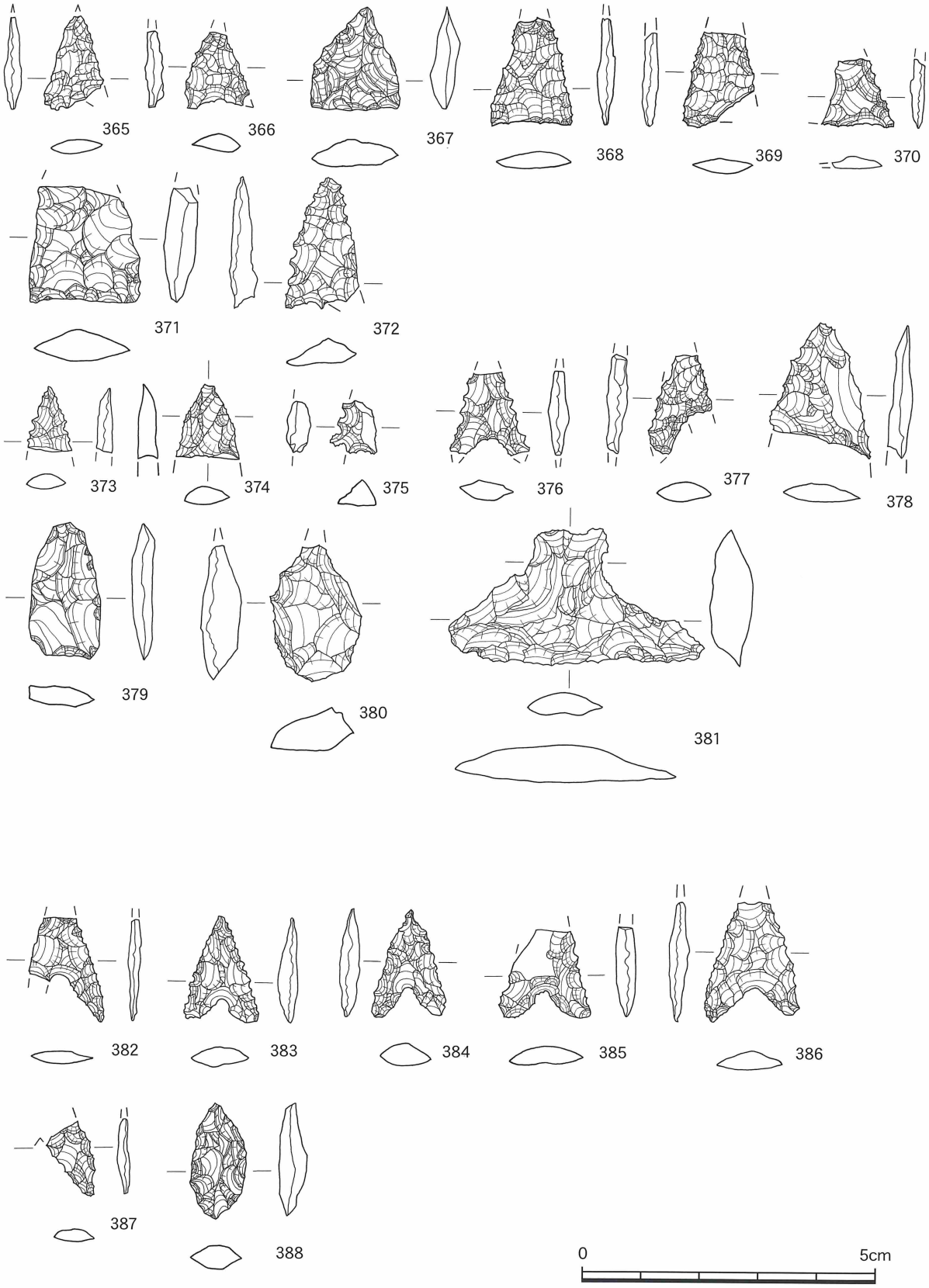
第38図　岩鼻岩陰遺跡5区出土縄文土器1（S=1/3）



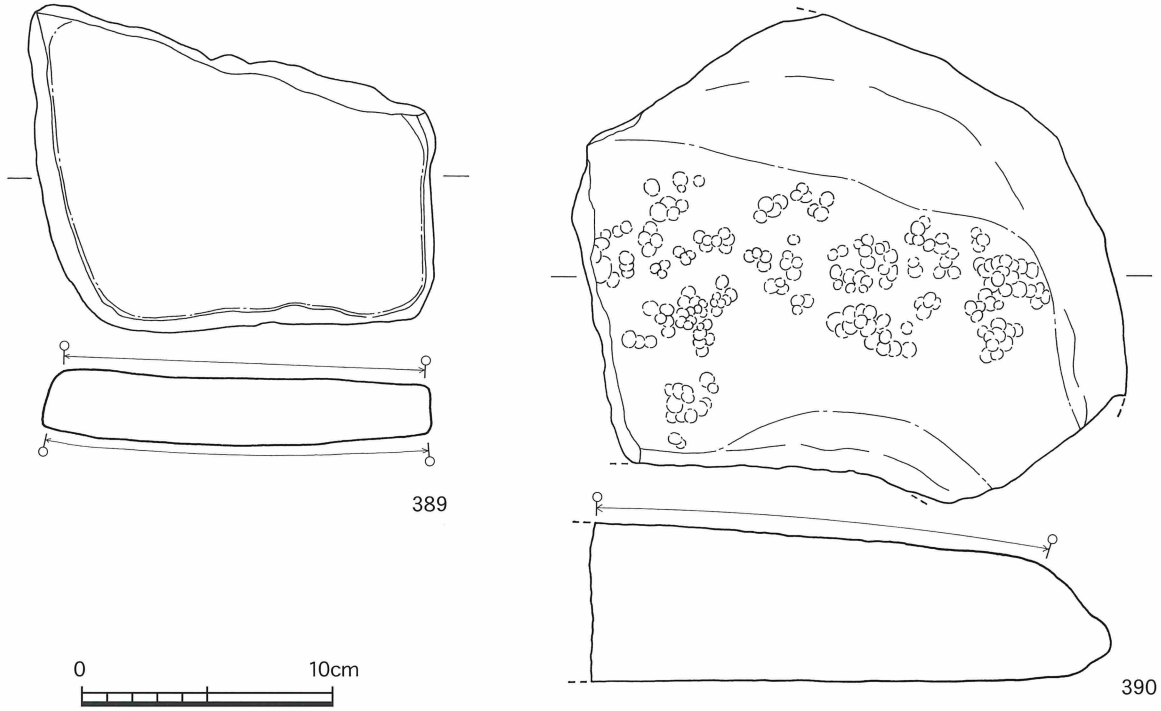
第39図　岩鼻岩陰遺跡5区出土縄文土器2(S=1/3)



第40図　岩鼻岩陰遺跡5区出土石器1（S=1/1）



第41図　岩鼻岩陰遺跡5区出土石器2（S=1/1）



第42図　岩鼻岩陰遺跡5区出土石器3(S=1/3)

309は波状口縁を呈し外面口縁下に深い沈線がある。310、311は口縁部に大きな刻みが連続的にみられる。後期初頭の阿高系のもの。312～315は船元式で、313と314には外面口縁下に低い突帯が付され、突帯上と口縁端部周辺に連続的に刺突が施される。316は底部で、底面が外側に張り出す。

Ⅱ3層（第38図317～321、第39図322～332）

317～320は上層であるa層出土である。317は波頂部の資料で、口縁端部が外方に肥厚する。後期のコウゴー松式である。318は無文土器。319、320は中期の船元式で、319は突帯と縄文が、320は内湾口縁を呈する。

321～332は下層のb層出土である。322は疑似縄文が施文される口縁部である。後期後半に下る可能性があり、上層からの混入か。323～332は中期船元式である。323は口縁部で、外面には縄文、口縁端部上面には刺突がみられる。324～328は外面に突帯がみられるものである。324は2条の突帯が、326は低い突帯が各々みられる。325は縄文地に弧状を呈する断面三角形の突帯が付される。327は胴部から口縁部にかけての資料である。胴部がわずかに膨らみ、頸部から口縁にかけてやや外傾気味である。口縁端部付近は肥厚する。外面は縄文地に頸部から胴部にかけて断面三角形の突帯を弧状に付す。328は口縁部近くの資料で、大きく内湾する。縄文地に、低い突帯が弧状に付される。329は外面に縄文がみられる。330は口縁部で内湾気味である。外面は条痕で、口縁端部上面に刺突文が施される。331も口縁部で、内面が帯状に肥厚し縄文が施文される。321、332は底部である。321は底面外縁部に粘土紐を付し外側に大きく張らせ、上げ底状に仕上げる。332も同様な形態であるが、平面形が五角形を呈する。また、底面がやや厚めである。

Ⅱ4層（第38図333、334）

Ⅱ4層出土の土器は2点のみである。しかし、層位的には334が本層の上部、333が下部から出土している。333は復元口径20.0cm、高さは現状で11.8cmという小型品である。底部をわずかに欠くが丸底を呈する。口縁部は体部から直立するもので、端部は丸みをもつ。内外面条痕調整で、外面口縁下に棒状工具による刺突が3段にわたり施される。334も丸底で、333と同様な器形を呈する。復元口径25.8cm、高さ15.9cmで333よりは一回り大きいが小型品である。内外面とも条痕調整が残るのみである。

Ⅱ2層、Ⅱ3層の石器（第33図268、第40図338～364、第41図365～388、第42図389、390）

石鏃49、石匙1、スクレイパー2のうち確実にⅡ2層に伴うものは、340、342、344、347、349、371、372の石鏃7本である。7本のうち340がチャート製で、他は姫島産黒曜石製である。以上のうち、平基で大型品の371は五角形状を呈するものである可能性が高く、晩期の所産であろう。

Ⅱ3a層に確実に伴うものは、268、361、379、384の石鏃と388のスクレイパーである。いずれも姫島産黒曜石製である。

Ⅱ3b層に確実に伴うものは、360、367、383、386の石鏃と389、390の台石である。石鏃のうち、チャート製の383を除き他は姫島産黒曜石製である。389、390は台石としたが、やや小型のものである。389は上下面に磨った痕跡が観察できる。390は上面に磨った痕跡と多数の敲打痕がみられる。

以上の確実に層位が押さえられる資料以外は、B5区の篩作業によって得られた資料である。掘り下げ段階では、詳細な層を把握していなかったため、単純に上から5cmごとに掘削土を篩にかけた。そのため、Ⅱ2、Ⅱ3a、Ⅱ3bの各層がレンズ状に堆積するB5区では、篩作業で得られた資料の層位が特定できない。ただ、大半はⅡ2層に属すると思われる。石鏃34本のうち341、354、357、363、370、382がサヌカイト製、352、376が姫島産ガラス質安山岩製である。形態的にはⅠ類（正三角形状）、Ⅱ類（二等辺三角形状）がありⅡ類が大半を占める。また、Ⅱ類中にはa抉りの浅いもの、b抉りの深いもの、c基部が水平なものがあり、bが多数を占める。380、388は小型のスクレイパーで、380はサヌカイト製、388は姫島産黒曜石製である。381はサヌカイト製の横長の石匙である。

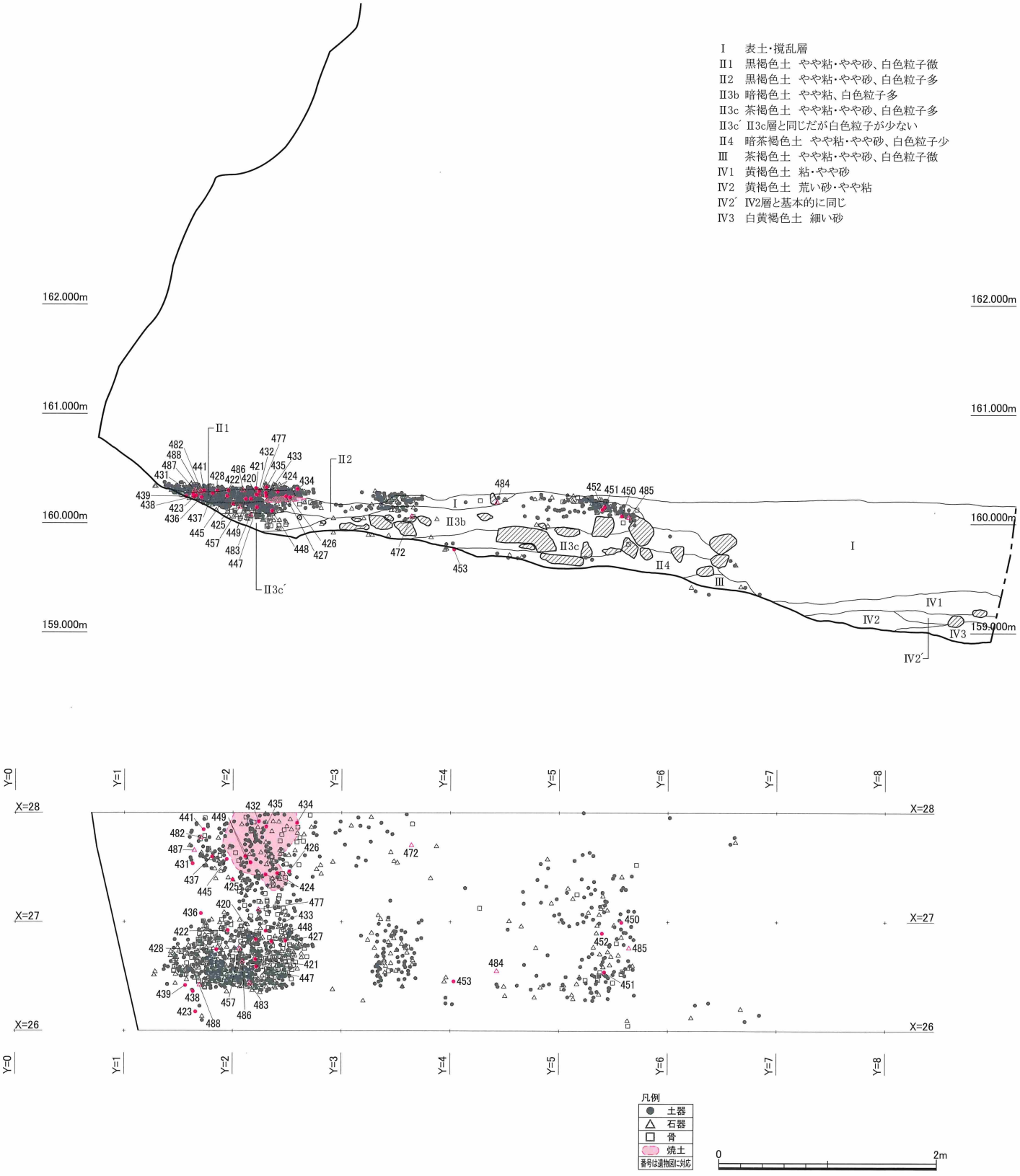
8　6区

(1)　土層と遺物出土状況（第43図）

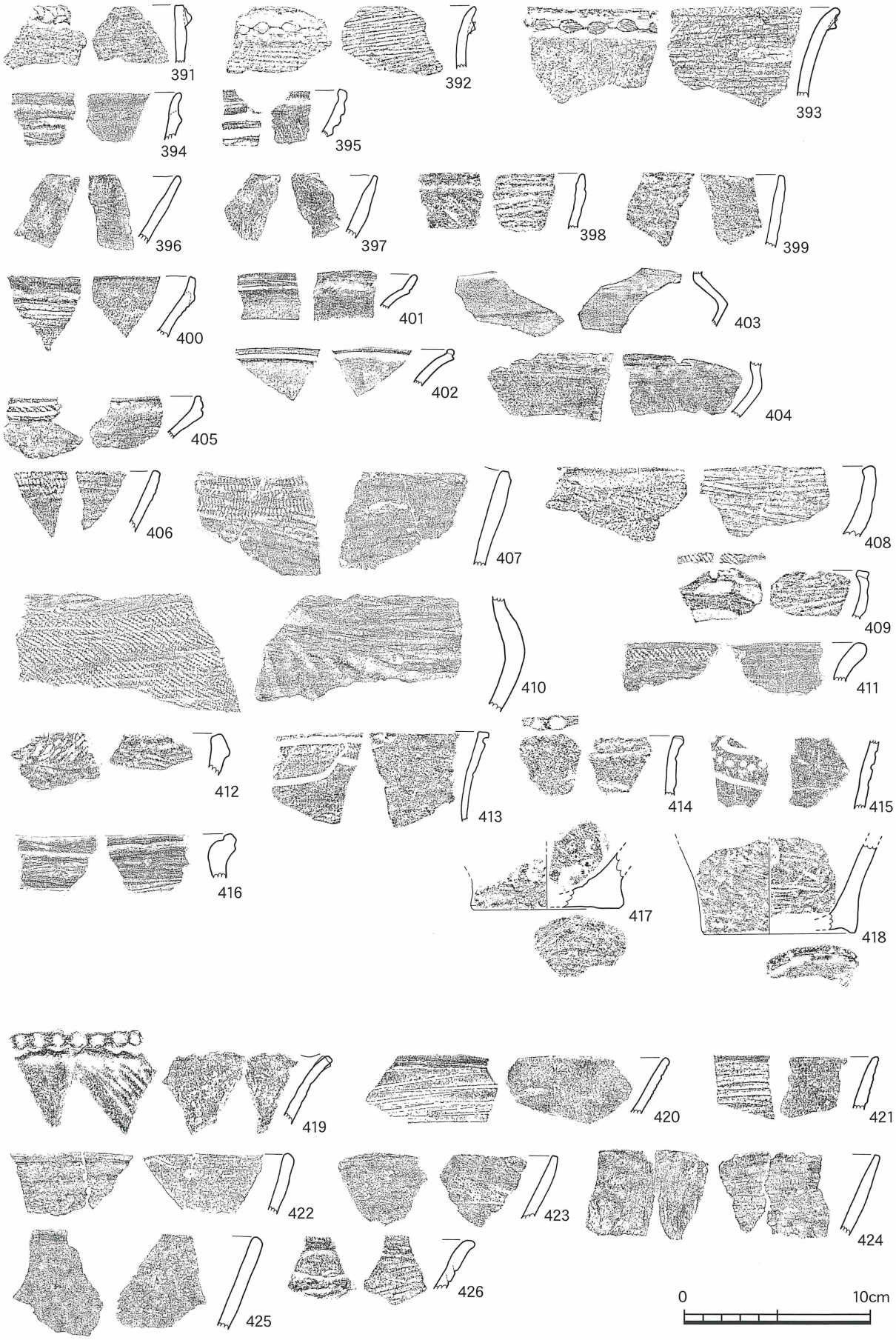
岩盤の状況は5区とほぼ同様であるが、明確な平坦面が形成されず、川に向かい緩やかに傾斜する。標高は、奥壁に近い部分で160m内外である。奥壁側については奥壁から約1.8mの地点から、急激に斜めに上がる。最奥部の標高は160.8mで、奥壁から上方に向かい斜めに立ち上がる。雨落ち線は奥壁から2.5m余で、奥壁に近い遺物密集部が概ね雨落ち線の内側に入る。

層位をみると、調査区中央部と川に近い部分にⅠ層がみられる。川に近い部分は撹乱が著しく、Ⅰ層が厚く堆積する。Ⅱ1層は奥壁に近い部分にのみに残存する。Ⅱ1層下面には焼土17がみられる。焼土17は5区から6区にかけてみられるもので、南北1.1m、東西0.6mの広さをもつ。厚さは0.05mで比較的しっかりしたものである。詳細は後述するが、Ⅱ1層は縄文時代中期から晩期にいたる幅のある遺物が出土する。焼土17はⅡ1層の最下面に形成されていることから、その時期は縄文時代後期後半から晩期の段階と考えられる。5区で確認された焼土18よりは、層位的に明らかに古い。Ⅱ2層は奥から2m程みられる。隣接する5区では、奥壁に近い部分でレンズ状に堆積したⅡ2層がみられた。これは細分の可能性もあるが、明確に細分することはできなかった。本区では5区のⅡ2層に対応するものが、Ⅱ1層、Ⅱ2層に明確に分けてとらえることができた。Ⅱ1層からは遺物が集中して出土した。時期的には中期～晩期までのものがみられ、比較的時間幅のあるものが混在している。Ⅱ1層とⅡ2層の遺物は連続的に堆積しており分離が難しいが、Ⅱ2層の遺物量は比較的少量のようである。Ⅱ3層はb層とc層があり、遺物の多くはb層から出土した。これらの状況は、1区から5区の状況と同様であるが、遺物量はやや少ない傾向にある。Ⅱ4層は岩盤に直接堆積するかたちで、平坦面中程から川に向かい堆積する。6区から7区にかけては落盤が顕著で、大型の岩塊が多くみられた。これらはⅡ3層からⅡ4層にかけて堆積しており、縄文時代前期から中期にかけて落盤がおきたことが分かる。Ⅳ層は河川堆積層で、砂を多く含む層がみられる。5区に比べると残存状況が悪い。

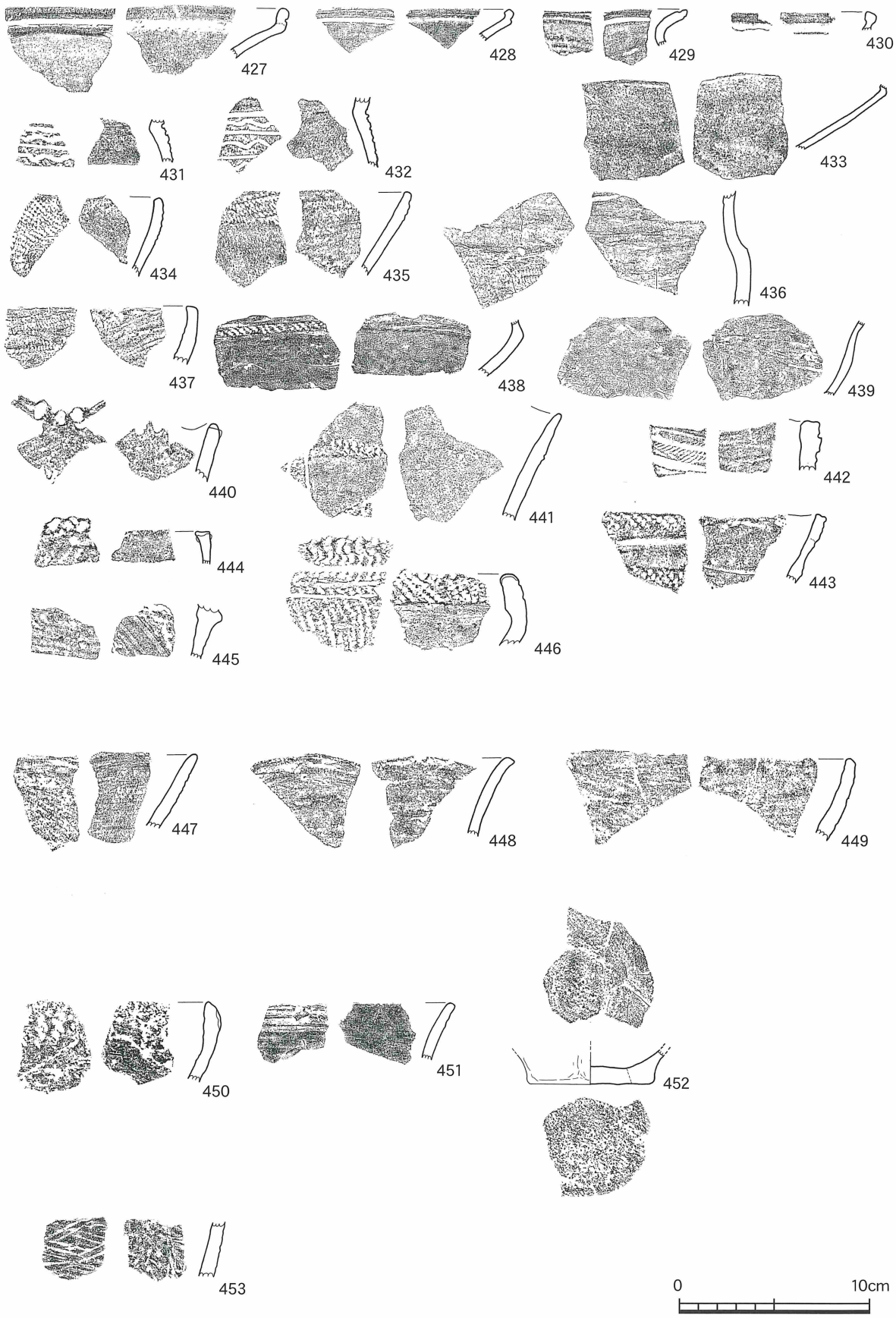
遺物の平面的な分布をみてみると、Ⅱ1層からⅡ2層にかけ奥壁に近い部分に遺物が集中する。Ⅱ2層については、奥壁に近い部分とは別に、調査区中程に集中が確認できる。Ⅱ3層では川に近い部分に集中する傾向がうかがえる。Ⅱ4層は少量の遺物が散発的に出土する。



第43図　岩鼻岩陰遺跡6区平面図・土層図(S=1/50)



第44図　岩鼻岩陰遺跡6区出土縄文土器1(S=1/3)



第45図　岩鼻岩陰遺跡6区出土縄文土器2（S=1/3）

⑵　遺物

Ⅰ層（第44図391～418、第46図454～456）

391～393は弥生時代早期の刻目突帯文土器である。394は縄文時代晩期の深鉢で、粘土紐貼り付け時の段が突帯状を呈す。晩期初から前半の時期である。395は晩期坂口式の浅鉢である。外面に沈線による文様が施され、口縁部内面は肥厚し段がつく。396～399は無文の深鉢で、後晩期の所産であろう。400～404は晩期前半の浅鉢等である。402は口縁の立ち上がりが低く、口縁部形態に退化傾向が顕著に認められることから坂口式より後出するものである。405は後期の西平式。406～411は後期石町式古相段階のものか。406、407は口縁下に疑似縄文が帯状にみられる。このうち、407は波状口縁を呈する。409は内湾する口縁形態を呈するものの波頂部である。410、411は胴部下半や口縁部外面に縄文が施される。412～415は後期初頭から前葉にかけてのものか。416は後期鐘崎式である。417、418は底部である。

石器の454～456はいずれも姫島産黒曜石製の石鏃である。

Ⅱ1層（第44図419～426、第45図427～446、第46図457～482、第48図486～488）

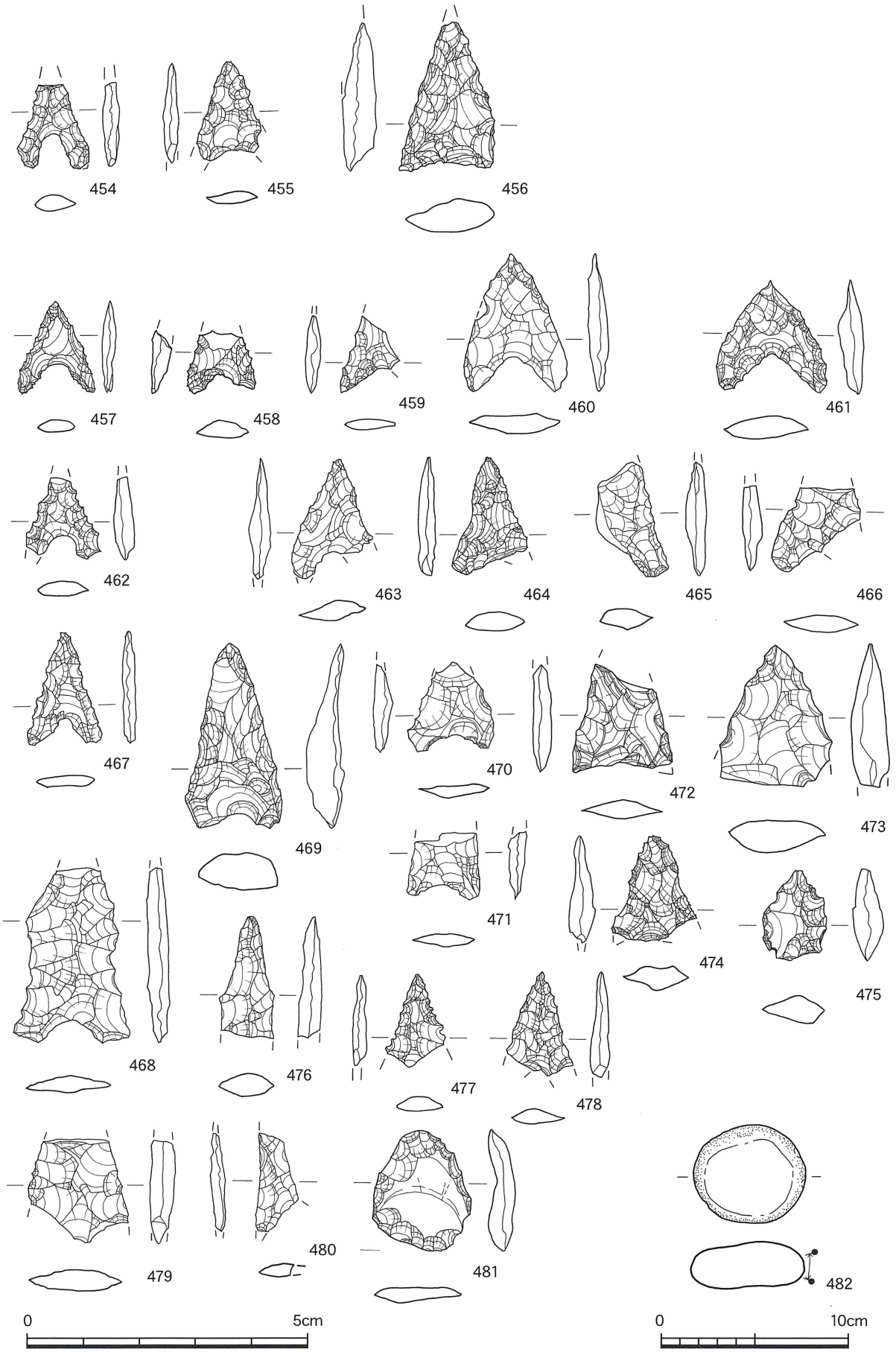
419は口縁端部に太い刻みがみられる。420は縄文時代晩期の深鉢である。外面に細沈線による文様が施されるもので、坂口式に後続する段階である。421～426は無文の深鉢である。後晩期に比定できよう。427～430、433は晩期の浅鉢である。427、428は口縁部が比較的しっかり立ち上がるもので、坂口式である。429は口縁部に粘土紐を継ぎ足すが立ち上がらない。内外面に段または沈線がみられる。坂口式に後続する段階である。430は扁球形の体部から口縁部が短く立ち上がる口縁部である。433は体部下半である。431、432は後期西平式の深鉢頸部下の資料である。両者とも縄文地に横走の沈線文と波状文が交互に施される。434～439は後期石町式である。434、435、437は口縁部で、口縁外面に縄文や疑似縄文が施される。434と437はやや内湾気味である。436、438、439は体部中程から下半にかけての資料で、436は下半に疑似縄文がみられる。440～444は後期初～前葉に比定できる一群と思われる。440は口縁波頂部で、口縁端部上面に太い刻みを施す。441は外面に連続刺突文がみられる。御手洗A式か。442、443は口縁端部が角ばり、外面に縄文と沈線による文様がみられる。444は口縁端部上面に刻みが施される。445は口縁部ちかくの資料である。外面を肥厚させ断面三角形状の口縁形態を呈するものと思われる。縄文時代後期のものであろう。446は内湾する口縁部で、内面口縁下は帯状に肥厚する。外面は縄文地に横走の沈線が2条みられ、内面は肥厚部に縄文が施される。縄文時代中期の船元式である。

石器のうち石鏃は24本（457～480）出土している。このうち457、462、469、470、472がサヌカイト製、475、478が西北九州産黒曜石製、461が珪質岩製で、他は姫島産黒曜石製である。形態的にはⅠ類（正三角形状）が461、Ⅱ類（二等辺三角形状）が457～460、462～467、469～474、477～480、そして明らかなⅢ類（五角形状）が468、476である。Ⅱ類が大半を占めるが、抉りの形態にはバリエーションがあり、a抉りの浅いもの（469～471）、b抉りの深いもの（457～467）、c基部が水平なもの（472～474）などがみられる。以上の石鏃のうちⅢ類及びⅡ類b、cは晩期の所産である可能性が高い。このほか、475は未成品と思われる。481、486、487はスクレイパーで、481が姫島産黒曜石製、486がサヌカイト製、487が姫島産ガラス質安山岩製である。481は円形状を呈する小型品で、全周に刃部が形成されている。486は三角形状の横長剥片を利用したもので、底辺にあたる部分に刃部を形成する。487は半円形を呈するもので、細かい剥離を行い刃部を形成する。482、488は敲石である。482は円形を呈し、側縁に1か所敲打痕がみられる。488は一部を欠損するが円柱状を呈する。端部に顕著な敲打痕が残り、長側面は磨り面として利用されている。

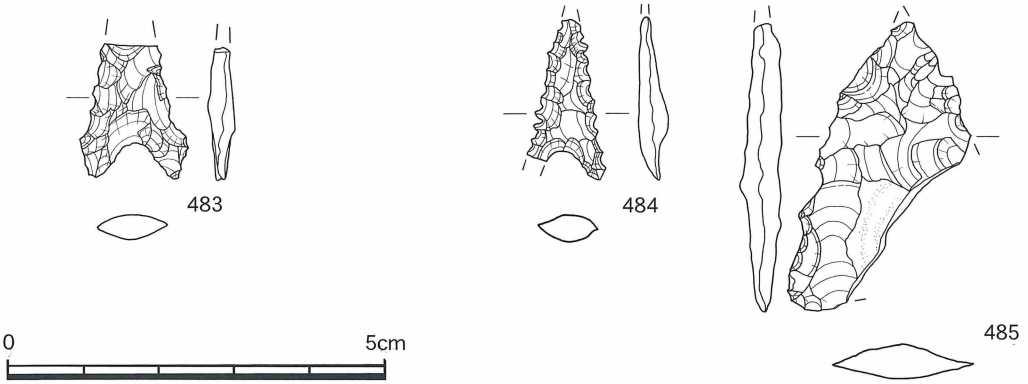
Ⅱ2層（第45図447～449、第47図483）

確実にⅡ2層出土として押さえられるものは少数である。土器（447～449）はいずれも無文の深鉢である。このうち449は内湾気味である。

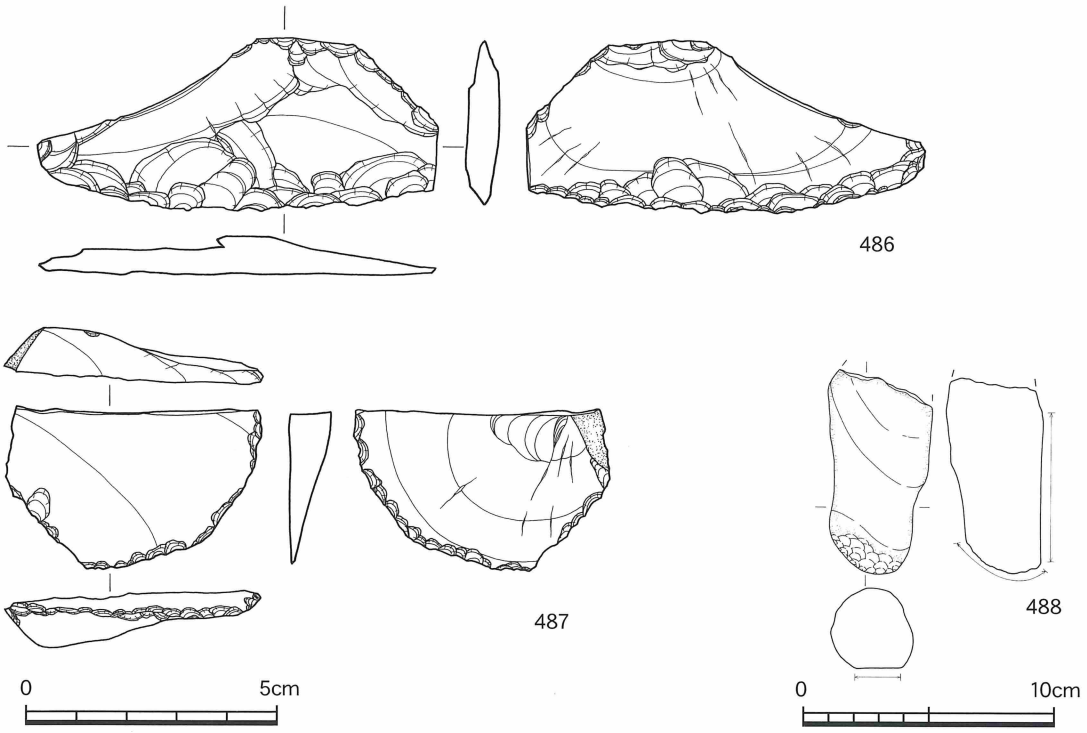
石器は483の石鏃で、先端部を欠く資料である。姫島産黒曜石製でⅡ類の二等辺三角形状を呈する。抉りはbの深いものに相当するがそれほど顕著ではない。両方の脚部とも側縁に意識的に段をいれ、下方に尖り気味に加工している。



第46図　岩鼻岩陰遺跡6区出土石器1(S=1/1，1/3)



第47図　岩鼻岩陰遺跡6区出土石器2(S=1/1)



第48図　岩鼻岩陰遺跡6区出土石器3(S=1/3，2/3)

Ⅱ3層（第45図450～452、第47図484、485）

450は深鉢で、口縁部が緩やかに内湾する。外面口縁部下には粗い縄文が帯状に施文される。中期に比定できるものであろう。451は無文土器である。452は平底を呈する底部である。外面には低い隆帯が縦方向にのびる。中期のものであろう。

石器は484、485の石鏃である。484はサヌカイト製で、長い二等辺三角形を呈する。両側縁が鋸歯状を呈する。485は大型のもので、姫島産黒曜石製である。

Ⅱ4層（第47図453）

453は胴部の小破片である。外面に綾杉文状の文様がみられる。

9　試掘トレンチ２

(1)　遺物出土状況（第49図）

平成19年度に行った試掘調査時の調査区である。調査区は2箇所設定され、各々人力で慎重に掘り下げ、包含層の状況を確認した。

トレンチ2は6区から7区にかけての位置に設定されている。調査の結果、縄文時代晩期、後期、中期、前期の包含層があり、各々良好な状況であることが確かめられた。

遺物の出土状況は、奥壁に近い部分の上層に集中することが読み取れる。これは6区での状況と同じで、6区のⅡ1層に対応するものであろう。また、川に近い調査区東側に遺物の集中がみられる。6区でもⅡ3層において、川に近い部分に遺物の集中が確認されており、これに対応するものであろう。

以下、出土遺物を紹介する。

(2)　遺物

土器（第50図489～519、第51図520～545、第52図546～556）

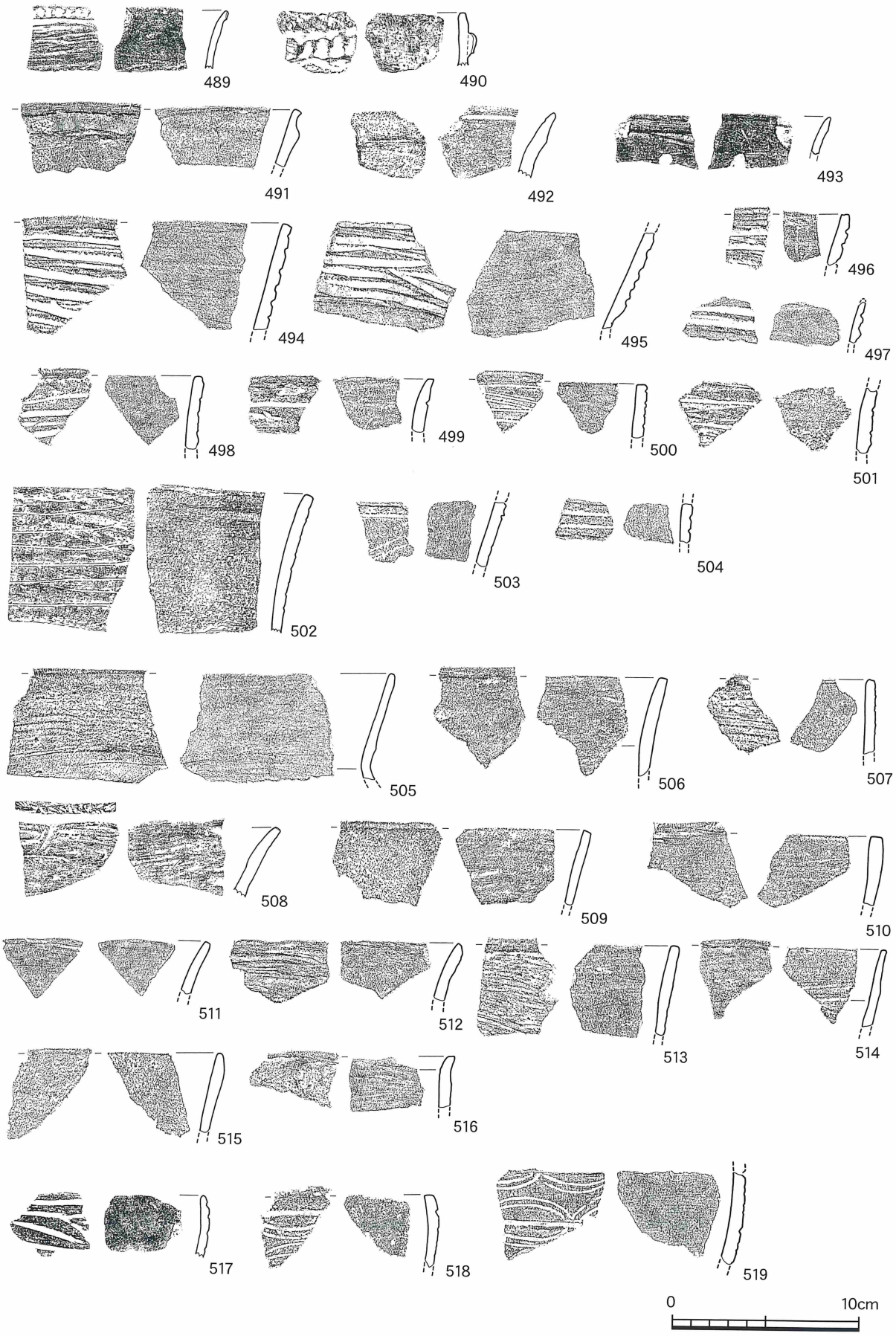
489、490は弥生時代早期の所産である。489は器厚の薄いもので、外面口縁下に刻みを施す。490は口縁下に刻目突帯文を付す。

491～504は縄文時代晩期の深鉢である。491～494は外面口縁下が突帯状をなす。491は粘土紐は継ぎ足しの際の段を強調するものである。西瀬戸内地方の影響下にあるもので、晩期初頭に位置づけられる。492は491と同様な作りと思われるが、491に比べ突帯状を呈する部分が低平である。493も492と同様な器形である。

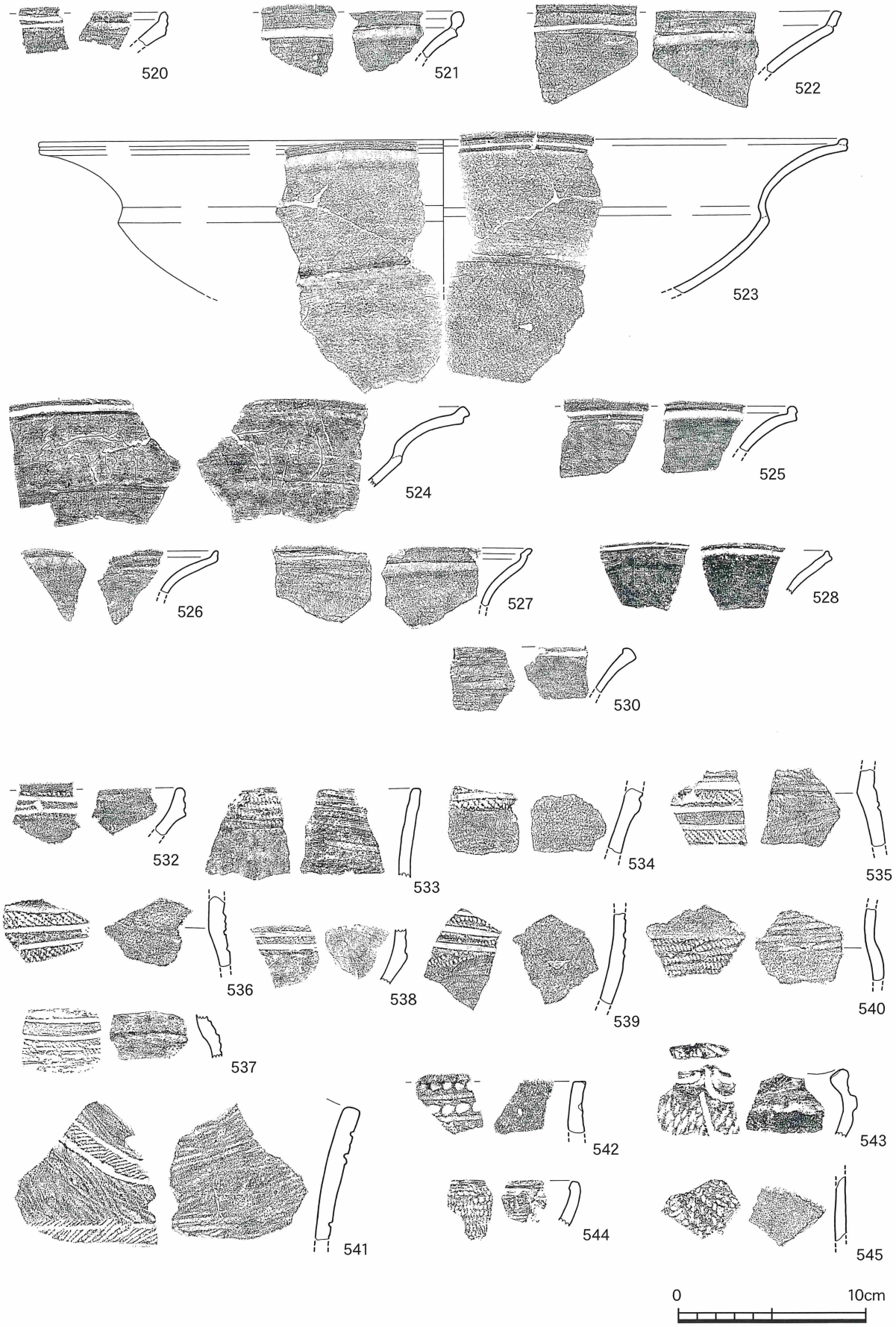
493には焼成後の穿孔がみられる。492、493は晩期坂口式前後に比定されるものである。

494～504は晩期前半に位置付けられる外面に沈線が施される深鉢である。494、495は口縁部が頸部から外方に折れ長く伸びるものである。外面には多条の横走沈線がみられる。坂口式に直続する段階である。496～498も同様のものであるが、小破片のため口縁部の発達状況が不明である。坂口式から直続する時期に比定できる。499～504は外面に細沈線がある。500、502、503は細沈線文を波状あるい

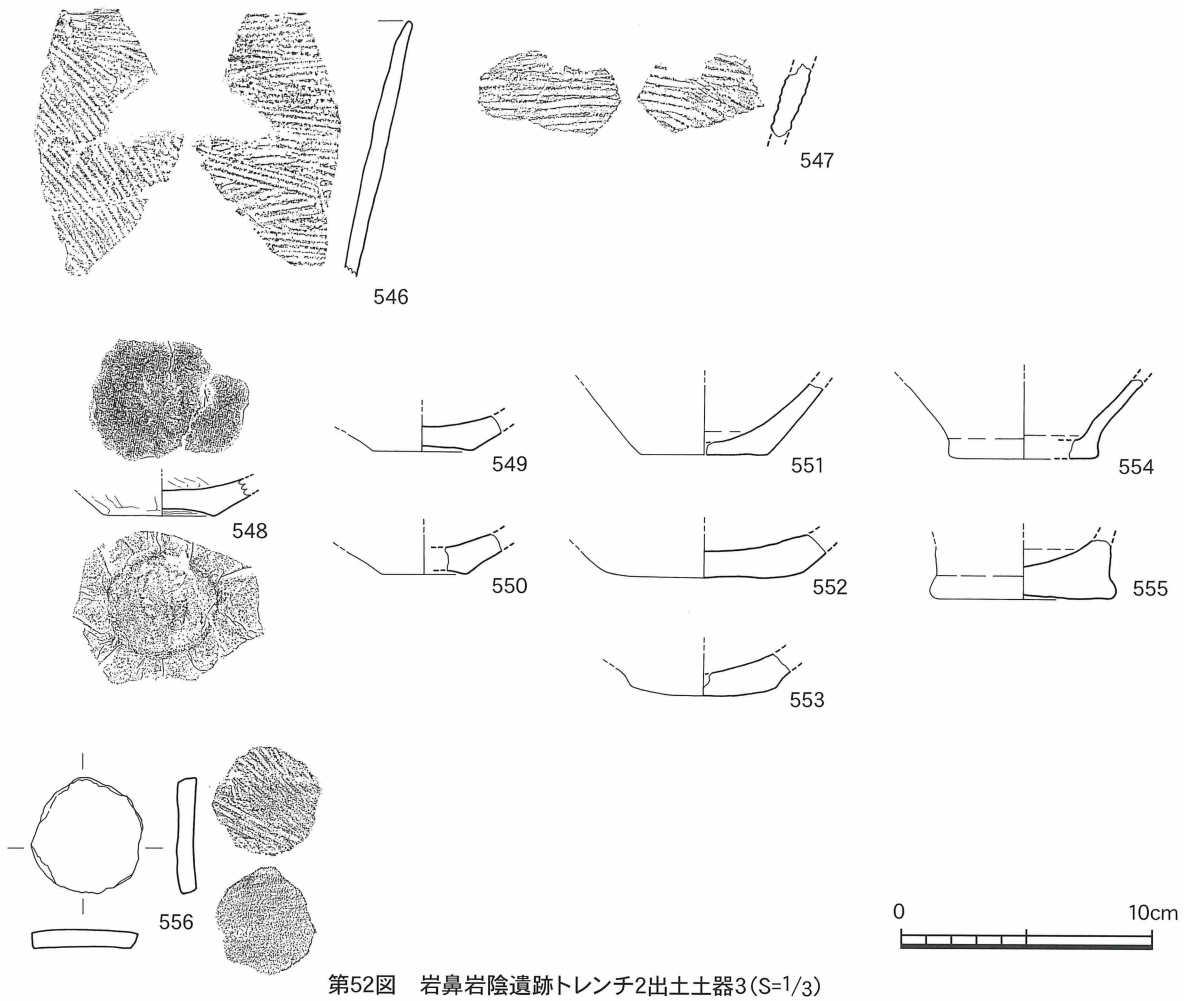
第49図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ2遺物出土状況



第50図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ2出土土器1(S=1/3)



第51図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ2出土土器2（S=1/3）



第52図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ2出土土器3(S=1/3)

は斜めに描くものが加わる。器形的には口縁部が長く発達するものである。時期的には、先の494などの一群よりもさらに後出する。

505～516は無文土器で、条痕やナデによる調整がみられる。505は頚部から外方に折れ口縁部にいたるもので、外面には文様帯を表す段がみられる。坂口式あるいは直続する時期か。他については時期を特定する要素に乏しいため、後晩期として捉えておく。

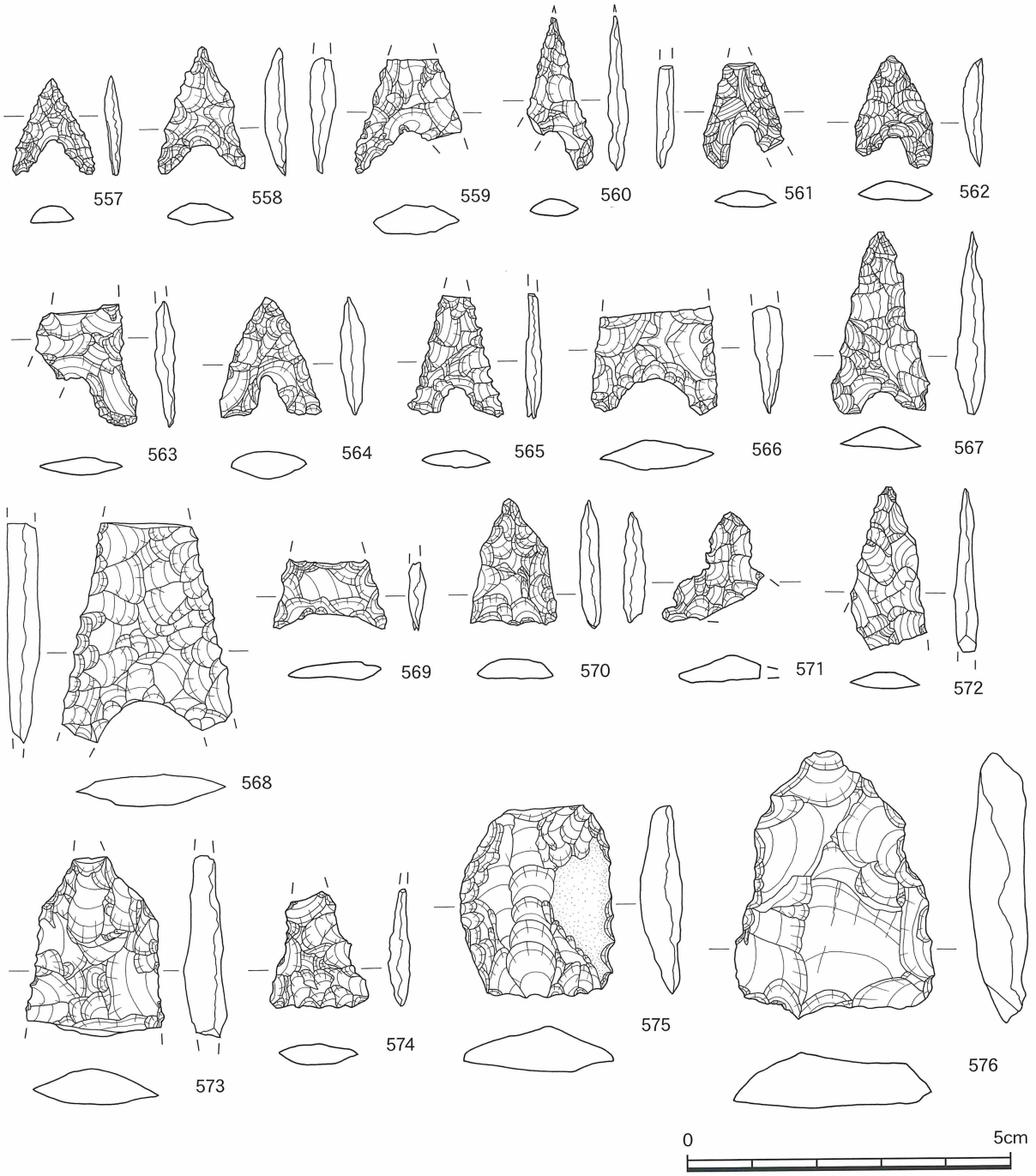
517～519は内湾する体部をもつ鉢で、2条を1単位とし文様が描かれる。晩期前半に比定できる。

520～531は晩期の浅鉢である。520は口縁部が直立し、外面に2条の沈線が施文される。521、522は口縁部の立ち上がりが比較的高い。外面の沈線は粘土紐貼り付けの際に生じる段を利用している。523～528は口縁部の立ち上がりが低い一群である。528は立ち上がりが痕跡程度にわずかにみられる。また、526、527のように外面の沈線が不明瞭なものも出てくる。530は口縁端部が肥厚する。以上は時期幅をもつが、概ね晩期前半に位置づけられよう。

532は口縁部外面に2条の沈線と縄文がみられるもので、後期西平式。533は口縁部外面に帯状に、540は体部下半に、544は内湾口縁の外側に、各々疑似縄文が施文される深鉢である。後期石町式か。534、538は口縁部近く、535、536、537、539は頚部や体部である。各々外面に沈線と縄文による文様が施される。

541は波状口縁を呈するもので、沈線と縄文による文様が施される。後期初頭か。542は外面口縁下に浅い横走沈線と連続刺突文が施される。後期前葉か。

543、545は中期船元式であろう。



第53図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ2出土石器1(S=1/1)

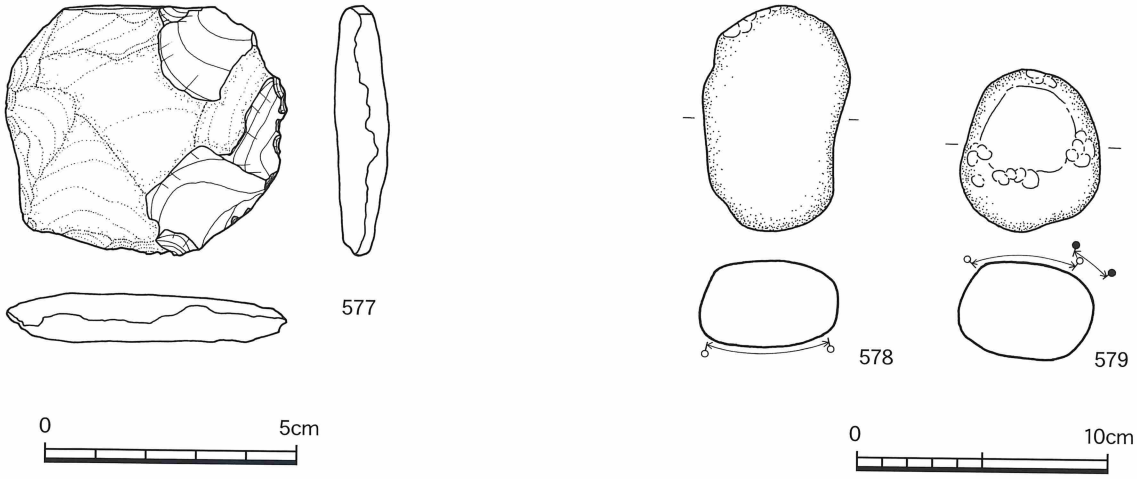
546、547は内外面に条痕が施されるものである。546は体部から直線的に口縁部にいたるもので、口縁部がやや尖り気味である。以上は、縄文前期に位置づけられる。

548～555は底部である。548～550は底面が凹む。551、552は平底。553はレンズ底状を呈する。544、545は円盤貼付状の底部で、555は底面が厚い。

556は土器片加工品である。外面が条痕調整される土器片を、打ち欠きにより円形に整えている。

石器（第53図557～576、第54図577～579）

557～574は石鏃である。このうち569がサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。形態的にはⅡ類（二



第54図　岩鼻岩陰遺跡トレンチ2出土石器2(S=2/3，1/3)

等辺三角形状）とⅢ類（五角形状）がみられる。575は楔形石器である。一部に自然面を残し、縁辺部に細かな調整を行っている。576は石鏃未成品と考えられる。577はスクレイパーで、扁平な粘板岩を素材とし、最小限の剥離を行い製品としている。578、579は磨石である。579には磨り面のほかに敲打痕も残る。

10　7区

(1)　土層と遺物出土状況（第55図）

岩盤の状況は隣接する6区とはやや異なり、奥壁から緩やかに川に向かい傾斜する。ここでは奥壁まで岩盤の傾斜が緩やかなため、奥壁ギリギリまで生活空間としての利用が可能である。奥壁の標高は160.35m、調査区の東端で158.7mである。奥壁から上方には、斜めに立ち上がる。雨落ち線は奥壁から約3.0mで、奥壁に近い遺物密集部が概ね雨落ち線の内側に入る。

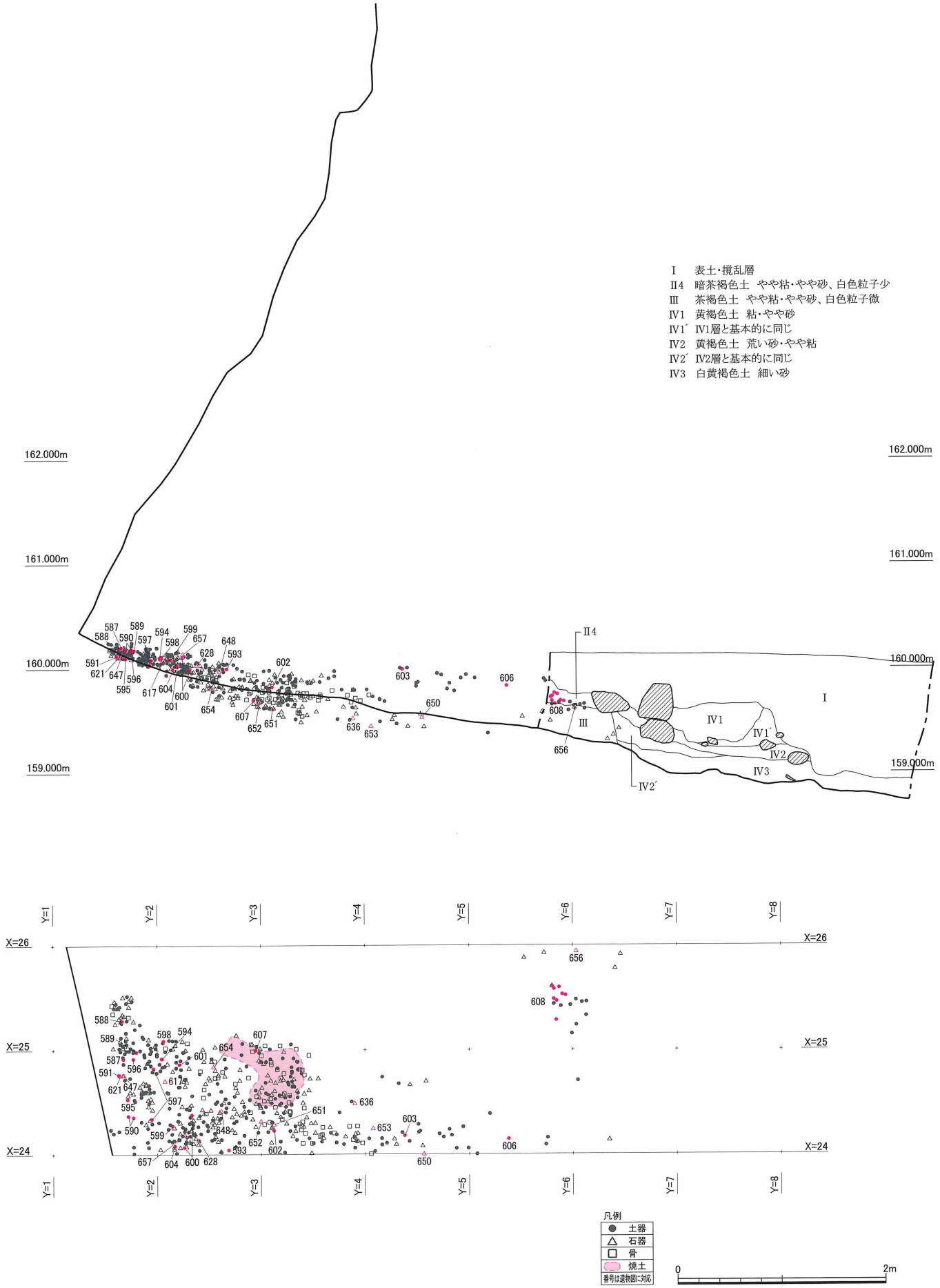
本調査区は試掘トレンチ2に重複するかたちで設定しているため、調査区北壁の土層は試掘調査区により一部残存しない。よって、奥壁からの通しの土層図を図示することができない。層位が分かるのは調査区の東半分である。Ⅰ層が厚く堆積しており、調査区の東に行くほど厚い。Ⅰ層を取り除くと、Ⅱ4層とⅣ層の面となる。本来、中央部から奥壁にかけてⅡ1層、Ⅱ2層、Ⅱ3層が堆積していたと考えられるが、これらの層は調査区東半では残存していない。この状況は隣接する6区でも同様な状況であった。Ⅱ4層の下には岩盤上にⅢ層が堆積する。この層は基本的に無遺物層で、奥壁までは及ばず、調査区中程までの堆積であったと考えられる。Ⅳ層は河川堆積層で、下部は砂質が強い。また、調査区中央からやや壁よりの位置に焼土16がある。不定形を呈するが概ね径0.5mの広さをもち、厚さ0.05mである。調査時の所見では、6区の焼土17と同様な層位である。

遺物の平面的な分布をみてみると、奥壁に近い部分に遺物が集中する。隣接する6区でも、奥壁に近い部分に堆積するⅡ1層、Ⅱ2層から多くの遺物が出土していることから、ここでも同様な状況であったと考えられる。Ⅱ4層では、雨落ち線から大きく出た場所で、同一個体の土器が集中して出土した。完形ちかくまで復元ができるほどであるが、このほかにはほとんど出土していない。完形品が単発で出土するという状況は5区でも確認することができ、縄文前期の岩陰利用について示唆的である。

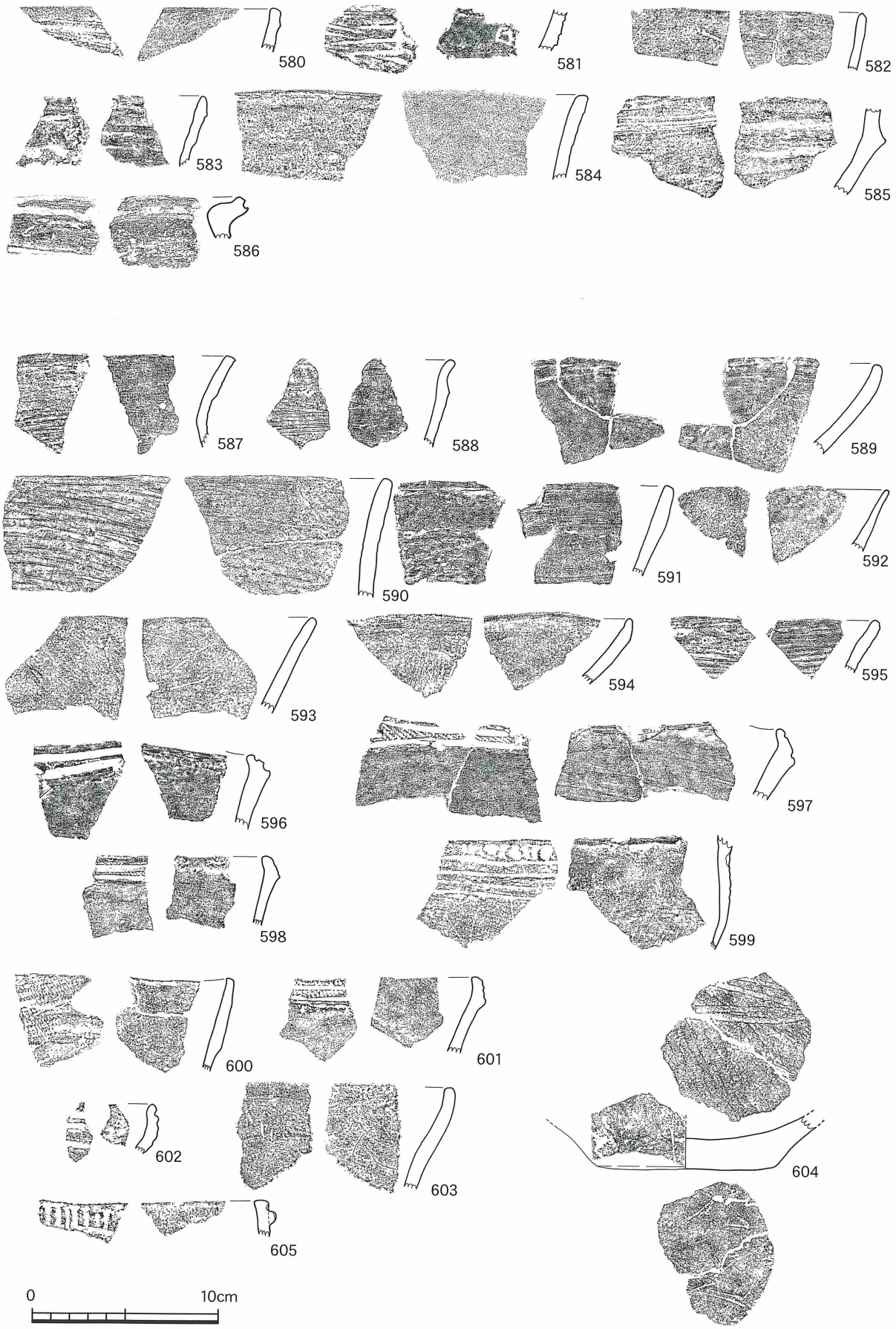
(2)　遺物

Ⅰ層（第56図580～586、第58図609～613）

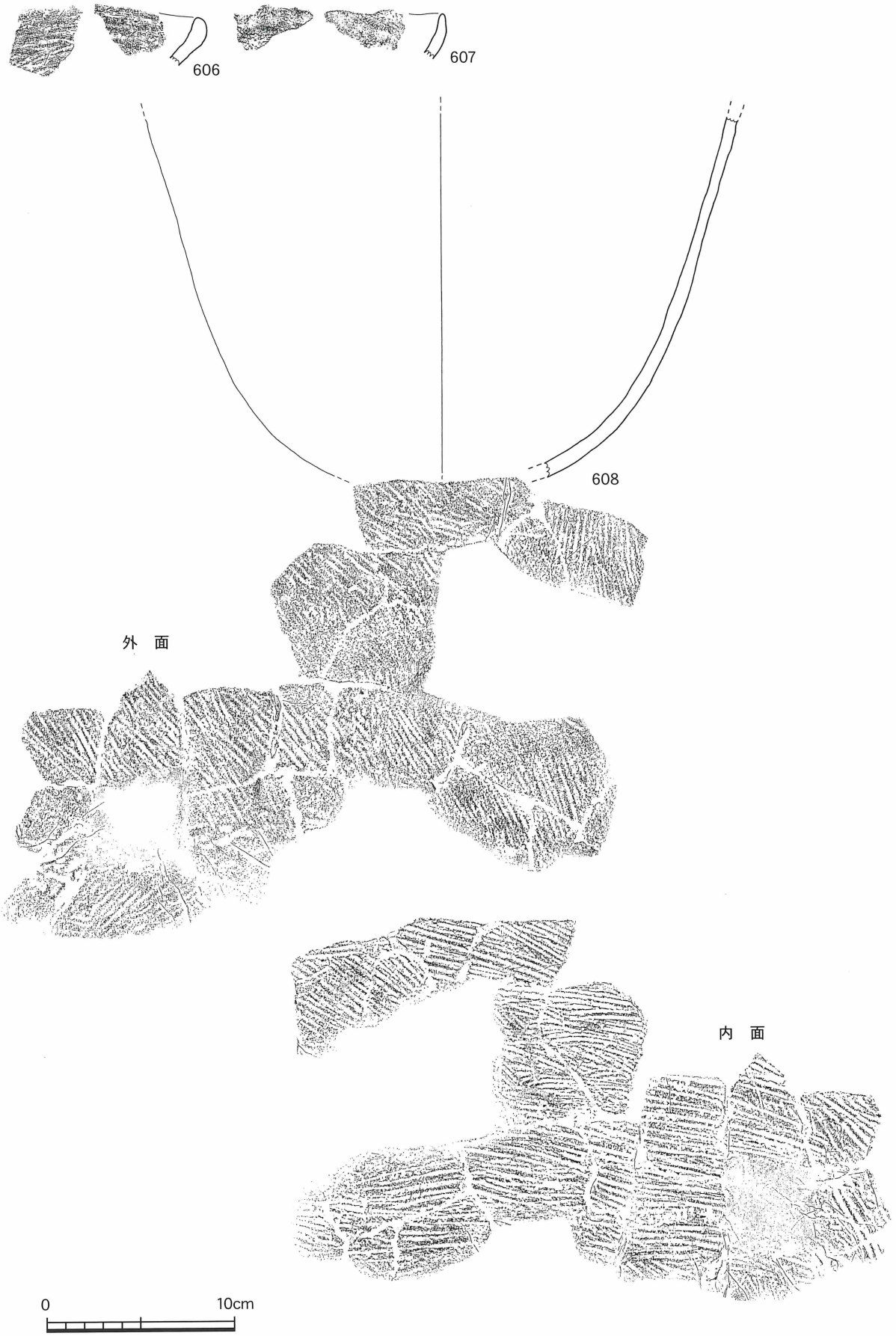
581は縄文時代晩期前半の深鉢で、外面に横走の沈線文がみられる。580、582～585は内外面無文である。このうち585は、頸部から口縁部が立ち上がる。586は後期鐘崎式の口縁部である。



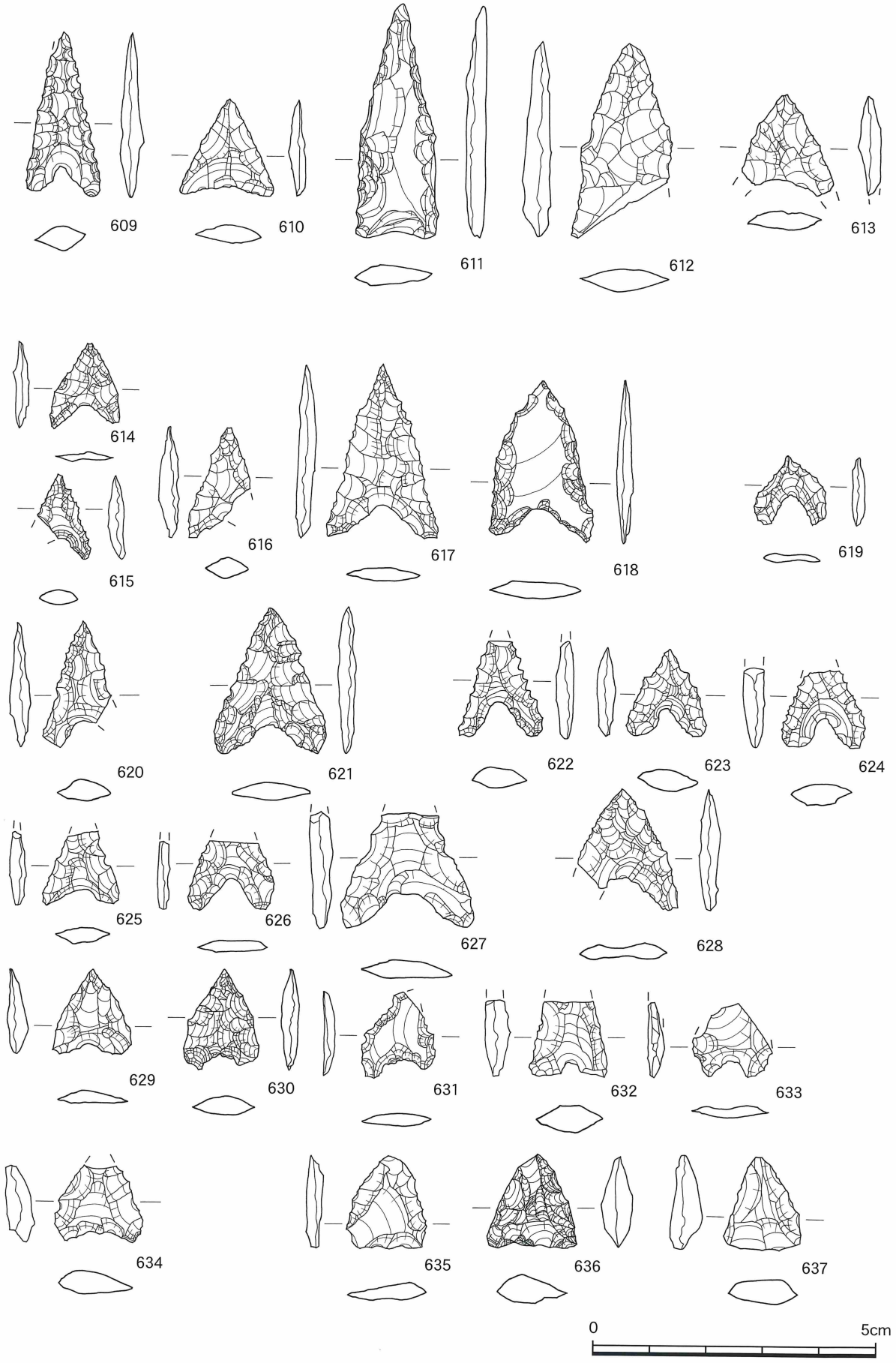
第55図　岩鼻岩陰遺跡7区平面図・土層図（S=1/50）



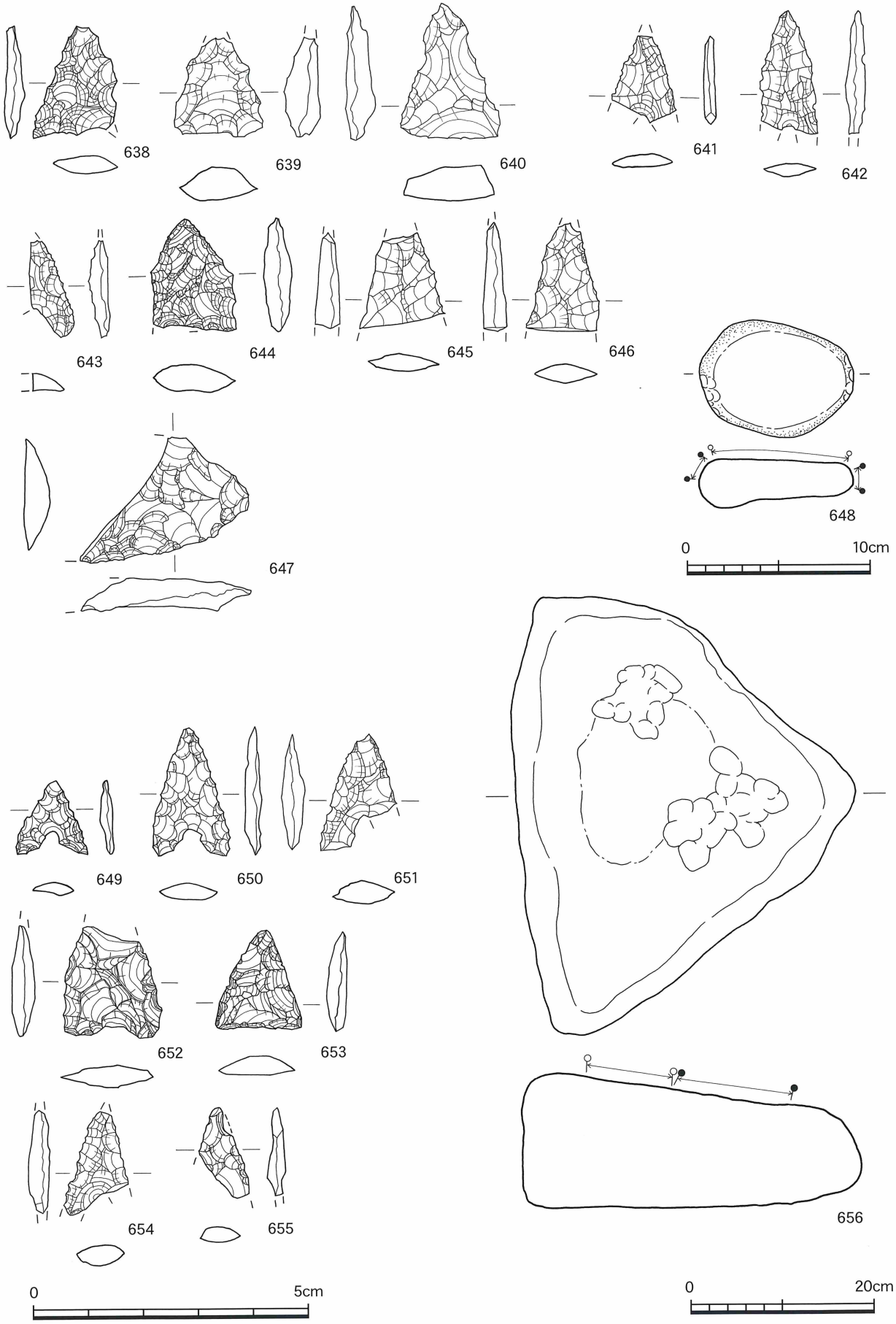
第56図　岩鼻岩陰遺跡7区出土縄文土器1(S=1/3)



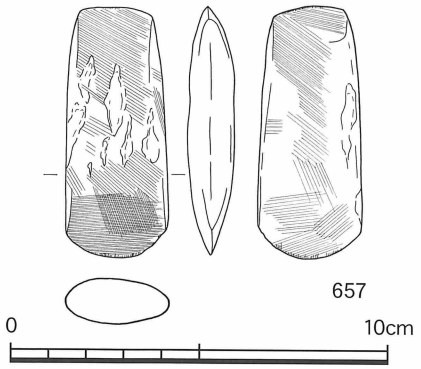
第57図　岩鼻岩陰遺跡7区出土縄文土器2（S=1/3）



第58図　岩鼻岩陰遺跡7区出土石器1（S=1/1）



第59図　岩鼻岩陰遺跡7区出土石器2(S=1/1，1/3，1/6)



第60図　岩鼻岩陰遺跡7区出土石器3(S=1/2)

石器は609～613の石鏃である。611がサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。形態的にはⅠ類（正三角形状）が610、613、Ⅱ類（二等辺三角形状）が609、Ⅲ類（五角形状）が611、612である。

Ⅱ1層、Ⅱ2層（第56図587～601、604、第58図614～635、637～648、第60図657）

587は晩期坂口式の無文深鉢で、肥厚し口縁帯が形成される。588は粘土紐継ぎ足しの段を残すもので、587と同様な時期。589～595は無文土器である。596～599は後期西平式である。596～598は口縁部で、縄文と2条の沈線がみられる。599は胴部で、頸部下に連続刺突文と横走沈線が施される。600は疑似縄文の口縁部文様帯である。601は疑似縄文と沈線がみられる。後期石町式である。604は平底の底部である。

石器のうち、石鏃は614～635、637～646の32本である。このうち614が珪質岩製、620、627、629、632、635、640がサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。形態が明らかなもののうちⅠ類(正三角形状)が619、629～631、634、635、637、Ⅱ類（二等辺三角形状）が614～618、620～628、638～641、Ⅲ類（五角形状）が642、644である。647は西北九州産黒曜石製のスクレイパーである。648は磨石で、端部には敲打痕も残る。657は蛇紋岩製の小型磨製石斧である。

Ⅱ3層、Ⅱ4層（第56図602、603、605、606～608、第58図636、第59図649～656）

602は内湾する口縁部で外面には沈線がみられる。603は内湾気味の口縁部を有する無文土器である。以上は後期石町式か。605は中期船元式で、口縁下に突帯を付し、突帯上から口縁にかけ連続する刺突文を施す。606、607は無文土器で、口縁部内湾気味である。608は前期に位置づけられるもので、内外面とも条痕調整である。底部は丸底と思われる。

石器のうち、636、649～655は石鏃でいずれも姫島産黒曜石製である。形態的にはⅠ類(正三角形状）が636、649、653で、このうち636と653は平基である。その他はⅡ類（二等辺三角形状）である。656は台石で、扁平な大型の石を利用している。片面に磨り跡と敲打痕が残る。

11　8区

(1)　土層と遺物出土状況（第61図）

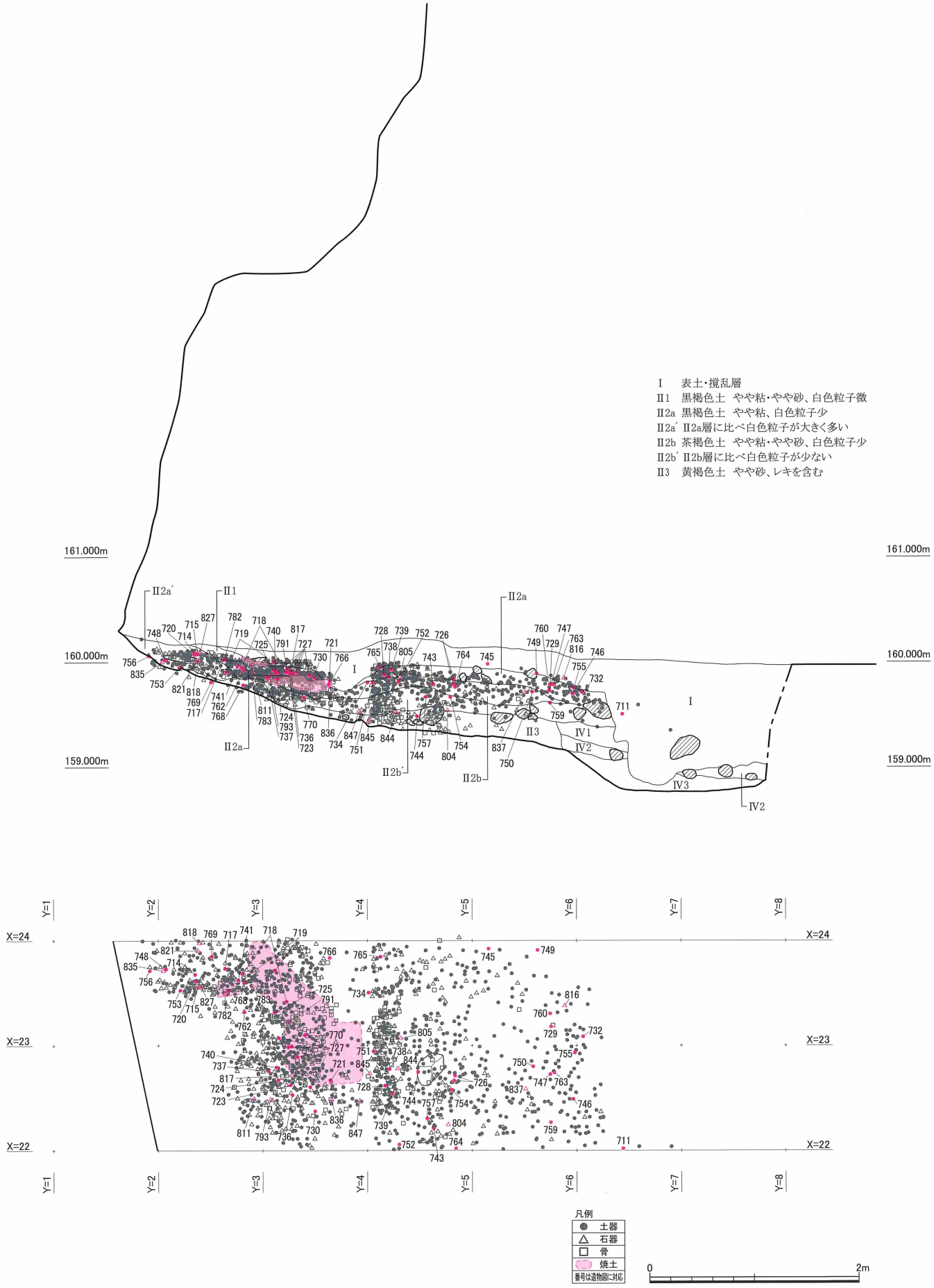
岩盤は奥壁から緩やかに川に向かい傾斜し、奥壁から4.3mの地点で急激に下がる。約0.4m下がった後に再び平坦になる。この下がった部分が後期前半までの旧河道に相当する。標高は奥壁が160.3m、河道に落ちる肩が159.15m、河道の底が158.75mである。岩体は奥壁から上方に斜めに立ち上がり、岩盤から約4m上方で一端段がついた後に再び斜めに上がる。雨落ち線は奥壁から約3.2mで、雨落ち線の内側から多くの遺物が出土した。

本調査区の層位について述べる。Ⅰ層は最奥部が非常に薄いが、平均して0.2～0.3mの層厚である。旧河道部分の調査区東端は大きな撹乱がみられる。Ⅱ1層は奥壁近くに部分的に残存する。層厚0.05mで焼土15が伴う。焼土15は0.3×0.1mで厚さ数cmである。Ⅱ2層は奥壁からのび旧河道の埋土上にのる。このことから、Ⅱ2層が形成された縄文時代後期には河道が埋没していたことが分かる。Ⅱ2層中に焼土14がみられる。焼土14は1.5×0.6mの広さで、厚さ0.1mである。この焼土が形成された面から掘りこまれ、立石遺構(SX004)がみられる。Ⅱ2層は焼土を境に上下に分けられ、上層をa層、下層をb層とする。岩盤に直接のる最下層からは縄文時代前期、中期の遺物が出土する。よって、この最下層がⅡ3層に相当すると考えられる。Ⅱ4層については明確ではない。Ⅱ3層、Ⅱ4層がみられるのは本区までで、9区以降では確認できない。Ⅳ層は河川堆積層で、下部は砂質が強い。

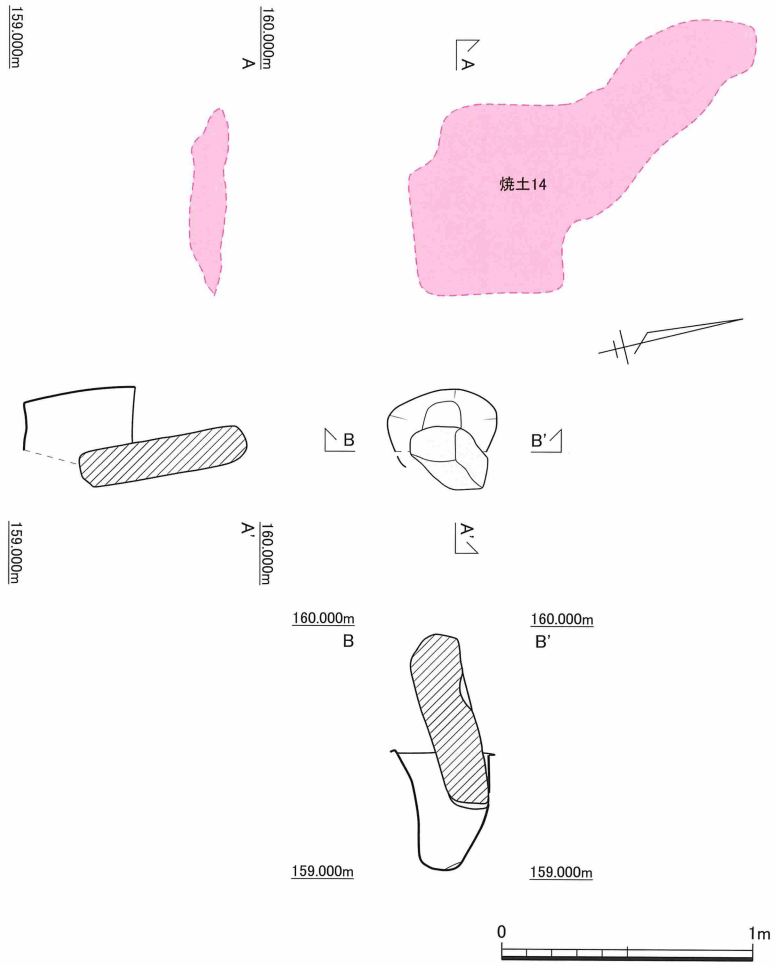
遺物の平面的な分布をみてみると、Ⅱ2層では焼土14周辺に遺物が集中する（後期集中部①）。

(2)　立石遺構（SX004）（第62図）

立石遺構は、焼土14の東側約0.3mに位置する。石を立てるために掘りこまれた面は、焼土14が形成された



第61図　岩鼻岩陰遺跡8区平面図・土層図（S=1/50）



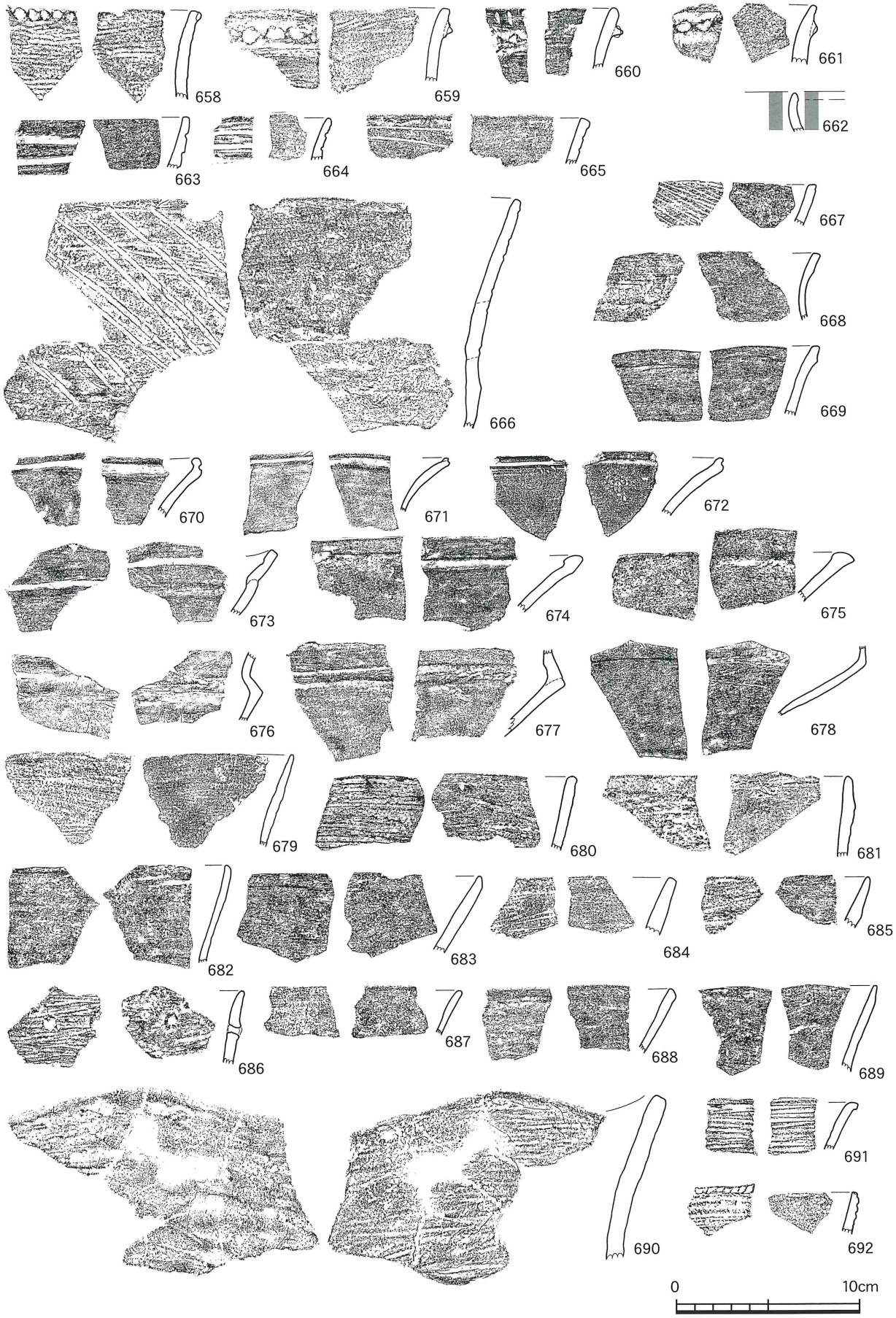
第62図　岩鼻岩陰遺跡8区立石遺構(SX004)

面と同じⅡ2a層である。径0.3m、深さ0.3mの柱穴状の掘り込みを行った後、直方体の石を差し込み、ほぼ直立するように立てている。立石そのものに顕著な敲打痕等は確認できない。位置的にみて焼土と一体となったものと考えられるが、その性格は明確にしがたい。同様な遺構として、周防灘沿岸における縄文時代後期鐘崎式～石町式の竪穴建物内の炉跡周辺に立てられる立石遺構がある。本遺跡の立石の時期が石町式と考えられることから、その関連性が注目される。焼土層は厚く広いことから、かなりの時間をかけて形成されたものと思われる。立石遺構と併せた周辺部が継続的に利用されていたのであろう。そのためには、風雨を凌ぐ何らかの施設が構築された可能性が想定される。柱穴等を検出するために周辺を精査したが、遺構を検出するにはいたらなかった。

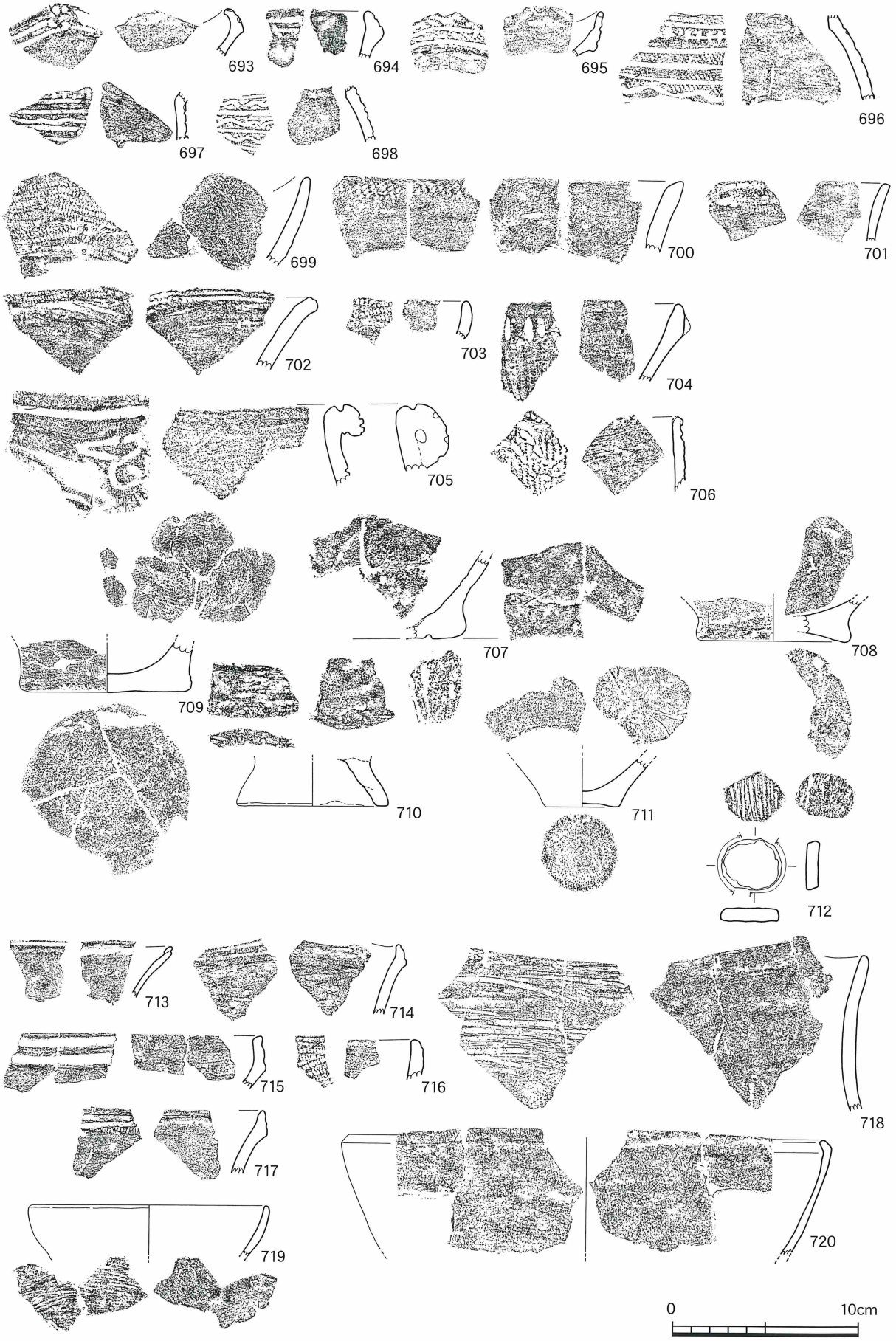
(3)　遺物

Ⅰ層（第63図658～692、第64図693～710、712、第66図771～781）

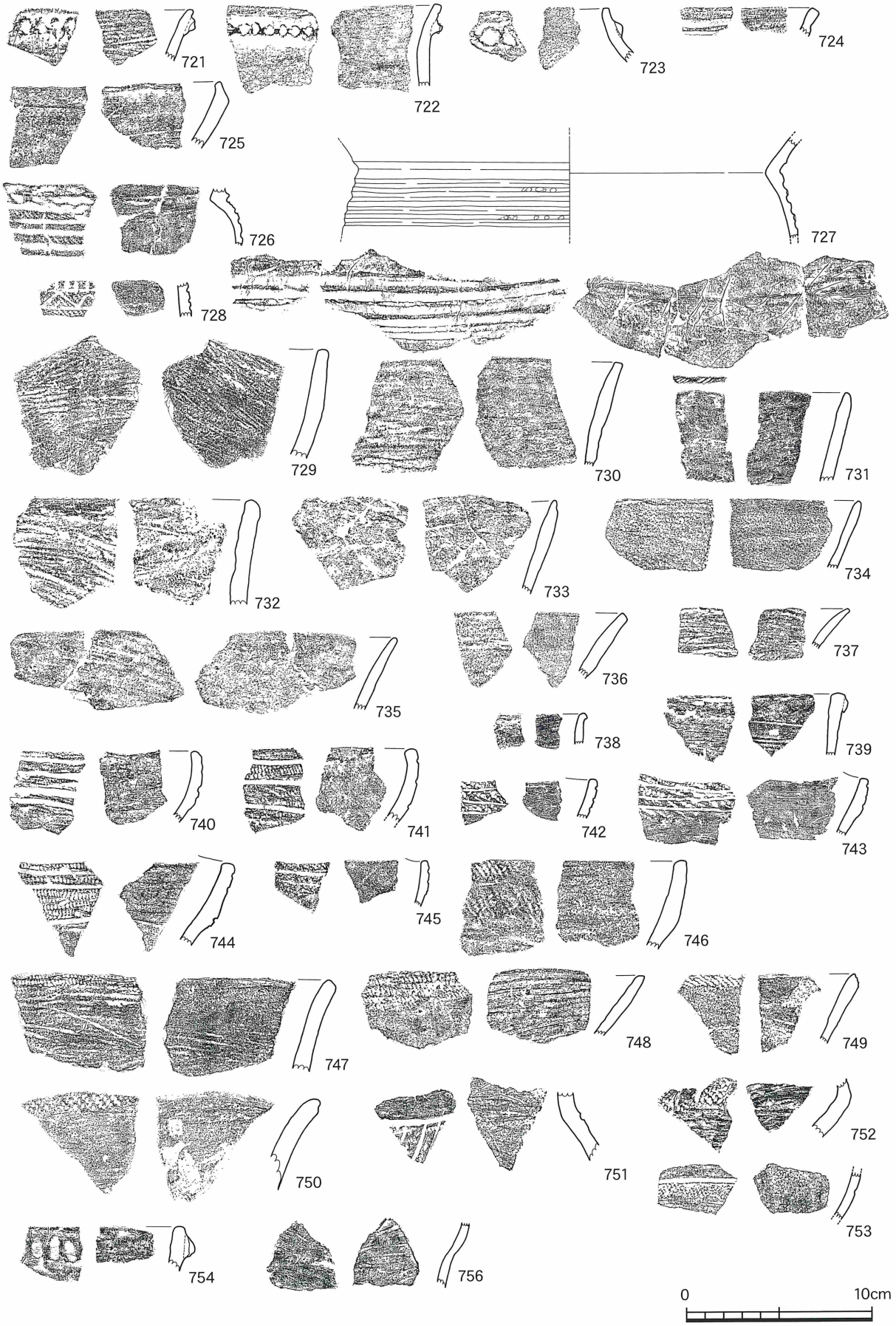
658～662は弥生時代早期のものである。658は口縁端部外面に刻みを施す。659～661は外面口縁下に刻目突帯が1条付される。662は壺の口縁部で、内外面に赤色顔料の塗布がみられる。663～667は外面に沈線が施される晩期前半の深鉢である。663、664は横走の沈線文がみられる。665、667は細沈線が施されるもので、667は斜方向に施文される。666も斜方向に施文されるが、沈線が667に比べやや太い。668、669も晩期前半の深鉢である。668は口縁部外面が帯状に肥厚する。669は粘土紐接合時の段を利用し突帯状にみせる。670～678は浅鉢である。670～672は口縁部が短く立ち上がる一群である。670は粘土紐貼り付け時の段を利用し沈線状とする。671、672は口縁部の退化が顕著でほとんど立ち上がらない。673は口縁内面の段が退化し、沈線のみとなる。674、675は口縁部内面が丸く肥厚するもので、上菅生B式段階に出現する。676～678は浅鉢の体部である。679～692は無文土器で、後晩期の所産と思われる。このうち686には穿孔がみられ、690は波状口縁を呈する。693～698は後期西平式である。693～695は口縁部で、693と694は2条の沈線文が、695は縄文と2条の沈線文がみられる。696～698は頸部から胴部にかけての資料である。696は連続刺突文下に縄文と横走沈線と波状沈線が施される。697と698は縄文がみられない。699～704は後期石町式である。699は波状口縁を呈する深鉢で、外面に疑似縄文がみられる。700～703も口縁部外面に疑似縄文が施されるが幅がせまい。704は口縁部外面が断面三角形状に肥厚し太い刻みをいれる。705は鐘崎式の口縁部で橋状把手が付く。706は外面に縄文が施される。707～710は底部である。このうち710は高い高台状を呈する。712は土器片加工品で、打ち欠きにより円形に整える。



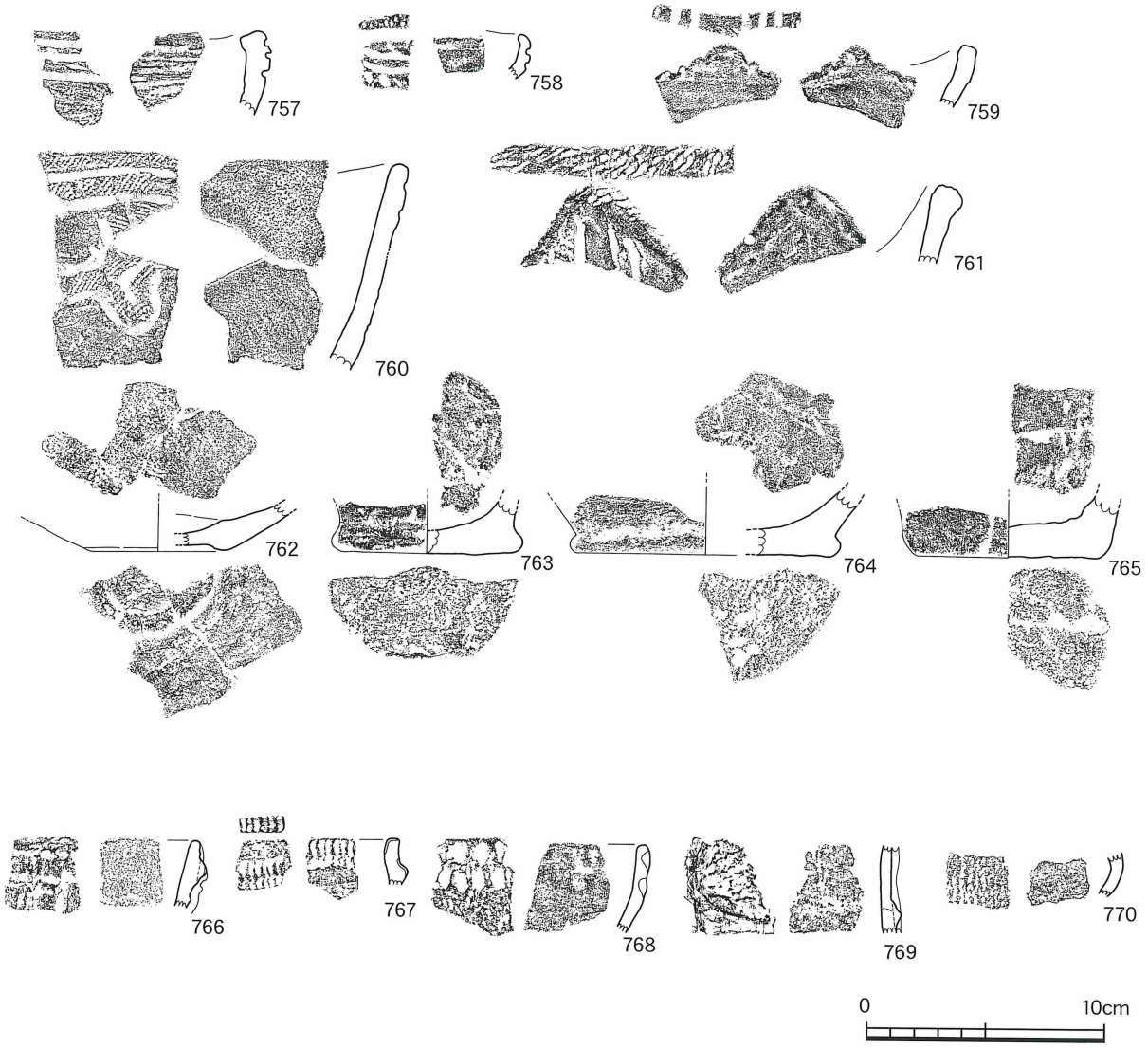
第63図　岩鼻岩陰遺跡8区出土縄文土器1(S=1/3)

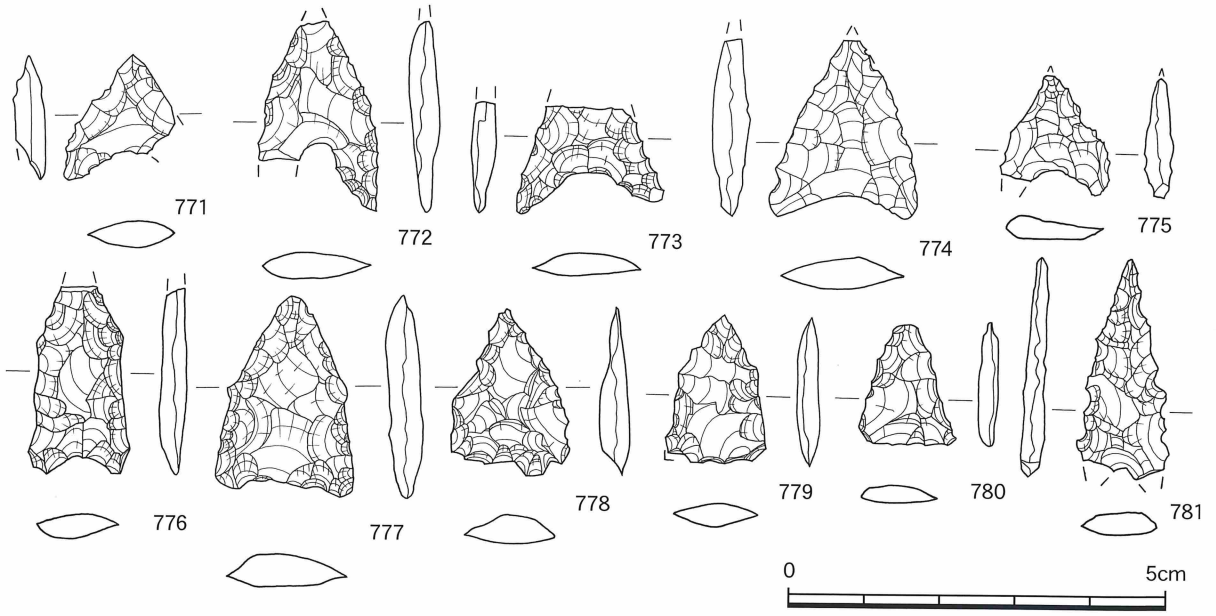


第64図　岩鼻岩陰遺跡8区出土縄文土器2(S=1/3)



第65図　岩鼻岩陰遺跡8区出土縄文土器3（S=1/3）





第66図　岩鼻岩陰遺跡8区出土縄文土器4(S=1/3)、石器1(S=1/1)

石器は石鏃11本である。このうち780がサヌカイト製で、他はすべて姫島産黒曜石製である。形態的には抉りの浅いものや平基が多い。また、五角形状を呈する776、777、779は晩期の所産であろう。

Ⅱ1層（第64図713～720、第67図782～784）

Ⅱ1層からⅡ2層にかけては連続的に多くの遺物が出土することとⅡ1層が薄いため、明確にⅡ1層とⅡ2層の遺物を分けて捉えることができない。縄文時代後期後半以降の連続的な使用の中で形成されたものか、時期的には縄文時代後晩期のやや幅のあるものがみられる。焼土15が伴っており、本層の形成は縄文時代晩期～弥生時代早期と想定される。

713は晩期の浅鉢で口縁部の立ち上がりが低い。前半でも新相にあたる。714は後期西平式。715は口縁部外面に2条の凹線文が施されるもので、後期三万田式。716、717は外面に疑似縄文がみられるもので、後期石町式か。718は緩やかに外反し波状口縁を呈する無文土器で、晩期前半に比定できる。720は無文で口縁部が短く内側に折れるもので、西平式。719は小型の無文土器である。

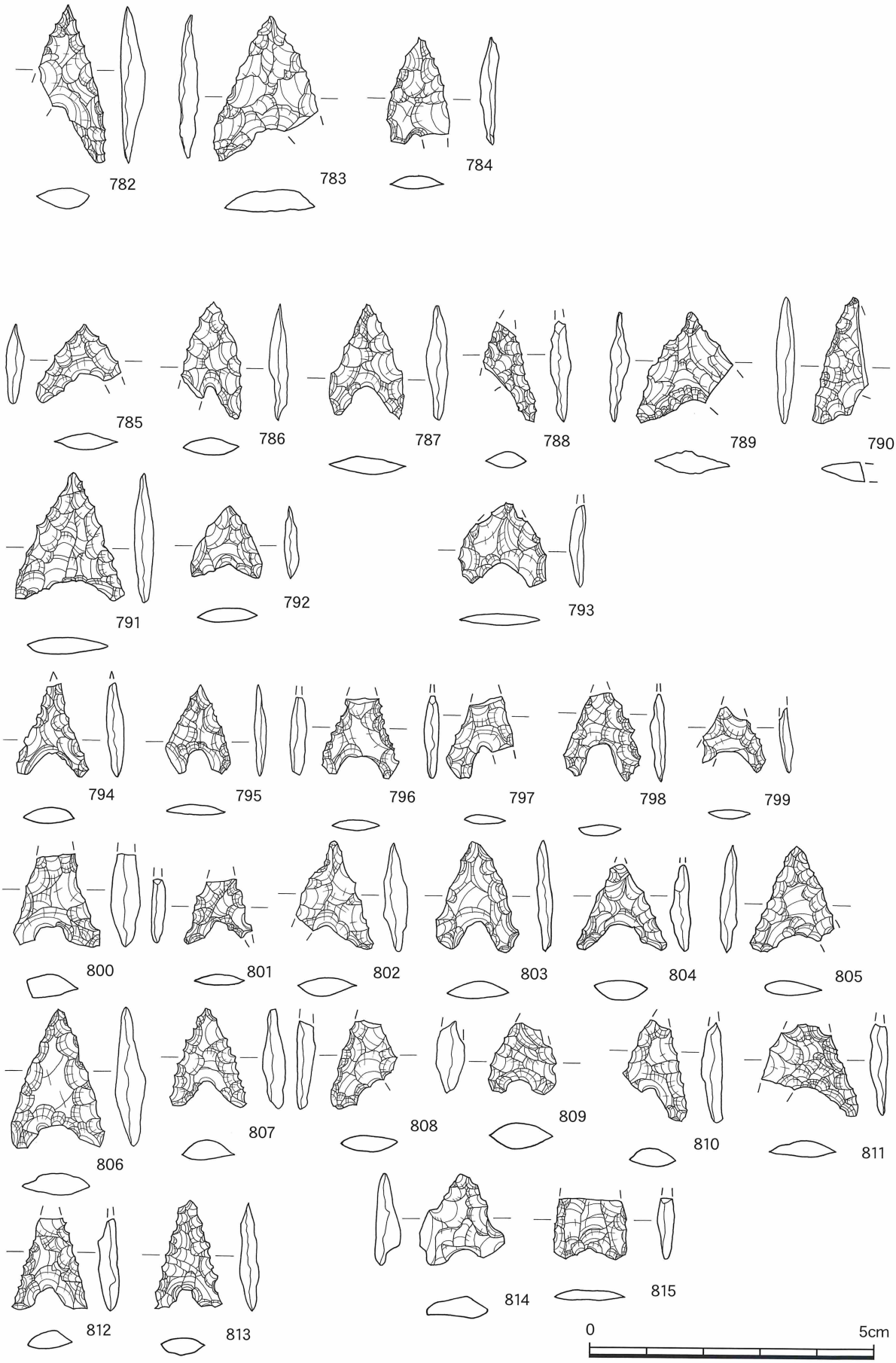
石器は782～784の石鏃3本で、いずれも姫島産黒曜石製である。

Ⅱ2層（第65図721～756、第66図757～766、第67図785～815、第68図816～833、835、第69図836、837）

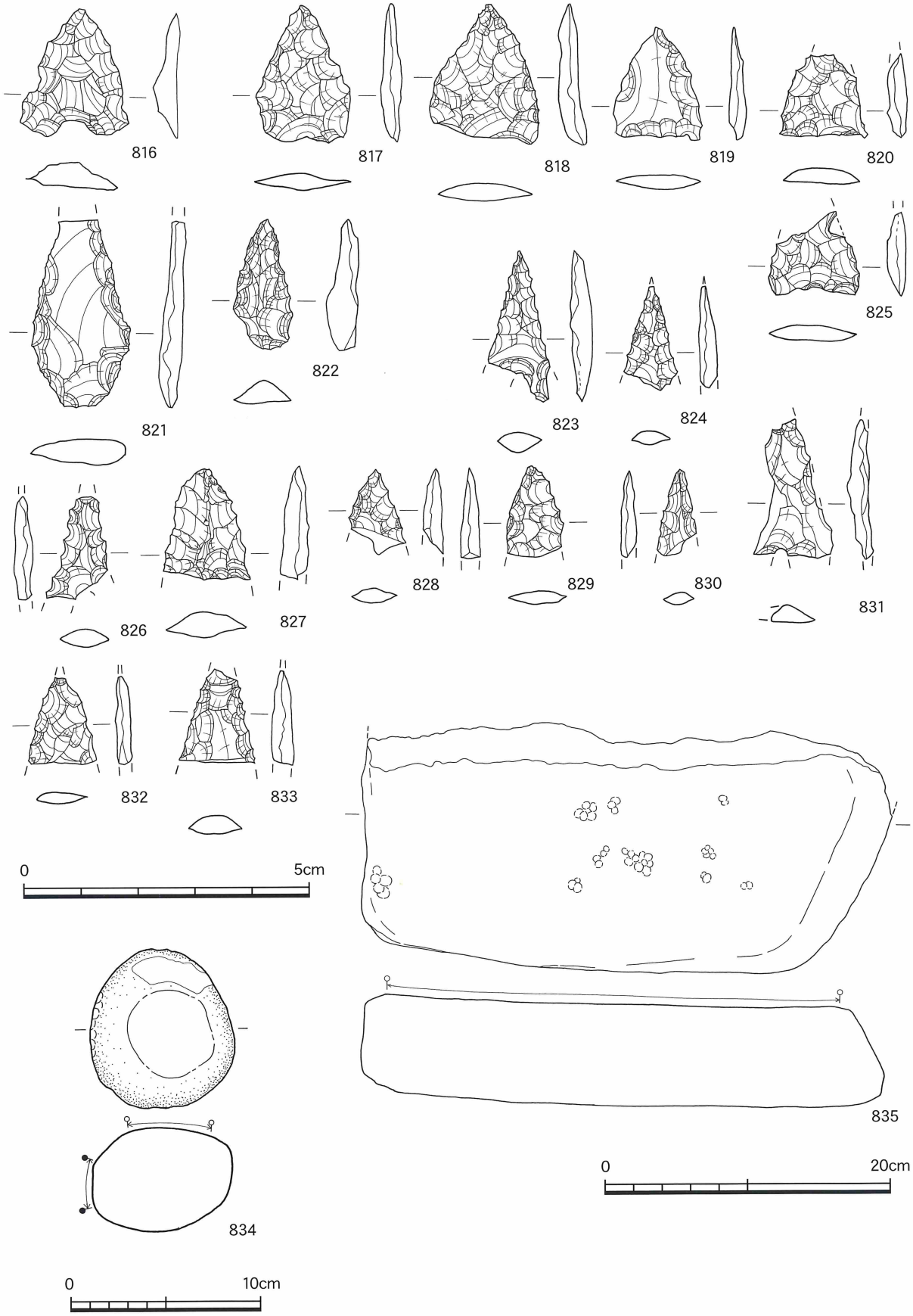
Ⅱ2層出土土器は、縄文時代中期～弥生時代早期の幅のあるものである。このなかで、弥生時代早期、縄文時代晩期、後期初め、中期段階の土器は少量で、主体をなすのは石町式から西平式の縄文時代後期後半のものである。Ⅱ2層は焼土面の上下でa層とb層に分かれるが、多くの土器は上層のa層からの出土である。また、両層に時期的な大きな差は認められず、少なくともa層は確実に縄文時代後期後半の形成と考えられ、焼土14及び同層から掘りこまれる立石遺構も石町式段階に位置づけられよう。

721～723は弥生時代早期の刻目突帯文甕である。724は外面に沈線文が施される小破片で、晩期前半の深鉢であろう。725は無文の深鉢で、口縁部が内方に短く折れる。後期西平式から三万田式に相当する。726～728は西平式の頸部から胴部である。726は頸部下に列点文があり胴部に縄文と横走沈線文を施す。727は胴部に縄文と横走沈線がみられる。728は縄文地に、列点文に加え横走沈線の間に連続三角文を配する。729～739は無文の深鉢である。740～746、752は口縁帯が発達する一群で、後期石町式の古相に位置づけられる。緩やかに内湾するもの（740、741、752）と内湾が顕著でないもの（742～746）がある。740、741、744は疑似縄文と沈線文が施される。742、743、745は縄文と沈線文が施文される。746、752は口縁部外面に広く帯状に縄文がみられる。747～750は口縁端部などに疑似縄文や縄文が施文される深鉢で、やはり石町式である。751、753は胴部資料で、外面に縄文と沈線がみられる。754は口縁部外面を肥厚させ断面三角形状にし、肥厚部に刻みをいれる。以上3点も石町式であろう。756は口縁部から頸部にかけての資料で、無文である。757は内湾口縁を呈し、外面に横走沈線が3条みられる。758は内湾する口縁部の外面に、沈線文と刺突文が施される。759は無文深鉢の波頂部で、波頂部をはさんで口縁端部上面に刻みを施す。757～759も石町式か。760は外面に沈線と縄文による文様がみられる。後期初めの中津式か。761は深鉢の波頂部で端部が外側に肥厚する。外面には縦走の沈線文があり、口縁端部上面には縄文が施される。後期のコウゴー松式か。762～765は底部である。762は凹み底、763と764は円盤貼付状である。以上の底部は後晩期の所産と思われる。766は外面に縦横の突帯が付されるもので、中期の船元式である。

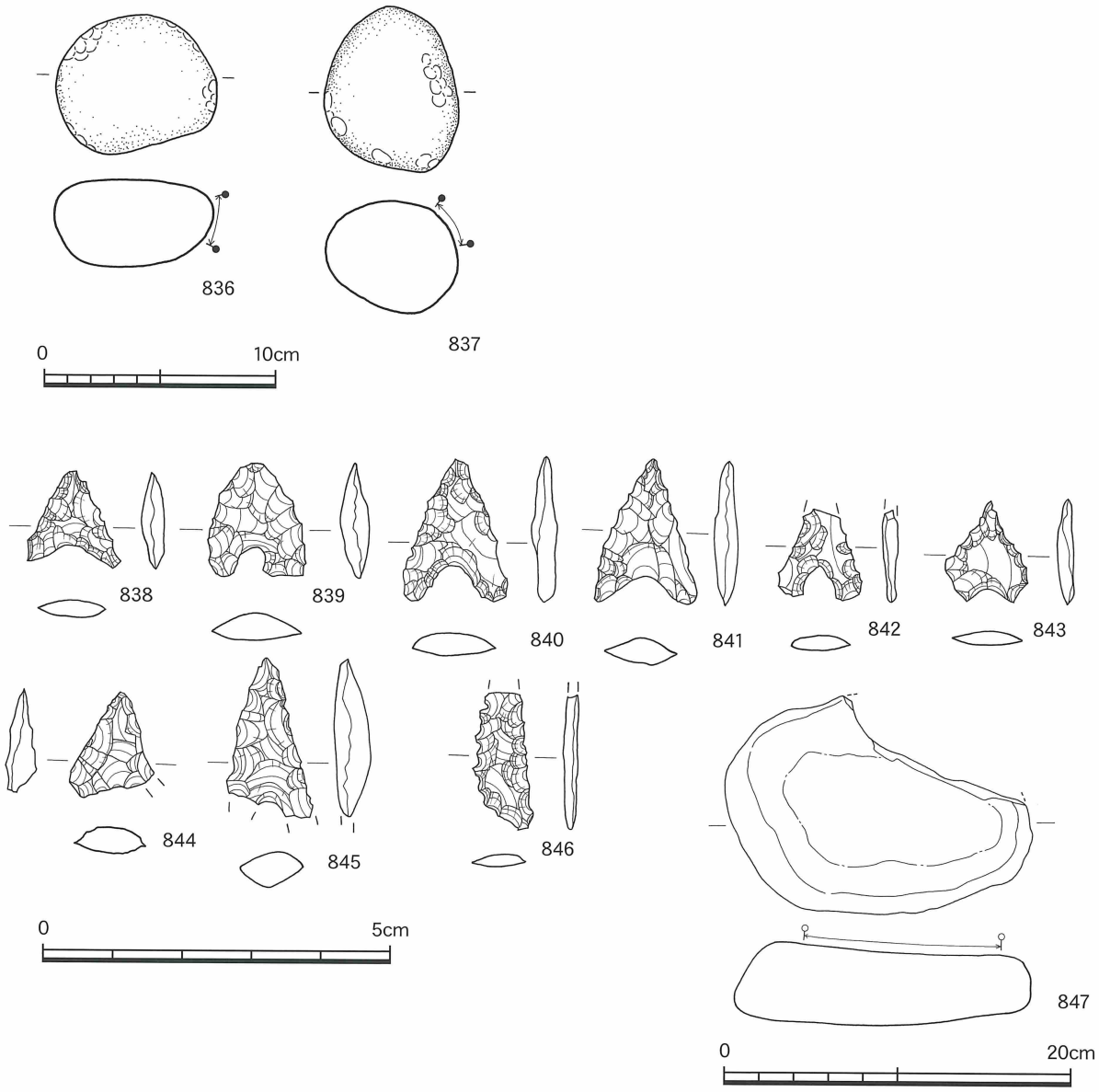
石器のうち、石鏃は49本（785～833）である。石材は大半が姫島産黒曜石製であるが、789、792、793、794、796、817、819、821、831、833はサヌカイト製である。形態的には、Ⅰ類（正三角形状、）、Ⅱ類（二等辺三角形状）、Ⅳ類（尖頭器状）のものがあり、Ⅱ類が圧倒的に多く、次いでⅠ類である。Ⅲ類（五角形状）については確認できない。835は台石である。Ⅱ2a層の奥壁に近い場所から出土した。長さ37.2cmの扁平な石材を利用している。上面に磨った痕跡と敲打痕が確認できる。836、837は敲石である。836は、やや扁平な円礫を利用したもので、側縁部に敲打痕がみられる。837は円礫を利用したもので、一部に敲打痕が残る。



第67図　岩鼻岩陰遺跡8区出土石器2(S=1/1)



第68図　岩鼻岩陰遺跡8区出土石器3（S=1/1，S=1/3，S=1/4）



第69図　岩鼻岩陰遺跡8区出土石器4（S=1/1，S=1/3，S=1/4）

Ⅱ3層（第66図767～770、第69図838～847）

本区におけるⅡ3層出土遺物は少量である。1区～6区のⅡ3層出土遺物量に比べると、その差は歴然である。本区は、中期遺物の包含層であるⅡ3層の南端にあたる。

767は外面口縁部下に突帯を付し、突帯上及び口縁端部上面から内側にかけ連続刺突文が施される。768は体部から内湾気味に口縁部にいたる。外面口縁下に刺突文が2段にわたりみられる。769は胴部資料である。外面には縄文地に断面三角形の突帯を弧状に付す。770は外面に縄文が施文される。以上は、768が前期で、他は中期の船元式である。

石器のうち、838～845は石鏃である。このうち842がサヌカイト製で、他は姫島産黒曜石製である。形態的にはⅠ類（正三角形状）、Ⅱ類（二等辺三角形状）があり、Ⅱ類が多い。また、基部の抉りについては、a抉りの浅いもの（838、841、843、844）とb抉りの深いもの（839、840、842、845）があり、c基部が水平なものはみられない。846は姫島産黒曜石製のスクレイパーである。石鏃と同様な大きさであることから、植刃器として利用された可能性がある。847は磨石である。長さ17.2cm、厚さ4.4cmの扁平な礫を利用したもので、片面に磨り面が残る。